

京都橘大学 文化財調査報告 2010

田口山弥生時代遺跡・山科本願寺跡土墨・山越古墳群・鹿谷古墳群大市支群

2011年3月
京都橘大学 文学部

はじめに

本学の文化財学科は1996（平成8）年に設置申請し、同年12月に認可され、1997（平成9）年4月より開設された。その設置理由を当時の門脇禎二学長は「①文化財・伝統文化を尊重する心と専門的知識・技能の基礎を身につけて、研究者・職業人をめざしたりあるいはすぐ社会生活に入る学生の育成と、②体系的な「文化財学」の創出をめざす研究の進展、を目的においた」とした。

そのうちの専門的知識・技能の基礎を身につける一環として、本学では2000（平成12）年3月から開始した京都市伏見区にある法琳寺跡の測量調査以降、大阪府、京都府、滋賀県をフィールドの中心とし、発掘・測量調査を継続して行ってきた。調査には多くの学生が参加し、現場における実践的な調査の方法や技能を学び取っている。

本年度は、田口山弥生時代遺跡、山科本願寺跡土壘、山越古墳群、鹿谷古墳群大市支群において発掘調査や測量調査を実施した。その成果を本報告書で報告する。報告書を作ることもまた学生が調査から報告書発行までの一貫した流れを知るための大切な作業であり、これらの活動全体を通じ、文化財のより一層の周知に役立てられれば幸いである。

我々がここでこうした作業と勉学に向かえるのは、ひとえに調査にあたらせていただく際の現地の方々や、多くの関係者の方々のご理解・ご協力の賜である。この場を借りて心から感謝申し上げる。今後とも文化財調査についての変わらぬご理解、ご協力、ご指導を賜りたく、お願ひ申し上げる次第である。

2011年3月31日

京都橘大学文学部

例　　言

1. 本書は、京都橘大学が2010年度に実施した大阪府枚方市田口山弥生時代遺跡、京都市京都市山科本願寺跡土壘、京都市右京区山越古墳群、亀岡市鹿谷古墳群大市支群の調査報告と、その調査に関連した「京都盆地における古墳の様相」と題する小文を掲載したものである。
2. 調査した遺跡と遺構には、国土座標世界測地系によってその位置を示した。
3. 本文の執筆には、第1章を一瀬和夫・田口五基、第2章を堂ノ本智子、第3章を山崎美輪、第4章を荒木瀬奈、第5章を田口五基、第6章を堂ノ本智子があたった。
4. 本書の編集は、一瀬和夫、田口五基が担当し、各執筆者や参加学生がこれを助けた。
5. 調査にあたっては、大阪府教育委員会、枚方市教育委員会、財団法人枚方市文化財研究調査会、京都市立大学考古学研究室、龍谷大学考古学研究会、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課、京都市建設局水と緑環境部緑地管理課、浄土真宗本願寺派本願寺山科別院、宗教法人世界救世教いづのめ教団、亀岡市教育委員会、亀岡市文化資料館、京都国立博物館、小川裕見子、関 真一、三好 玄、大竹弘之、西田敏秀、米田文孝、菱田哲郎、北田栄造、堀 大輔、宇野隆志、左海資士、勝堂行恵、釋迦浩爾、井元健雄、笹栗 拓、黒川孝宏、土井孝則、宮川禎一、奥村弥恵をはじめとする関係機関、諸氏諸嬢にご高配を賜った。記して感謝したい。

目 次

はじめに・例言	
第1章 2010年度の調査経過	1
第2章 田口山弥生時代遺跡測量・発掘調査	3
第3章 山科本願寺跡土壙測量調査	6
第4章 山越古墳群墳丘測量調査	10
第5章 鹿谷古墳群大市支群墳丘測量調査（ゴーランド・コレクション調査プロジェクト）	17
第6章 京都盆地における古墳の様相	21
報告書抄録	

図・表目次

図1 田口山弥生時代遺跡 調査地位置図	3
図2 田口山弥生時代遺跡 調査区平面図	5
図3 山科本願寺土壙 全体図（京都市埋文研2005年より）	9
図4 山越古墳群及びその周囲の古墳分布図	10
図5 山越古墳群 13～15号墳 墳丘測量図	14
図6 山越古墳群 13～15号墳 墳丘復元案	15
図7 鹿谷古墳群 調査地周辺の古墳分布図	17
図8 鹿谷古墳群までの略地図（『学叢』第27号より）	19
図9 鹿谷古墳群の分布図（『学叢』第27号より）	19
図10 鹿谷古墳群 位置図（広域）	20
図11 京都盆地と古道	21
図12 京都盆地の古墳 分布図	22
表1 京都盆地古墳一覧表	33～44

第1章

2010年度の調査経過

1. 2010年度の調査状況

今年度の現地調査作業は、5月と8月、12月に、大阪府枚方市田口山弥生時代遺跡、京都府京都市山科本願寺跡土壙、山越古墳群、亀岡市鹿谷古墳群大市支群で測量調査を行い、田口山弥生時代遺跡については発掘調査も実施した。

5月と12月は昨年度の第1次調査に引き続き、山科本願寺跡土壙の第2次調査を行った。ゴールデンウィークと正月休みを利用して山科本願寺跡土壙の第2次測量調査を実施した。そして8月はまず、土日・盆休みを利用して鹿谷古墳群大市支群の測量調査を行った。これと併行して8月前半を中心に田口山遺跡の発掘・測量調査を行い、8月後半には山越古墳群の測量調査を行った。昨年実施した調査・遺跡の概要は以下に紹介する通りである。

これらの調査の整理作業にあたっては、考古学実習の授業を中心に、堂ノ本智子、田口五基、荒木瀬奈、青山雅弘、川端優太、澤亮佑、白倉淳也、瀬尾友美、中島康佑、中瀬古芽以、梨木龍太郎、西口菜々美、原田遼、藤澤彰菜、松村真、村岡瑞穂が行った。

これらに加え今年度は、本学と財団法人滋賀県文化財保護協会と連携して、「地域貢献・社会貢献の一環として人材育成とその展開のための教育プログラムの実施」を8月に試みた。これには本大学学生の齋藤神奈、鈴木茂、西島千晶、八軒かほり、林伸明、深坂亜沙美が参加し、大津市宇佐山古墳群、大津市閔津城・閔津遺跡の現地調査に関わった。

2. 田口山弥生時代遺跡発掘・測量調査

まず、田口山弥生時代遺跡は大阪府枚方市田口山2丁目に所在する弥生時代中期の遺跡である。枚方市の中心部が一望できる標高60m以上の丘陵上に位置し、深いV字形の濠をもつ大型高地性集落であった可能性が指摘されている。近畿地方における弥生時代の代表的な遺跡として、調査地点は1943年に大阪府により史跡に指定された。現在、この地点は山田神社が所有し、管理を行っている。

今回は枚方市文化財研究調査会とともに西に史跡の石

碑が建つその史跡指定地内を範囲とし、1050m²の範囲の状況を把握するために測量をまず行った。そして、調査会がトレーニングを設けて、発掘調査も合わせて行い、それに本学も参加した。

調査は調査主任を巽淳一郎・一瀬和夫とし、2010年8月2~6・9~12日に現地にて実施した。現場参加者は今崎健太、竹村亮仁、山崎美輪、伊藤智子、西口菜々美、伊藤あかね、大澤潮人、岡本真央、北野耀平、長澤克輝、鳥垣翔、細川美沙幾、三國翔、山下和花子、山崎緑、山村怜美、小杉理実である。

3. 山科本願寺跡土壙測量調査

山科本願寺跡土壙は京都市山科区西野阿芸沢町、西野様子見町、西野大手先町に所在する。山科本願寺は1478(文明10)年に蓮如上人によって建設が開始され、1532(天文元)年に焼失した。現在、土壙・堀跡のみが数ヶ所残る。昨年・今年にかけて測量を行ったのは、山科本願寺の北東、内寺内町と外寺内町を区切る土壙で、山科中央公園内に所在する。この地点のものは最も残りがよいことから、2002年に国史跡指定を受けている。この土壙の構造の現状を詳細に記録するために、2009年の第1次調査に続き25cmセンター、縮尺1/100で測量調査を行った。山科本願寺跡土壙測量調査関係は報告も含めて2011年度まで行う予定である。

調査は調査主任を巽淳一郎・一瀬和夫とし、2010年5月1~5日まで、12月23~28日まで現地にて実施した。現場参加者は、堂ノ本智子、今崎健太、竹村亮仁、山崎美輪、荒木瀬奈、岡本真央、川端優太、澤亮佑、中島康佑、梨木龍太郎、松村真、伊藤あかね、大澤潮人、岡賢志、岡田芽久実、北野耀平、齋藤神奈、須佐見恭子、鈴木茂、関本直樹、鳥垣翔、中山黎美、西島千晶、八軒かほり、林伸明、深坂亜沙美、干場秀之、細川美沙幾、松下唯、三國翔、村岡瑞穂、山下和花子、脇村祥加、和田亮平、川島浩幸、甲谷一平、名倉圭祐である。

4. 山越古墳群測量調査

山越古墳群は、京都府京都市右京区鳴滝音戸山町山越に所在する。古墳の多くは広沢池北東の丘陵裾部に分布しており、今回はその中で世界救世教平安郷の敷地内に含まれる13~15号墳の3基について、20cmセンター、縮尺1/100で測量調査を行った。

この調査は世界救世教いづのめ教団が平安郷敷地内の

美觀整備計画を進めるにあたり、教団と市、及び本学が協議し、現状を事前に記録に収めるために行った調査である。

調査は調査主任を巽淳一郎・一瀬和夫とし、2010年8月21～29日まで現地にて実施し、測量調査自体は今年度に完了した。現場参加者は堂ノ本智子、今崎健太、山崎美輪、荒木瀬菜、岡田芽久美、岡本真央、須佐見恭子、関本直樹、長沢克輝、鳥垣翔、中山黎美、松下唯、水戸沙織、村岡瑞穂、小杉理実、渡辺智草、森悠菜である。

5. 鹿谷古墳群大市支群測量調査 (ゴーランド・コレクション調査プロジェクト)

鹿谷古墳群は京都府亀岡市稗田野町鹿谷一帯、行者山南麓の低丘陵上に古墳が群集するものである。その南側の扇状地に展開する鹿谷遺跡の墓域と考えられている。この古墳群は、日本考古学の父と称されるウィリアム・ゴーランドが明治時代に現地に訪れて写真撮影や石室計



写真1 田口山弥生時代遺跡 調査風景（北西より）



写真3 山越古墳群 調査風景（南より）

測を行うとともに、その出土品や調査資料がゴーランド・コレクションとして大英博物館に所蔵されていることで有名である。

そのゴーランドが調査を行った古墳の所在は長らく位置不詳とされてきた。ところが2009年、稗田野町鹿谷大市を中心とした龍谷大学考古学研究会の踏査で新たに確認された古墳のうち1基が、ゴーランドにより石室撮影されたものと同一のものであることが判明した。

そこで今回、その古墳とその周囲の実態を掘むため、ゴーランドが石室撮影した古墳の下方に集中して存在する古墳5基について、ゴーランド・コレクション調査プロジェクトのメンバーとともに調査に取りかかった。本年は再発見された古墳の周辺も含め、20cmセンター、縮尺1/100で測量を行った。

調査は調査主任を一瀬和夫とし、2010年8月1・8・13～15日、12月5日に現地にて実施した。調査参加者は、田口五基、荒木瀬菜、澤亮佑、梨木龍太郎、三國翔、森悠菜である。



写真2 山科本願寺跡土壙 調査風景（北西より）



写真4 鹿谷古墳群大市支群 調査風景（南西より）

第2章

田口山弥生時代遺跡測量・ 発掘調査

1. はじめに

田口山遺跡は枚方市の穂谷川右岸、長尾丘陵の丘陵縁部に立地している。この遺跡では明治時代に磨製石剣が発見され、道路工事に伴って、堅穴住居の存在することが判明した。1940（昭和15）年8月に発掘調査が行われた。その時の調査で、柱穴が一辺6mの正方形に並ぶ遺構が検出され、14点の弥生土器、磨製石鏃、石包丁、打製石器などが出土した。その後、1943（昭和18）年に大阪府の史跡に指定され、現在、北面に「昭和十九年三月大阪府建立」、南面に「田口山石器時代遺蹟」と刻まれる、高さ165cm、幅24cmの石碑が建てられている。

その後の調査で、南の枚方市立田口山小学校を中心とした調査区から、堅穴住居跡が40棟以上検出された他、土器棺墓や丘陵を切断する大溝なども見つかり、弥生時代中期後半に成立した大集落遺跡であったことがわかった。径11mを越える堅穴住居や凹線文が施された大型の弥生土器も見つかっている。この集落は、交野台地の北端に位置する交北城の山遺跡の集落がその頃には姿を消



写真5 田口山弥生時代遺跡
石碑 (北東より)



写真6 田口山弥生時代遺跡
石碑 (南西より)

したことから、丘陵上に集落が移動したと考えられている。また、1974（昭和49）年の調査で弥生時代後期の堅穴住居が検出されたことから、地点を移動させながら継続して弥生時代後期にも集落が営まれていたことがわかっている。比高差40mを測る標高60mの丘陵上に立地しており、深いV字形の濠が備えられることや、大型の磨製石剣、打製石剣などの武器類が多く出土していることから、高地性集落と考えられている。

現在、発掘調査で検出された直径8.5mの堅穴住居をモデルにした住居が枚方市の旧田中家鑄物民俗資料館の敷地内に復元されている。

2. 2010年度の調査

今年度の8月2日から20日にかけ、測量を行った。測量は、田口山2丁目の石碑の立つ史跡指定地内を範囲とした。これに本学が協力し、財団法人枚方市文化財研究調査会とともに実施した。今回の調査では世界測地系に基づく基準杭をもとに、東西30m、南北35m、1050m²の範囲を測量した。基準1を、X=-13004.847、Y=-27972.99、H=62.070、現場中心部に設置したB-2を、X=-130119.873、

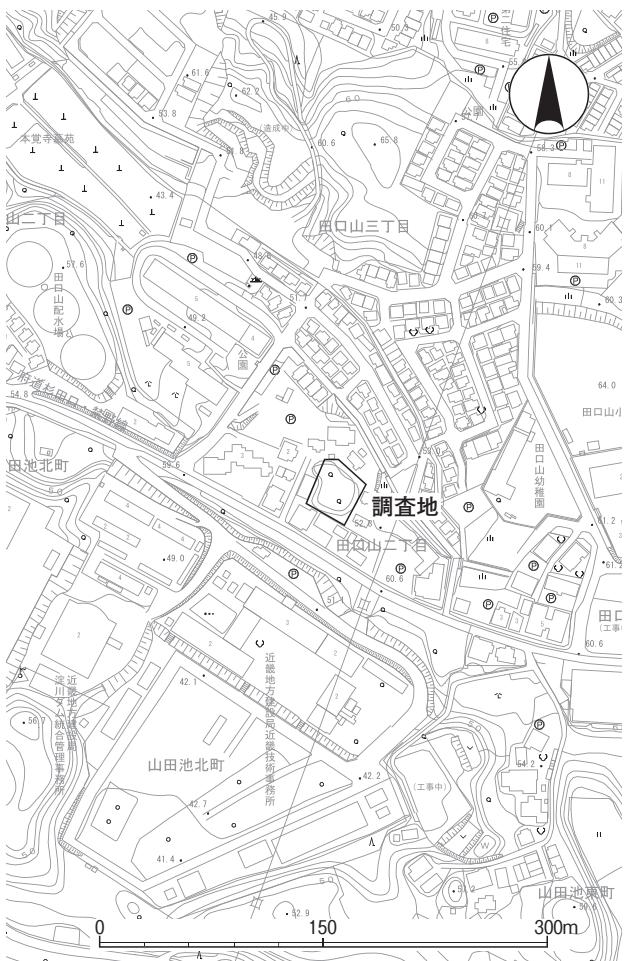


図1 田口山弥生時代遺跡 調査地位置図



写真7 田口山弥生時代遺跡 遠景（南東より）



写真8 田口山弥生時代遺跡 調査前（南東より）



写真9 田口山弥生時代遺跡 断面（北西より）



写真10 田口山弥生時代遺跡 調査風景（東より）



写真11 田口山弥生時代遺跡 調査風景（西より）



写真12 田口山弥生時代遺跡 調査風景（東より）



写真13 田口山弥生時代遺跡 トレンチ調査前（西より）

$Y=-27965.502$ 、 $Z=60.939$ とした。

測量の結果、調査地は標高60.50～60.80mの丘陵上の一番高い場所に位置することが判明した。また、調査地の中心部に方形の落ち込みが確認された。

戦前の調査トレンチがそのまま埋められず残っている可能性があり、確認のため財団法人枚方市文化財研究調査会がトレンチを8カ所設定し、発掘調査を行った。その結果、南西部の落ち込みに沿って設定したトレンチで幅0.4mを測る小溝や柱穴、焼跡などを検出した。これらは竪穴住居の可能性が考えられる。凹線文を施した土器や、石器片も出土している。

3. おわりに

今年度は住居跡の存在地点の確認にとどまった。来年度にも、継続してこの範囲の調査を行う予定のため、その際に、詳細なまとめた報告ができるものと考える。

注

- (1) 財団法人枚方市文化財研究調査会『図録 考古資料でみる枚方の歴史』2009年
- (2) 財団法人枚方市文化財研究調査会『枚方市文化財年報』27・28 (2005・2006年度分)



図2 田口山弥生時代遺跡 調査区平面図

第3章

山科本願寺跡土壘測量調査

1. はじめに

山科本願寺跡土壘は山科区西野阿芸沢町、山階町、左義長町、離宮町、今屋敷町、大手先町、東野舞台町に位置する。その一部は現在、山科中央公園内に整備されており、土壘と環濠の一部が残っている。2002年には「山科本願寺南殿跡付随本願寺土壘跡」として国史跡に指定された。その地点は土壘の中でも多くの機能をもち、北東隅の最も複雑な部分にあたる。2009年度に、公園隅に残っている土壘構造の詳細を検討するために土壘の測量調査に取りかかった。続いて本年度では、土壘の北側と、西側に認められるテラスや屈曲点にあたる方形壇の裾の測量調査を行った。

調査期間は、2010年5月1～5日、12月23～28日の2

回に分けて現地にて行った。

2. 既往の調査

山科本願寺跡土壘についてはこれまで様々な調査研究がなされている。戦前には橋川正氏により詳細な報告があり（1）、戦後には井口尚輔氏が、寺内町の区画を復元するために地上に残っている土壘と環濠を追跡している（2）。はじめての考古学的な調査は、京都府教育庁による1962年の新幹線建設に伴う学術調査であった（地図3-①）（3）。その結果、遺構が良好に遺存していることがわかった。さらに、1973年から本格的な調査が市営住宅建設に伴って山科寺内町遺跡調査団によって実施され、南北方向の土壘や堀、建物跡など多くの遺構や遺物が出土し、全容解明の発掘調査の必要性が強く求められた（図3-②・③）。

1980年には京都橘女子大学考古学研究会により全体に及ぶ現状調査がなされている。この調査では山科中央公園内に残っている土壘の測量や建物跡、堀跡、石室など



写真14 山科本願寺跡北土壘中央公園航空写真（垂直）

写真15 山科本願寺跡西土壘
広見町側
(南より)



写真16 山科本願寺跡西土壘
広見町側
(北東より)



写真17 山科本願寺跡北土壘
中央公園北西
(西より)





写真18 山科本願寺跡北土壙 中央公園西側（北東より）



写真19 山科本願寺跡北土壙 グラウンドから（南西より）



写真20 山科本願寺跡北土壙北濠 中央公園北側（北西より）



写真21 山科本願寺跡北土壙上（北西より）



写真22 山科本願寺跡北土壙 調査風景（北東より）



写真23 山科本願寺跡北土壙 調査風景（東より）



写真24 山科本願寺跡北土壙 調査風景（北西より）



写真25 山科本願寺跡北土壙 調査風景（南西より）

を検出している（4）。

それ以降、各所で継続的に発掘調査のみならず試掘・立会調査なども行われている。その結果、建物、石室、井戸、鍛冶場、溝など、寺域内の生活や生産活動に関連する施設の存在が明らかになった。また、土壘や堀、暗渠排水路の構造を確認することができることにより、山科本願寺が計画的に造営されていたことが明らかになった。

3. 2010年度の調査内容

今回の調査した地点は、昨年度調査し終えなかった残りの部分と、土壘の屈曲点にあたる南部裾部分の調査を行った。屈曲点における土壘の構造など、昨年度の調査成果とともに山科本願寺跡土壘全体の規模や、防御にともなった土壘形状の細かい役割などを検討するため、主に土壘内側の南西側のゆるやかな斜面について25cmセンターで地形調査に取りかかった。

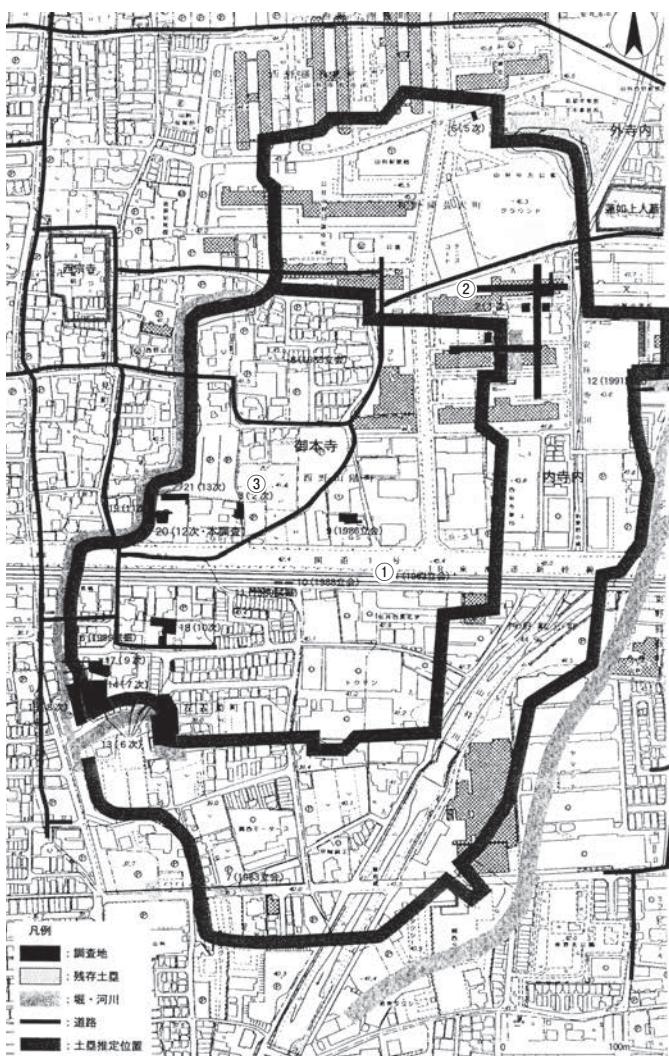


図3 山科本願寺跡土壘 全体図（京都市埋文研2005年より）

昨年度の調査で設置した、ポイント18点、基準点（YD-1、YD-2、YD-3、YD-4、YD-5、YD-f）を継続して用い、25cmセンター、縮尺1/100で測量を行った。

YD-1は、X=-112638.783、Y=-17116.365。

YD-2は、X=-112624.317、Y=-17131.789。

YD-3は、X=-112632.214、Y=-17109.474。

YD-4は、X=-112621.957、Y=-17149.290。

YD-5は、X=-112626.071、Y=-17162.510。

YD-fは、X=-112638.034、Y=-17120.688。

5月1日から5日の調査では、南北43m、東西14mのグラウンド側の土壘西側斜面を主に測量調査を行った。また12月23日から28日の調査では、南北22m×東西18mの土壘の屈曲点にあたる南部裾部分と、南部西半分の南北22×東西25mの測量調査を行った。

現在、京都市作成の縮尺1/500の山科本願寺跡土壘実測図に、昨年度と今年度の測量調査を行った対応する部分とを照合し、断面図などを作成している。

4. おわりに

昨年度と今年度をもって山科本願寺跡土壘の現地での測量調査は完了した。山科中央公園の北東隅に残る土壘全体の測量と、土壘の屈曲点である南部裾部分の測量も完了した。

なお、山科本願寺跡土壘測量調査関係は報告なども含めて2011年度に総合的に行う予定である。

注

- (1) 橋川正「山科本願寺及其遺跡」『京都府史蹟勝地調査会報告』第17冊 1926年
- (2) 井口尚輔「中世城郭伽藍“山科本願寺”その他歴史的考察」『日本歴史』265号 1970年
- (3) 杉山信三、堤圭三郎ほか「山科本願寺跡」『東海道新幹線増設工事に伴う埋蔵文化財発掘報告書』1965年
- (4) 京都橘大学考古学研究同好会『山科分布調査概報復刻版』第1次～第5次 2008年

参考文献

- 京都橘大学文学部『京都橘大学 文化財調査報告 2009』2010年
財團法人 京都市埋蔵文化財研究所『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2005-3山科本願寺跡』2005年

第4章

山越古墳群測量調査

1. 歴史的環境

山越古墳群は、京都府京都市右京区鳴滝音戸山町山越に所在する。標高50～100m付近に位置し、広沢池北東の丘陵頂部から、谷間を挟んだ東西の丘陵裾にかけて1～3基ごとに点在する合計17基の円墳で構成するとされている。

山越古墳群を含む嵯峨野地域には、西に小倉山があり、その反対方向に位置する独立丘陵の双ヶ岡を東端とし、北には丘陵が連なり、南に流れる桂川に向かってゆるやかに傾斜する段丘面が広がっている。この段丘面から山間部にかけての広い範囲に多くの古墳が分布しており、その数は、現在判明しているもので、約180基にものぼると推定されている。これらはほぼ古墳時代後期にあたる6世紀前半から7世紀頃に築造されたものと考えられており、それ以前の古墳時代前期から中期にあたる4世紀から5世紀代に築造された古墳は嵯峨野地域ではほとんど見あたらない。

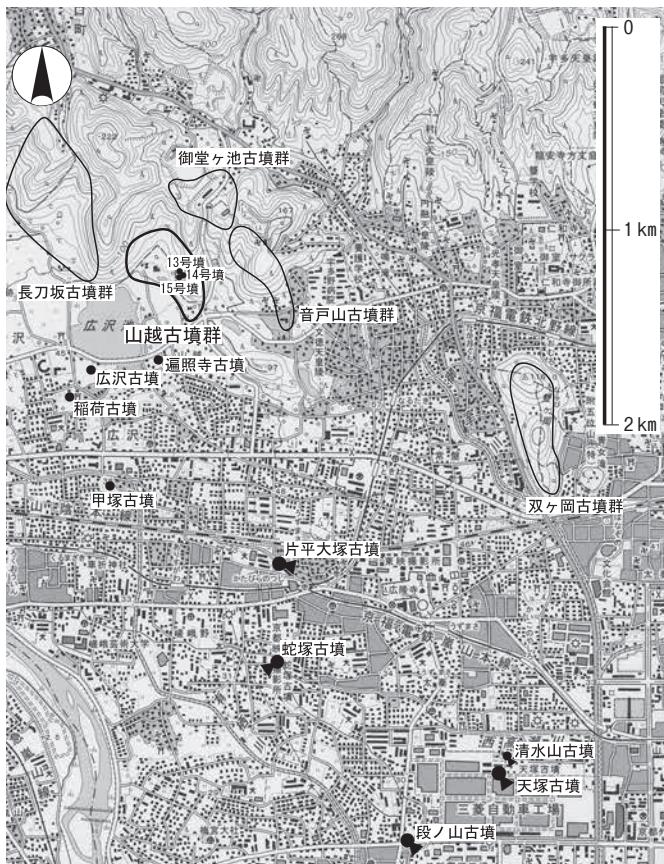


図4 山越古墳群及びその周囲の古墳分布図

この地域の概要については、1990年発行の『洛西探訪』に詳しく載っている。ここでそれらを簡単にまとめてみる。分布する古墳の中には、全長50～75mを測る6世紀代に築かれたものとしては、比較的大型の前方後円墳から、直径10m未満の小型円墳まで様々な内容の古墳が含まれていることに注目される。これらの古墳はその立地や墳形・規模に応じて、類似するもの同士でグループになって墓域をつくっていき、嵯峨野地域全体をながめた時に、明確なピラミッド形の階層構成を示すように分布している。この現象は、嵯峨野地域の古墳の最大の特徴だといわれる。

次に、それら各々の階層のグループごとの分布状況や特徴などを、主要古墳の例を提示しながら見ていくことにする。

①太秦周辺に分布する前方後円墳

嵯峨野地域南部を流れる桂川に面して前方後円墳が5基散在する。現在では墳丘が削平されてしまったものもあるが、いずれも全長50mから70m台を測る古墳時代後期としては大型の古墳である。これらの古墳は、6世紀前葉から6世紀末頃の間に築造された嵯峨野地域の首長墳として理解されている。

主な古墳として、全長約71mの前方後円墳として知られる天塚古墳が、前方部を南東に向けて築造されている。二段築成の墳丘には円筒埴輪が備わっており、後円部中央に北西方向に開口する無袖式のものと、くびれ部近くに南西方向に開口する左片袖式の2基の横穴式石室が築造されている。この2つの石室は、現在でも中に入ることが可能だが、奥に伯清稻荷大神の祭壇が祀られており、改変されている。また、墳丘の一部に横穴式石室があつたのではないかと考えられる窪みが存在する。1887年に発掘調査が行われ、四獸鏡、ガラス小玉類、鉄刀類、鉄鏃、小札、馬具、須恵器などの遺物が出土した。遺物の一部は現在も京都大学総合博物館に保管されている。墳形・副葬品から、6世紀前半に造られたと推定され、嵯峨野地域でも早い段階で築造された古墳である。他には、巨石を用いた巨大な横穴式石室が露出している蛇塚古墳がある。墳丘は削平されているが、全長約75m、前方部幅約30m、後円部径約45mの前方後円墳と伝えられる。石室の規模は全長約17.8m、玄室長約6.8m、幅約3.8m、高さ約5.2mとなり、嵯峨野地域最大の規模を誇るとともに、奈良県明日香村の石舞台古墳と対比される。石室形態から6世紀末頃の築造とみられている。なお、嵯峨

野地域で前方後円墳が築造されているのは、この地域だけである。

②段丘北部のゆるやかな斜面に分布する大型円墳

太秦周辺より北部の有栖川周辺のゆるやかな段丘面には、大型円墳を中心とした古墳群が分布している。

これらは4つの支群に区分されており、南の甲塚古墳1基で構成される甲塚支群、広沢池付近の広沢支群、広沢池より北西の田園地帯中に転々と分布する嵯峨七つ塚支群、さらに西に分布する大覚寺支群という具合である。広沢支群中の広沢古墳や稻荷古墳をはじめとするほとんどの古墳が直径20mから30mの円墳からなるが、大覚寺支群中の丸山古墳の直径約50mや甲塚支群の甲塚古墳の直径約38mはより大型で、それぞれの支群間にも大小の格差があった可能性が示唆されている。大覚寺支群中の南天塚古墳や入道塚古墳は1975年に京都府教育委員会によって調査されている。これらの成果から6世紀後葉から7世紀初頭にかけて築造されたことが判明している。

③丘陵部に群集する古墳群

嵯峨野地域北部の北西から南東にのびる丘陵裾から一部丘陵頂部にかけては、小規模な円墳を中心に若干の方墳を混えた群集墳が所々に分布し、いくつもの古墳群を形成している。山越古墳群もこの中に含まれる。

それぞれの古墳群の構成には2種類の法則性があり、1つは、2～3基程度の古墳からなる古墳群、もう1つは20数基の古墳からなる古墳群があるが、後者の場合、結局は2～3基よりなる小支群がいくつか集まって古墳群を形成している。山越古墳群の構成は後者のパターンであるといえる。

古墳群はそれ自ら単独で存在するものと、いくつかで1つの谷を共有していたりするものなどがある。そしてこれらの中には、例えば山越古墳群の北西に分布する御堂ヶ池古墳群中の1号墳のような、直径30mを測り、全長8.2mを測る比較的規模の大きい横穴式石室をもつような大型円墳も存在する。他に、位置や構成をみる限りこの階層のグループに含めるか微妙なところだが、嵯峨野地域東端の双ヶ岡古墳群中の北部丘陵の頂部に分布する1号墳も円墳で直径約45mを測り、御堂ヶ池1号墳と同様に突出した規模を持つ。

これらの古墳は段丘北部のゆるやかな斜面に分布する大型円墳と大差ない規模・内容を持つ。また、それぞれの古墳群中の各古墳の立地をみてみると、大半の古墳が

丘陵裾部の低地に分布するのに対して、少数の古墳が丘陵頂部に分布するという具合に、立地に差が生じている。このような分布状況は、山越古墳群の他に、東に分布する音戸山古墳群や、反対の西に分布する長刀坂古墳群、さらに西に分布する朝原山古墳群などにみられる。これらのことから、丘陵に群集している小古墳群内にもそれぞれ格差があり、丘陵の古墳群だけで、新たな階層的な構造を形成している可能性も考えられる。

『洛西探訪』によれば、嵯峨野地域の古墳のあり方について、畿内の他の古墳時代後期の古墳と比較した場合、幾つかの特徴を指摘することができる。まず大きなものから、古墳時代後期の古墳としては珍しく、西暦500年前後から安定した前方後円墳の築造が継続し、しかも6世紀末頃までとより遅くまで続いたこと。それら前方後円墳と6世紀後葉からは並行して、大型円墳が独自に古墳群を構成したこと。群集墳の出現は比較的遅く、6世紀後葉頃から急激に増加し、しかも短期間で一斉に終息したこと。全体的には、先に指摘したこの地域の古墳の階層的な群構成に見られるように、古墳群全体がまとまりのある動きを示し、異質なものが少ないということ。そして、それは嵯峨野地域全体が有機的なまとまりをもつ1つの広い墓域を形成し、その中で個々の古墳は、ある意味での身分秩序にしたがって、それぞれ定められた墓域で一定の決まりのもとに古墳を築造し続けた結果と考えられていることなどがあげられる（1）。

嵯峨野地域を含む古代洛西地域に關係する古代豪族は、渡来系の秦氏があげられる。『日本書紀』『平安遺文』などの文献によれば、古代嵯峨野は秦氏によって開発されたと言っても過言ではなく、それに関する逸話や伝承が数多く残っている。秦氏は5世紀後半頃～6世紀初頭頃に嵯峨野の地に渡来してきたと言われている。秦氏の一族は、土木工事による大規模な灌漑や田畠の造成などを独自の技術的特色とし、当地域を開発していくと考えられている。6世紀半ば頃から、大和王権の中央財政の運営を一部で任されるようになり、7世紀前半には、『日本書紀』に最盛期の秦氏の族長として秦河勝の名前が登場する。このように秦氏は、5世紀後半～6世紀初頭頃から嵯峨野地域と関わっていくのだが、同時期にこの地域において先にあげた太秦周辺の大型前方後円墳が突如出現する。このことから、嵯峨野地域の古墳と秦氏との関連が古くから指摘されているが、発掘調査などでそれを裏付けるような確証は未だない。



写真26 山越古墳群
写真左から13・14・15号墳
(南西より)

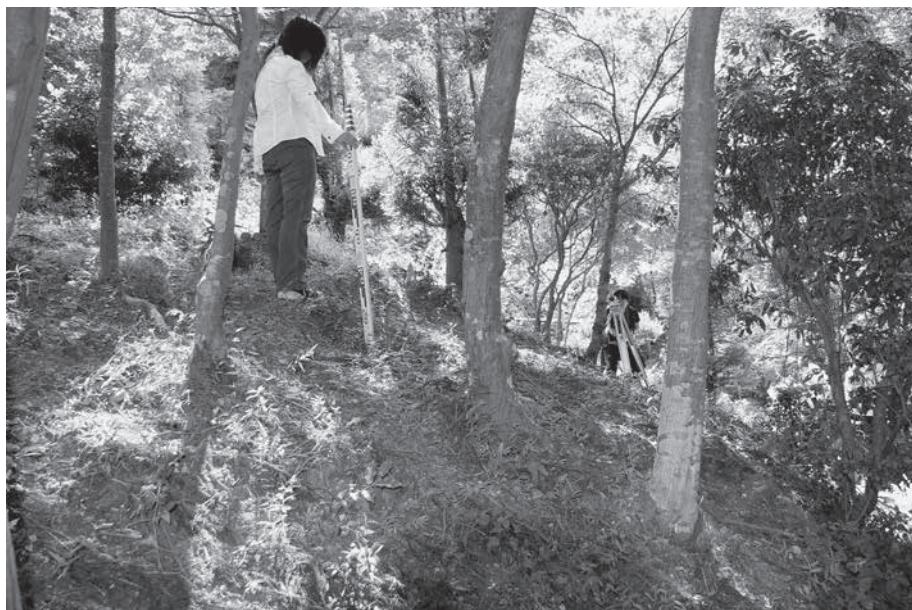


写真27 山越古墳群 調査風景
(北東より)



写真28 山越古墳群 調査風景
(南西より)

2. 既往の調査

ここでは、嵯峨野地域でも山越古墳群と同様に北部の丘陵地帯に分布する古墳群に関する調査をとりあげる。

山越古墳群に関する調査として、立命館大学考古学研究会が2004年に報告した分布調査があげられる（2）。この調査によると、山越古墳群とされている古墳群を、丘陵裾に分布する山越谷間支群とその東側尾根先端の最頂部に分布する山越山上支群の2つに区分している。それぞれの古墳に独自の番号がつけられているので、この報告中では、今回本学が測量調査した山越13～15号墳は山越谷間支群の10～12号墳とされている。特筆すべきこととして、この分布調査では山越谷間支群の12号墳（本学調査での山越15号墳）の墳丘上の陥没部において、人頭大以下の石材が5点ほどみられ、中には、開口部付近に $0.1\text{m} \times 0.2\text{m}$ の石材が露出している状況が確認されたことがあげられる。詳細な測量調査は行われていない。立命館大学考古学研究会はこの他にも、山越古墳群の西の丘陵に分布する朝原山古墳群、長刀坂古墳群の分布・測量調査を行い、様々な視点からの詳細な考察も合わせて報告している（3）。

また、山越古墳群周辺に分布する古墳群について、いくつかの調査がなされている。まず、京都大学考古学研究会が行った御堂ヶ池古墳群の発掘調査・編年などの詳細な分析と嵯峨野地域の古墳群の分布調査があげられる（4）。これらの調査成果とそれ以前の京都府文化財保護課などが行った御堂ヶ池古墳群の調査の詳細が、1971年に報告された『嵯峨野の古墳時代』にてまとめられている。それ以降、1973年に六勝寺研究会によって行われた御堂ヶ池20号墳の発掘調査や、京都市埋蔵文化財研究所が、1982年より数度に渡って音戸山古墳群の発掘調査を行い報告している。

3. 調査に至る経緯

山越古墳群の多くは、鳴滝音戸山町の山間部の谷間に挟んだ東西の丘陵裾部に分布しているが、それらの中の一部の古墳が、広沢池北東に位置している世界救世教平安郷の敷地内に含まれる。

今回、同教団が敷地内の美観整備を検討し、古墳の墳丘も整備することも素案として提案されていたため、まず現状の記録を残すように京都市文化市民局文化財保護課から指導があった。市と教団、及び本学との協議の結果、本学が教団より測量調査の依頼を受けることになっ

た。そして2010年8月21日から29日にかけて山越古墳群中の美観整備範囲に含まれる13～15号墳の3基の墳丘測量調査を実施するに至った。整備方法などは現在、検討中である。

4. 墳丘測量調査の成果

山越古墳群の一部について、今回本学が古墳の調査を実施した。調査対象古墳は、京都府京都市右京区鳴滝音戸山町山越に所在する山越古墳群の中でも、丘陵裾部の斜面に位置し、南西に広沢池の広がる場所にある13～15号墳の3基である。この古墳の名称は、京都市文化市民局が2007年に発行した『京都市遺跡地図台帳』第8版の記述に倣った。

調査にあたっては、20cmセンターによる縮尺1/100の平板測量を行った。基準杭は、世界測地系に基づいて、それぞれの古墳の墳頂部付近に計3本設置し、それらを基準に他の杭を14本設置した。最も高所に位置する14号墳の墳頂部付近に設置した基準杭B5は、X = -107678.242、Y = -27922.390、標高 = T.P. 58.140である。この古墳から西へ下った場所に位置する13号墳の墳頂部付近の基準杭B4は、X = -107681.031、Y = -27936.320、標高 = T.P. 53.835である。さらに一番南の15号墳の墳頂部付近の基準杭B6は、X = -107693.314、Y = -27931.960、標高 = T.P. 53.943である。水準の数値は、京都市公共基準点のNo0820010（T.P. 44.022m）から算出した。測量した範囲は、古墳周辺の歩道や水路なども含め東西約46m、南北約60m、2760m²となった。

以下にそれぞれの古墳の調査で得られた成果をまとめておく。

（1）山越14号墳

まず、3基中一番高所に位置する北東の14号墳である。T.P. 58.000mのセンター付近を東の丘陵側の墳丘基底部裾とし、一部遊歩道により途切れているが、T.P. 53.600mのセンター付近を西側の墳丘裾とすると、直径約14m、高さ約4.6mの円墳となる。墳丘上には、他の2基と比べて窪みなども見られず、比較的良好に残存しているが、現地での観察により、墳頂部付近の土は墳丘の他の部分と異なる土と見られ、後世に盛土された可能性があり、本来の高さ・形状とは若干異なるかもしれない。また東側の丘陵と墳丘裾の境目が不明瞭であり、反対の西側の墳丘裾との比高差が約4.4mとなり大幅に相違する。この部分は古墳築造時にあまり整形されなかっ

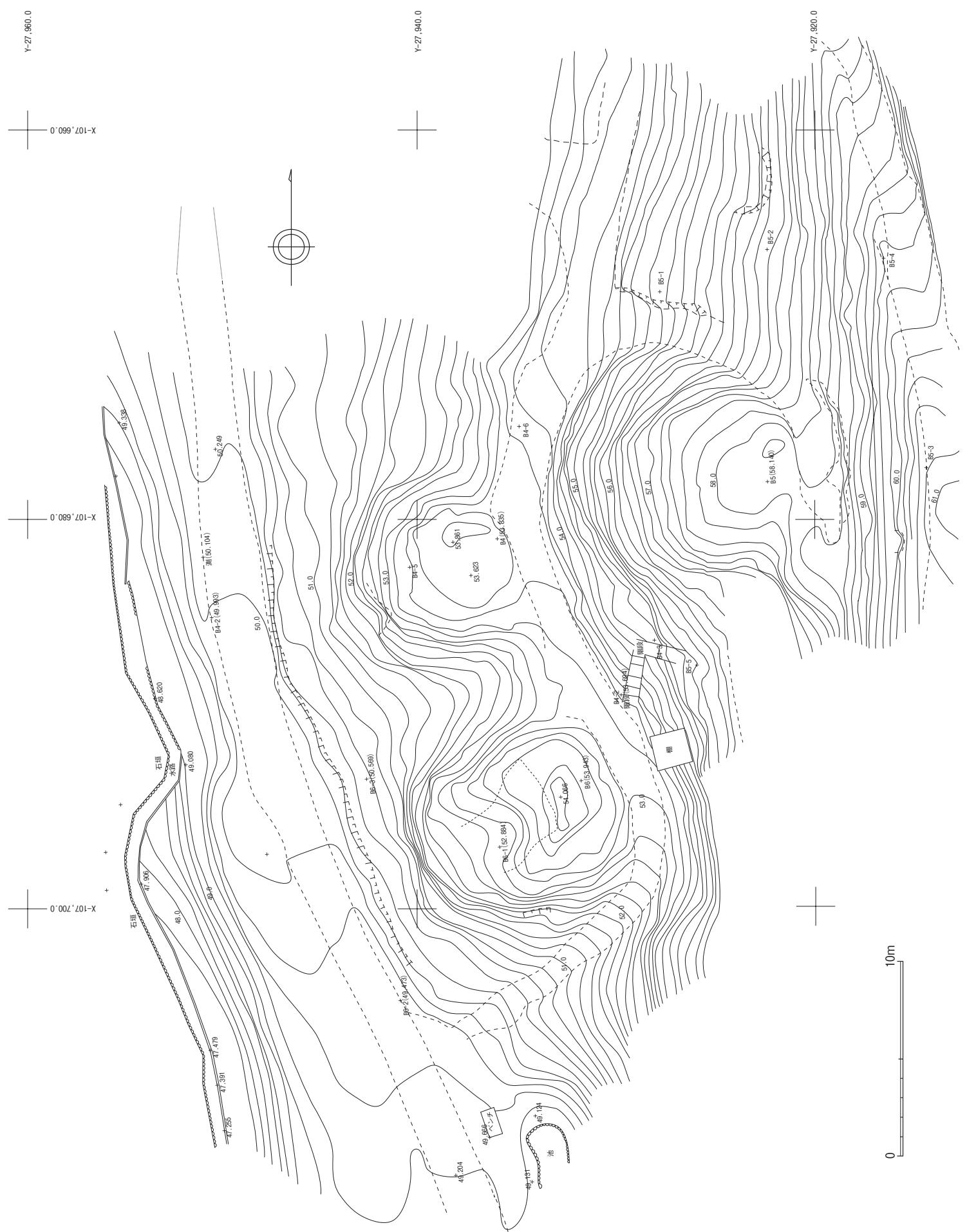


図5 山越古墳群 13~15号墳 墳丘測量図

た可能性が考えられる。その影響なのか墳頂部が丘陵側に片寄っている。西側裾も現存の遊歩道と重なっていて不明瞭であり、本来はもう少し西側に広がっていた可能性も考えられる。墳頂部付近の平坦面は、径約7mとなる。内部構造は不明であるが、他の古墳と合わせて考えると、横穴式石室の可能性が高い。

(2) 山越13号墳

次に上記の14号墳の西側下に位置する13号墳について西側裾が管理道によって不明瞭だが、T.P.50.600mのセンター付近を墳丘基底部裾とすると、径約13m、高さ約3.2mの円墳となる。14号墳との墳丘基底部裾の比高差は約3mである。それほど差があるわけではないが、現状では3基の中で一番小さく高さも低い。測量図を見ると、墳丘の丘陵側が、上部に位置する14号墳の西側裾と重なり新旧関係が判明しそうだが、両古墳間に遊歩道

が遮っているため重複関係は不明である。墳頂部付近の平坦面は約6mである。墳丘の規模との割合から見て他の2基と比べてやや広い感じを受ける。14号墳と同様に、東の丘陵側の墳丘基底部裾が不明瞭であり、墳頂部も丘陵側に片寄っている。内部構造は不明であるが、墳丘中ほど南西隅から幅約1mほど南西方向に向かって窪んでいる箇所があり、南西方向に開口する横穴式石室の可能性が強い。

(3) 山越15号墳

最後に一番南に位置する15号墳については、西側裾がT.P.50.200mのセンター付近とすると、径約14m、高さ約3.8mの円墳となる。丘陵に沿って13号墳と並ぶようにな構造されており、両古墳の西側墳丘基底部裾の高さも、それほど大きな差はないとみられ、13号墳との何らかの関連性が存在する可能性が指摘できる。両古墳間の

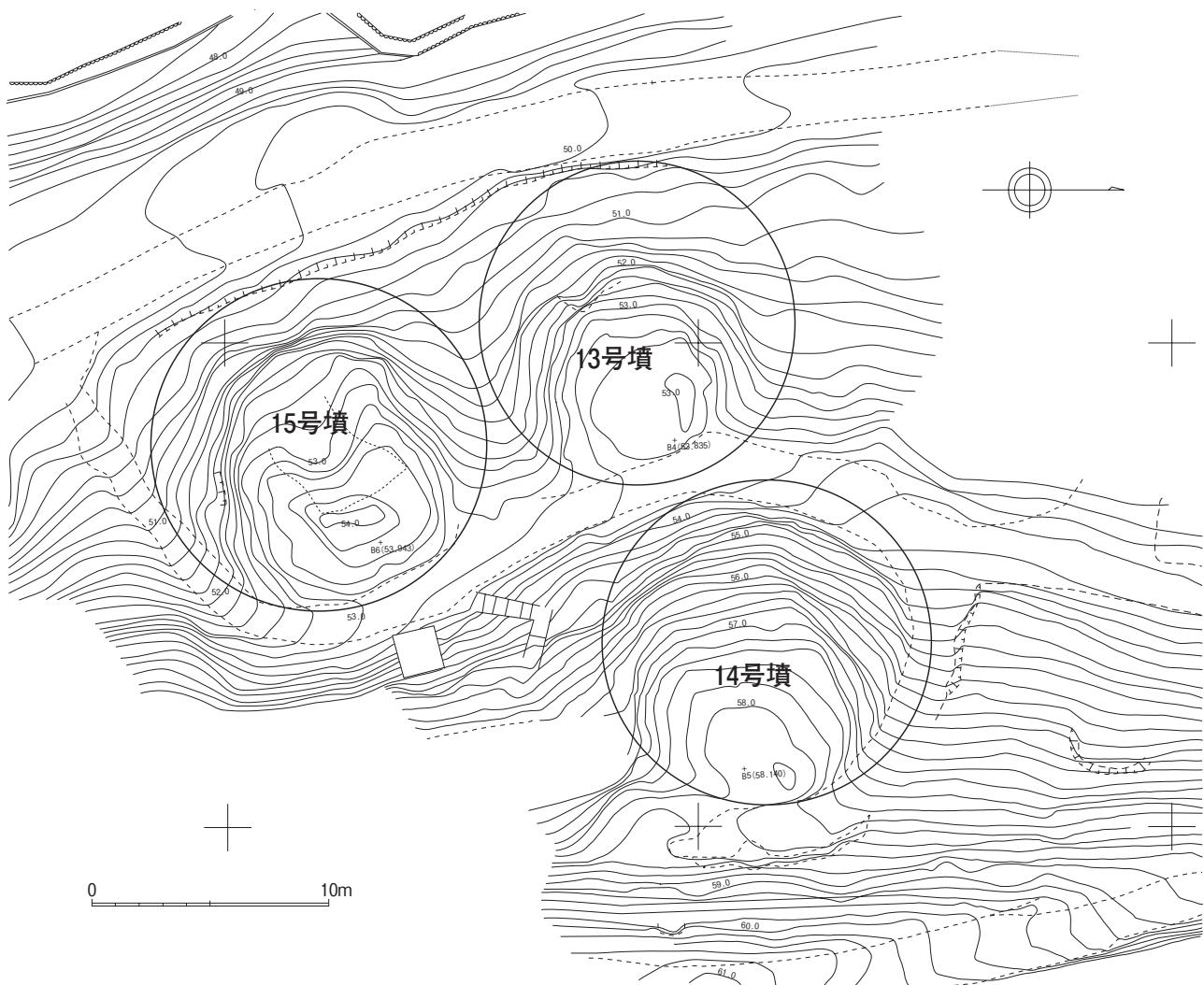


図6 山越古墳群 13～15号墳 墳丘復元案

南北の距離は約1mである。測量図を見ると、上記の2基と比較して東の丘陵側の墳丘がやや整形されている印象があるが、反対の西側の墳丘基底部裾との比高差は約2.8mとなり、やはり大幅な差が生じる。墳丘西側のT.P.52.000mのセンターからT.P.50.600mのセンター間にかけて墳丘が著しく急傾斜する箇所があり、墳丘の土が一部流失している。さらに、墳丘中央部のT.P.53.800mのセンターからT.P.52.800mのセンター付近まで、長さ約4m、幅約2m程続く南西に向かって傾斜する断面U字状の窪みが存在する。この窪みの存在から、内部構造は13号墳と同じく南西方向に開口する横穴式石室であると考えられる。

3基とも墳丘上に石材の露出がなく、遺物の採取もなかった。

この測量図より北へ約68m先に、今回測量調査した3基の古墳と隣接する10～12号墳がある。

6. 墳丘測量調査の所見

今回は発掘調査を行っておらず、遺物等の採取もなかった。調査した3基の古墳の詳細な築造時期は不明なままであるが、

- ①3基とも斜面に築造されていること。
- ②いずれも、直径約13～14mの円墳であり、規模・墳形においては類似していること。
- ③3基それぞれの古墳との間が1～4mで、場所によっては重なり合いそうなほど密集して築造されていること。
- ④3基とも丘陵（高所）側の墳丘があまり整形されておらず、墳丘裾が不明瞭で他の裾の部分と大幅な比高差が出ること。
- ⑤3基中の1基である15号墳は横穴式石室の存在と開口方向についてその可能性が指摘できること。
- ⑥15号墳ほどの確証はないが、他の2基についても、墳頂平坦面がせまく竪穴系の埋葬施設が取りにくうことから、同様に横穴式石室をもつ可能性があること。
- ⑦13号墳と15号墳が並ぶように築造されており、さらに石室開口方向も2基とも南西方向になる可能性が高く、この2基について何らかの関係性が指摘できること。

などの所見を得ることができた。そして、周辺に長刀坂古墳群・朝原山古墳群・音戸山古墳群といった古墳時代後葉、6世紀後葉～7世紀初頭に築造されたと推

定されている、これらと今回調査した3基と同じような規模の古墳で構成される古墳群が数多く存在することなどの理由から、3基の古墳は古墳時代後期に築造された群集墳の一部だと推定できる。

7. おわりに

今回の調査で、山越古墳群中の3基の古墳の詳細な墳丘測量図を作成した。同古墳群中の他の古墳だけでなく、嵯峨野地域北部の山間部に密集する古墳時代後期後葉の他の古墳群と比較できる新たな資料が提示できたと思う。

しかし、今回は得られたデータを用いて隣接する古墳群と比較検討し、問題点・相違点を見つけるなどして深く検討することができなかった。嵯峨野地域北部の山間部に分布する多くの古墳群は、比較的規模の類似しているものが多く、それらの中で、各々の特徴や傾向を分析し見出していくことは容易ではない。しかし、今回の測量調査や、嵯峨野地域北部丘陵の古墳群に関する古記録などを元にして、この地域に分布する多くの古墳群には、規模・内部構造・立地・それぞれの構成などの小さな相違点から、新たな階層構造の存在や、各古墳群がさらに詳細に区分できるのではないか、などの様々な問題が考えられるということが分かった。さらに今後、山越古墳群中の他の古墳や、隣接する古墳群と比較検討し、嵯峨野地域の古墳群の特質や構成の特徴などを詳細に考察していきたい。

注

- (1) 後藤靖・山尾幸久編『洛西探訪』京都文化の再発見 淡交社 1990年
- (2) 立命館大学考古学研究会『朝原山・長刀坂古墳群—京都市嵯峨野群集墳の分布・測量調査報告—』2004年
- (3) 立命館大学考古学研究会『朝原山・長刀坂古墳群—京都市嵯峨野群集墳の分布・測量調査報告—』2004年
- (4) 京都大学考古学研究会『嵯峨野の古墳時代』1971年

参考文献

- 後藤靖・山尾幸久編『洛西探訪』京都文化の再発見 淡交社 1990年
京都大学考古学研究会『嵯峨野の古墳時代』1971年
立命館大学考古学研究会『朝原山・長刀坂古墳群—京都市嵯峨野群集墳の分布・測量調査報告—』2004年

第5章

鹿谷古墳群大市支群墳丘測量 調査（ゴーランド・コレクション 調査プロジェクト）

1. はじめに

2010年8月1・8・13～15日、12月5日に亀岡市において鹿谷古墳群大市支群の測量調査を行った。今回の調査は、本学の一瀬和夫を研究代表として、現在、イギリス大英博物館他と進めているゴーランド・コレクション調査の一環である。

イギリス大英博物館にあるゴーランド・コレクションとは、明治時代、イギリスのウィリアム・ゴーランド（1842-1922）が1872（明治5）年から1888（明治21）年の16年に渡る日本滞在中に蒐集した須恵器、馬具などの実物資料、古墳の撮影写真や計測資料といった考古資料の一群である。

今回のコレクション調査の目的の1つには、ゴーランドが関わった日本国内の遺跡や古墳を詳細に調査することがある。そのはじめの対象として鹿谷古墳群大市支群を取り上げ、測量調査に取りかかった次第である。



図7 鹿谷古墳群 調査地周辺の古墳分布図

2. 鹿谷古墳群とゴーランドとの関わり

東大阪市芝山古墳出土品はゴーランド自身がめずらしく発掘調査を行い、そのうちのいくつかがゴーランドによって計測・写真撮影されているなど、豊富な出土品と合わせ、その資料はコレクションの中心にある。鹿谷古墳群資料はそれと並び重要な位置を占めるものである。

1881（明治14）年の春、鹿谷古墳群のうち茶ノ木山に所在する古墳1基が、鹿谷村民の手により発掘された。この時に遺物が発見されたため、京都府知事あてに届書が提出され、同年5月、京都府より派遣された役人と絵師の2名がその状況調査と記録のために村を訪れるようになった。その時はあいにくの悪天候であり発掘された古墳には入れなかつたが、同じような石室に入るなどするとともに発掘した村人にその時の事情を聞き取ることもした。その記録としては周辺の古墳の分布図と、発掘された古墳（茶ノ木山所在）の石室図や出土品の絵図などがある。こうして作成された一連の書類やゴーランドの写しの一部は、京都国立博物館の考古資料部門、イギリス大英博物館のゴーランド・コレクションの中に伝わっている。

ゴーランドは鹿谷村の古墳のことを聞き、同年のうちに村を訪れたらしい。その調査に訪れた時期については

定かではないが、鹿谷村には数回に渡って訪れたようである。

京都府から派遣された絵師が完成させた図面が、当時の水準からすると考古学的な学術性が非常に高く、現在から見ても有用な資料であることから、絵師が図面を描く際に考古学的知識を持つゴーランドが何らかの形で関わった可能性が指摘されている。また、ゴーランドの持つ図面は絵師が描いたものであるから、ゴーランドと絵師の間に直接的な関わりがあったことは確か



写真29
鹿谷古墳群 遠景（南より）



写真30 鹿谷古墳群大市支群 調査風景
左から 3号墳、1号墳（南西より）



写真31 鹿谷古墳群大市支群 調査風景
2号墳（南西より）



写真32 鹿谷古墳群大市支群 調査風景
1号墳（南より）



写真33 鹿谷古墳群大市支群 調査風景
4号墳（南東より）

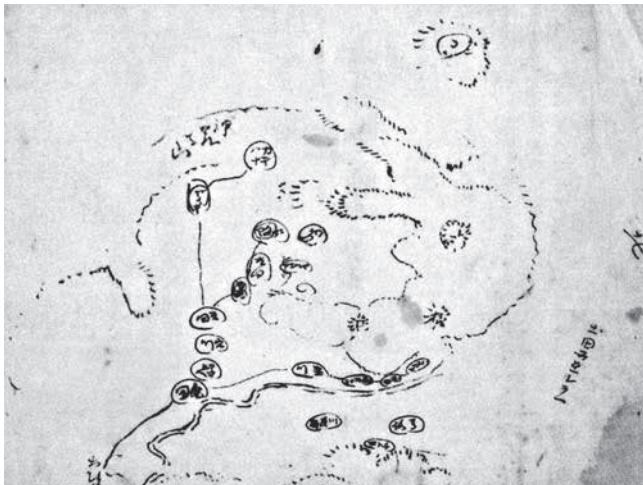


図8 鹿谷古墳群までの略地図（『学叢』第27号より）

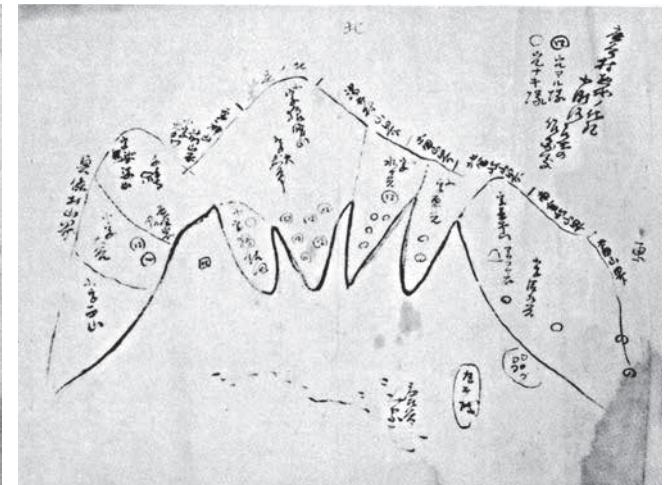


図9 鹿谷古墳群の分布図（『学叢』第27号より）

なようである。

1881（明治14）年に発掘された古墳（茶ノ木山所在）については、遺物を石室内から移動した直後に嵐によって崩壊したらしく、ゴーランドは調査の際に詳細な計測はできないどころか、石室内の写真撮影さえできなかつたようである。しかし他3基の石棚古墳と3基の石室墳、計6基の計測を行い、石棚3基については写真撮影を行った。また、MIDODUKAと書かれた石棚古墳1基の実測図を残している。

発掘された茶ノ木山所在の古墳の副葬品類は豊富で、石室の各所から小玉、耳環、大刀、脚付の子持有蓋壺、金銅製の馬具が出土したという。これらの一部は後にゴーランドの手に渡り、ゴーランド・コレクションとなるに至った。

3. 調査に至る経緯

ゴーランドが調査して以降、発掘が行われた古墳（茶ノ木山所在）および3基の石棚古墳は、茶ノ木山の名が廃れたためにその所在は長らく掴めないままであった。しかし2009（平成21）年、龍谷大学考古学研究会が亀岡市稗田野町鹿谷一帯の古墳分布調査を行ったところ、これらの古墳のうち、使用石材の特徴がゴーランドの撮影した写真と一致することから、稗田野町鹿谷大市所在の1基がかつてゴーランドが内部を撮影した石棚古墳であることが判明した。

鹿谷古墳群の豊富な副葬品は首長墓にふさわしく、亀岡盆地にしばしば見られる石棚古墳には九州の影響も考えられている。そういう意味でも古墳時代中期以降、この地域での継続的な首長墓系譜を追うことができる鹿谷古墳群の存在意義は大きい。またゴーランドの残した

資料により出土品やその出土状況が把握できる点においても貴重な古墳であり、ゴーランド・コレクション調査開始としてふさわしいものであるといえる。

4. 2010年度の調査

鹿谷古墳群は京都府亀岡市稗田野町鹿谷一帯、行者山南麓の低丘陵上に分布する。今年度はそのうち、大市地区で見つかった、ゴーランドが写真撮影を行ったが丘陵稜線上に立地するが、その下の斜面にも古墳が密集する。まず、その下方に集中する古墳5基について、まず、墳丘測量調査から取りかかった。図は20cmセンター、縮尺1/100で行った。各古墳の測量はまとめて詳細を報告するつもりであり、今回はその概略のみの中間報告となるが、現時点での所見は以下の通りである。

鹿谷古墳群大市Ⅲ支群1号墳

丘陵斜面に5基集中する中の中段中央に位置する古墳である。墳丘の高さは3.5m、径は14.0mの円墳である。石室は南向きに開口し、半壊であるが、平面規模の分かる範囲で主軸に対し長さ3.79m、幅2.0m、高さは1.04mとなる。

鹿谷古墳群大市Ⅲ支群2号墳

丘陵斜面に5基集中する中の中段東側に位置する古墳である。墳丘の高さは3.6m、径は14.0mである。方墳の可能性もあり、その場合は南北辺12.0m×東西辺14.0mと考えられる。石室は南西向きで、平面規模の分かる範囲で主軸に対し、石材の状況からは長さ4.90m、幅2.7mの規模である。石室上部が失われている。

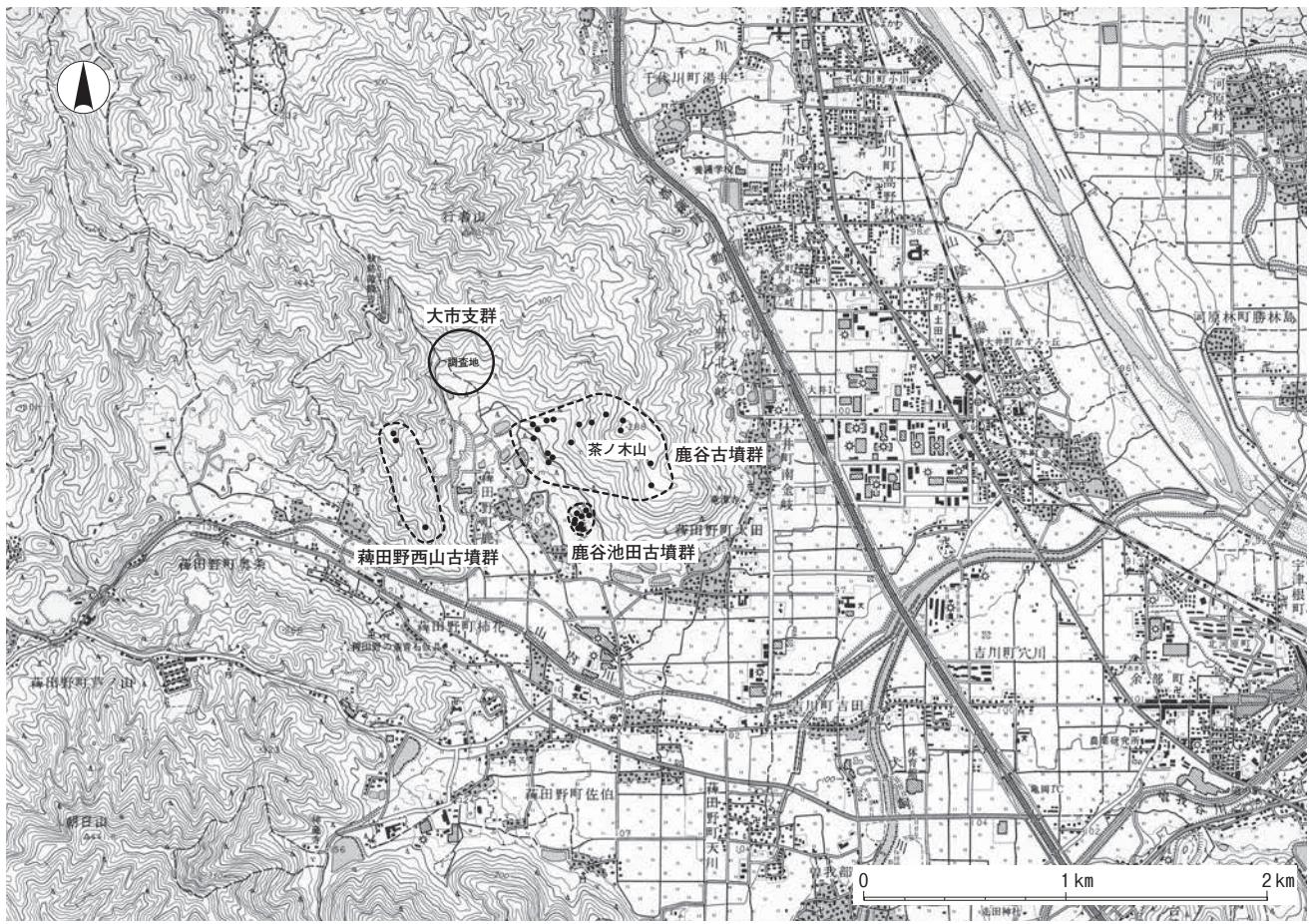


図10 鹿谷古墳群 位置図（広域）

鹿谷古墳群大市Ⅲ支群3号墳

丘陵斜面に5基集中する中の中段西側に位置する古墳である。墳丘の高さは2.4m、径は10.0mの円墳である。石室は南西向きに開口し、半壊であるが、平面規模の分かる範囲で主軸に対し長さ3.5m、幅2.1mの規模である。

鹿谷古墳群大市Ⅲ支群4号墳

丘陵斜面に5基集中する中の上段に位置する古墳である。墳丘の高さは4.6m、径は15.0mの円墳である。石室は南西向きであろう。規模は不明である。

鹿谷古墳群大市Ⅲ支群5号墳

丘陵斜面に5基集中する中の下段に位置する古墳である。墳丘の高さは2.0m、径は12.0mの円墳である。石室は南西向き、規模は不明である。墳丘表面に石室の石材の露出が見られる。

3. おわりに

今回行った現状での測量調査は、ゴーランド・コレクションの評価の上でも、また鹿谷古墳群の実態を知る上

でも、重要な意味を持つと考える。調査では、見つかったゴーランドの古墳周辺の状況を測量することによりその位置関係や墳丘規模などから鹿谷古墳群大市支群の実態に近づこうとするものである。しかし現段階では全ての測量を完了したわけではなく、引き続き調査を継続させるつもりである。鹿谷古墳群大市支群については来年度にも調査を実施し、ゴーランドとの関わりも含め、より詳細な実態を確認したいと考える。

参考文献

- 亀岡市史編さん委員会『新修 亀岡市史』本文編・資料編 第1巻 1995年
- ヴィクター・ハリス・後藤和雄編『ガウランド 日本考古学の父』朝日新聞社 2003年
- 宮川禎一「描かれた古墳出土品－明治十四年の発掘調査」『学叢』京都国立博物館 2005年
- 富山直人「ガウランドと鹿谷古墳－大英博物館所蔵の資料から－」『日本考古学』第28号 2009年
- 土井孝則「石棚古墳の研究（3）－ガウランドが撮影した鹿谷古墳とその所在－」『亀岡古墳研究』No1 亀岡古墳研究会 2010年

第6章

京都盆地における古墳の様相

1. はじめに

794（延暦12）年に造営して翌年に乙訓の長岡京から遷都された平安京の規模は東西1508丈（約4476m）、南北1753丈（約5225m）におよんだ。そのため河川整備のような大きな地形改変も行われた。吉田山付近から上鳥羽まで京の予定地を流れていた川が変更された。船岡山付近から平安京の西側を東西に流れていた川も同じく変更され、北野から平安京中心よりの西側を通って上鳥羽へ抜ける形となった。

これらの流路の形状については不明なことが多い。加茂川と高野川ももともとは京域にあたる場所、四条と五条の間辺りで合流していたと推定される。ただ、ある時期に加茂川上流を遮断し、出町付近にて高野川に交わらせた。その時期は、遷都直前とも、それよりもかなり前の改修とも考えられるがはっきりしない（1）。

平安京域の遷都以前はまだまだ分かっていないのである。ところが近年の発掘調査によって、古墳時代の遺物や遺構などが京域より検出されており、その地域で人々が生活していたことが判明しつつある。

本稿では、こうした京都盆地における古墳のあり方について、最近の成果をふまえて紹介したい。

2. 京都盆地と古道と古墳グループ

まず京都盆地の範囲を明らかにし、古墳をグループに分け、それごとで概観することにする。

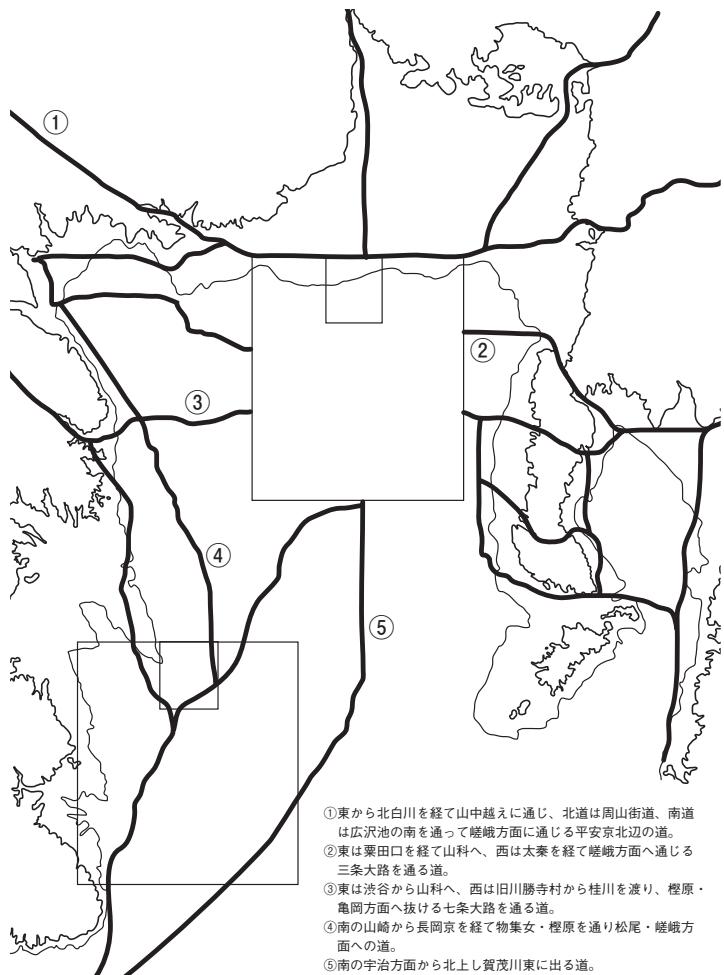
宇治川は滋賀県琵琶湖を水源としその上流部は瀬田川と呼ばれ、田原川との合流点で方向を変えて宇治川となり、南から北へと流れを変える。400年ほど前まで宇治川は宇治橋を過ぎたあたりで大きく広がっていたと考えられる。ここではこの地点を京都盆地の南限としたい。

京都盆地を細分するのに古道を見てみたい。その主なものは東西・南北あわせて5つある。まず東西に走る道は①東から北白川を経て山中越えに通じ、宇多野で左右に別れ、北道は周山街道に通じ、南道は広沢池の南を通って嵯峨方面に通じる平安京北辺の道。②東は粟田口を経て山科へ、西は多少右折しつつ太秦を経て嵯峨方面へ通じる三条大路を通る道。図11 京都盆地と古道

③東は渋谷を越えて山科へ、西は旧川勝寺村を経て、桂川を渡り、樅原を経て亀岡方面へ抜ける七条大路を通る道と3つである。南北に走る道は④南の山崎から北上し、長岡京を経て物集女・樅原を通り松尾・嵯峨方面に通じる道。⑤南の宇治方面から北上し賀茂川東に出る道と2つである（図11）。

こうした古道のうち、①の道と、渋谷道から大龜谷に通じている道は、直線的で平安京に沿って走ることから、平安京ができる前のものと考えられる。また、③の道や、山崎・友岡を通り平安京へ抜ける道など、川を横切る形で通じている道は比較的新しいと思われる。それに対して、山科から近江に抜ける道や淀川沿いのものなど、山麓や川沿いを通じる道は、平安京が造営される以前から使用されていたであろう。

この京都盆地内では、大型の古墳が大和に遅れることなく築造されはじめた。前期の3・4世紀は盆地西南部の丘陵地に集中し、向日丘陵や樅原丘陵上に100m前後の大型前方後円墳がつくられた。中期の5世紀に入ると向日・樅原丘陵上の古墳が平野部にもつくられるよう



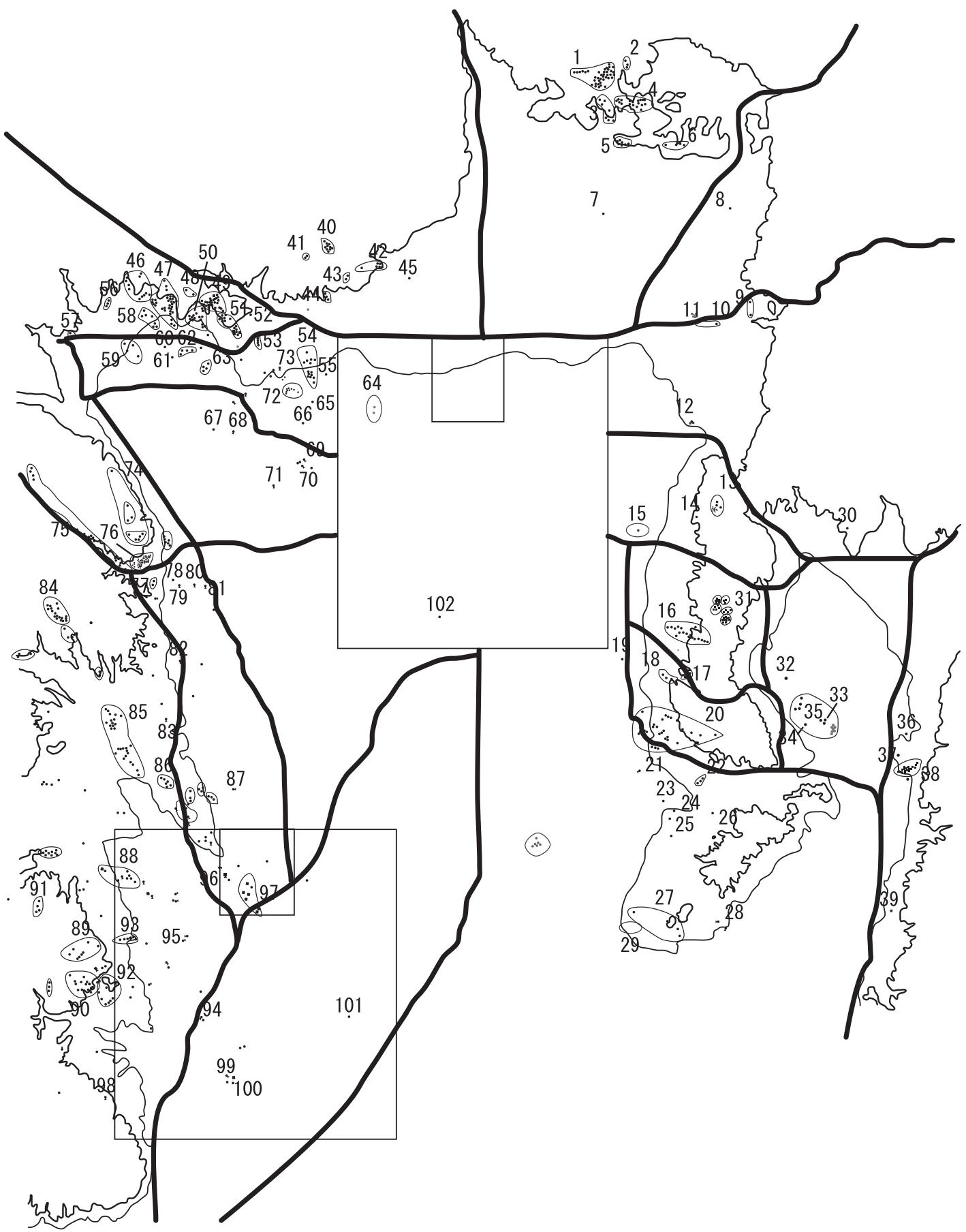


図12 京都盆地の古墳 分布図

岩倉・一乗寺グループ

- 1 本山古墳群
- 2 八幡古墳群
- 3 ケシ山古墳群
- 4 脇枝古墳群
- 5 西山古墳群
- 6 林山古墳群
- 7 半木町塚跡（王塚）
- 8 向畠古墳
- 9 池田町古墳群
- 10 追分町古墳群
- 11 京都大学教養学部構内遺跡
- 12 岡崎遺跡

東山グループ

- 13 将軍塚古墳群
- 14 八坂方墳
- 15 六波羅政庁跡
- 17 本多山古墳群
- 18 本多山古墳群泉山支群
- 19 塚本古墳
- 20 稲荷山古墳群
- 21 番神山古墳
- 22 砥粉山古墳群
- 23 仁明陵北古墳
- 24 けんか山古墳
- 25 谷口古墳
- 26 山伏塚古墳
- 27 永井久太郎古墳（桃山古墳群）
- 28 黄金塚古墳群
- 29 伏見城跡

山科グループ

- 30 大岩古墳
- 31 旭山古墳群
- 32 花山神社古墳
- 33 宮道古墳
- 34 稲荷塚古墳
- 35 中臣十三塚古墳群
- 36 大宅古墳
- 37 向山古墳
- 38 醍醐古墳群
- 39 醍醐庵寺

3. 京都・山科盆地における古墳の現状

ここでは、現在残っている、または、発掘調査により確認された古墳、特に小古墳や群集墳を中心にグループごとに述べていきたい。

（1）岩倉・一乗寺グループ

岩倉は、京都盆地の北端、四方を山で囲まれた小規模な盆地である。この地域の大規模な開発は遅く、目立つのは5世紀後半以降のことであった。しかし、岩倉忠在地遺跡の発見により、弥生時代後期～古墳時代前期にこの地で集落が営まれていたことがわかるようになつた（2）。

このグループは賀茂川・高野川合流地点から岩倉盆地との障壁をなす丘陵上に築かれた古墳群からなる。古墳の規模こそ小さいが、4世紀の首長墳も含むと考えられる。岩倉盆地内で5世紀にさかのぼる可能性があるのは幡枝古墳である。ほかに、ケシ山の山頂から北斜面、平地にかけて古墳が点在する幡枝古墳群をはじめとして、ケシ山古墳群、本山古墳群、西山古墳群、林山古墳群などの群集墳が存在する。

北からまず、北区上賀茂ケシ山、左京区岩倉幡枝町にあるケシ山古墳群はケシ山山頂部に1基、尾根筋にそって円墳5基が点在する。北区上賀茂山本山国有林・左京区岩倉幡枝町にある本山古墳群は、径約10mの円墳42基で構成される。1963（昭和38）年に1号墳が調査され、平面がT字形を呈する両袖式横穴式石室がある（3）。

岩倉幡枝町にある幡枝古墳群は、山頂から北斜面、さらに平地にかけて20基以上が点在する。うち1基は1989（平成元）年調査の円墳である。主体部は木棺直葬であり、もう1基からは仿製神獣鏡なども出土する（4）。

また、松ヶ崎西山山頂には西山古墳群があり、墳丘径10～15mの7基の円墳で構成される。左京区松ヶ崎の林山古墳群は古墳が丘陵上に4基点在し、周辺には6世紀代の須恵器の散布地がある。どの古墳群も主体部に横穴式石室をもつと考えられる。

扇状地から吉田山付近にかけては、京都大学構内にて

嵯峨野グループ

- 40 原谷古墳群
- 41 宇多野谷古墳
- 42 衣笠山古墳群
- 43 朱山古墳群
- 44 住吉山古墳群
- 45 衣笠天神森町古墳
- 46 朝原山古墳群
- 47 長刀坂古墳群
- 48 遍照寺山古墳群
- 49 御堂ヶ池古墳群
- 50 山越古墳群
- 51 音戸山古墳群
- 52 宇多野病院古墳
- 53 三瓦山古墳群
- 54 双ヶ岡古墳群
- 55 五位山古墳
- 56 観空寺谷古墳群
- 57 鳥居本古墳群
- 58 嵐嶼七ツ塚古墳群
- 59 大覚寺古墳群
- 60 一本木古墳
- 61 稲荷古墳
- 62 広沢古墳群
- 63 南野古墳群
- 64 遍照寺古墳
- 65 太秦馬塚古墳

松尾グループ

- 66 仲野親王墓古墳（垂義山古墳）
- 67 千代ノ道古墳
- 68 蛇塚古墳
- 69 清水山古墳
- 70 天塚古墳
- 71 段ノ山古墳
- 72 常盤東ノ町古墳群
- 73 仁和寺下層古墳
- 74 松尾山古墳群
- 75 西芳寺川古墳群
- 76 西芳寺古墳群
- 77 衣笠山古墳群
- 78 上ノ山古墳
- 79 麺塚古墳
- 80 清水山古墳
- 81 天鼓の森古墳
- 82 天皇の杜古墳
- 83 一本木古墳
- 84 大枝山古墳群
- 85 福西古墳群
- 86 物集女車塚古墳

長岡グループ

- 87 灰方古墳群
- 88 芝古墳群
- 89 南条古墳群
- 90 大原古墳群
- 91 カラガネ岳古墳群
- 92 稲荷山古墳群
- 93 七ツ塚古墳群
- 94 今里大塚古墳
- 95 今里車塚古墳
- 96 元稻荷古墳
- 97 山畠古墳群
- 98 鳥居前古墳
- 99 恵解山古墳
- 100 境野古墳群
- 101 茅原の塚古墳

低地グループ

- 102 梅小路古墳

なり、東山山麓にも前方後円墳がつくられた。その後、中期から後期にかけて桂川流域にのぞむ盆地北西部の首長墓域に変化があらわれ、向日・櫻原丘陵での大型墳の築造がなくなり、30m前後の小型前方後円墳が築造されはじめた。桂川流域の首長墓築造が目立たなくなつたのに対して、主だった古墳のなかつた嵯峨野丘陵一帯に前方後円墳が出現し、終末期まで首長墓築造が続く（注1）。

京都盆地の大型墳の築造は以上のような大きな移動現象があるが、群集墳の方は丘陵上、丘陵斜面、谷筋などに点々と築かれている。このことから古道と群集墳の分布を中心に考えてグループ分けをすると、（1）岩倉盆地から京都大学付近の吉田山あたりまでの岩倉・一乗寺、（2）山科盆地と京都盆地の間にある山間地帯の東山、（3）山科盆地周辺の山科、（4）嵯峨野の丘陵部から台地にかけての嵯峨野、（5）桂川右岸域の松尾、（6）小畑川左岸の長岡、（7）桂川・賀茂川・宇治川の扇状地地域の鳥羽と（8）平安京を含む低地に分けることができる（図12）。

検出された古墳群や一乗向畠古墳群、池田町古墳群、追分町古墳群、そして、鶴塚古墳が存在する。

これら岩倉を中心に分布する古墳の造営主体となる遺跡として、岩倉忠在地遺跡や植物園北遺跡などの集落遺跡があげられる。また、鶴塚古墳などは周囲に広がる岡崎遺跡との関連が考えられる。

左京区の高野川の扇状地内にある一乗寺向畠遺跡内では、1986（昭和61）年度の調査で古墳が1基検出された。横穴式石室の痕跡と周溝が検出され、石室の掘形と床面の一部が遺存し、向畠古墳と名付けられた。形状や丘陵地からゆるやかに傾斜する周辺地形からみて南西方向の開口と思われる。周溝の形からは径20m前後の円墳とで、出土遺物から6世紀末～7世紀初頭と考えられる（5）。

同じく、下鴨半木町遺跡の南にある半木町塚跡には、江戸時代に王塚と呼ばれる古墳が存在したようであり、古地図にも記載が残る。現在は地表が周囲よりもわずかに高く残るのみであるが、かつてはこの扇状地にも石の部屋が存在したという話である。

平安神宮の下層に存在した岡崎遺跡内で1991（平成3）年度の発掘調査で1955（昭和30）年まで存在した鶴塚の跡を検出した。鶴塚は1894（明治27）年に後高倉太上天皇の御陵参考地に指定されたが、先述の発掘調査が行われ東山区月輪陵に移転された。その鶴塚の下層で円形にめぐる周溝を検出し、出土須恵器が6世紀中葉であり、その墳丘を引き継ぐことがわかり、1号墳となった。また周溝を一部共有してもう1基の古墳を検出している。これは2号墳となった。1号墳、2号墳、鶴塚の順で、1号墳は径約20m、2号墳は径20～30mの円墳に復元された（6）。『明月記』などによる岡崎御幸の記事には、いずれも尊勝時・最勝寺の北から法勝寺に入った様子が記されている。これは大きな塚が崇りのある場所とみなされ、恐れられていたためと考えられる。鶴塚には、鶴が棲んでいると信じられていた。このことからは、この信仰により当時鶴塚にはまだマウンドが存在していたことが伺え、古墳として認識されていた証拠となると考えられる。

この地より北側の京都大学構内調査により古墳が確認される。5世紀から6世紀初頭にあたる方墳7基と土壙墓1基は吉田二本松古墳群と呼ばれる。京都大学教育部構内の1982（昭和57）年度の調査では方墳5基が発見された。規模は一辺10～13mで、幅1～2m、深さ0.5mである。それぞれがU字形周溝をもち、3号墳は2重の周溝をもつ。どの古墳も埋葬施設は、粘土、石材の出土

がないことから、木棺直葬と考えられている（7）。その後、1995（平成7）年度の調査でも一辺10mの方墳が検出された。出土須恵器から5世紀後葉になる。形象埴輪片も出土する（8）。また、本部構内の1999（平成11）年度の調査では、円形にめぐる溝状遺構が検出され、7世紀前半の須恵器が出土し終末期古墳の可能性が高いとされる。隣接地区でも周濠状遺構の続きが検出される（9）。2000年（平成12）年度の調査では吉田山の西南の麓で、家形埴輪、円筒埴輪片が中近世の包含層や攪乱から出土した（10）。

この地帯は、弥生時代の方形周溝墓が検出されることと中世墓の存在から、古くから墓域として利用され、その後も葬送の地として認識されていたのであろう。

吉田山の東側には北白川から流れる川が平安京遷都以前には存在していた。ちょうど、その平地部分の古墳の間を縫う形で流れしており、この川を意識して古墳がつくられた可能性がある。その分布から、岩倉川より西から東側へ向かって築造されたと考えられる。また南には、墳形は円墳で主体部は横穴式石室の2基で構成される池田町古墳群がある。

（2）東山グループ

東山グループは、京都盆地の東端に存在する丘陵から斜面にかけて広がる。さらに、賀茂川沿いに北から八坂、深草、桃山といった小グループに細分される。

北から順番にみると、まず、八坂グループは東山丘陵の北部に存在する古墳群で形成される。東山丘陵山頂、栗田口栗田山南町にある將軍塚古墳群を中心とする。標高215mの華頂山山頂部に3基が点在する。山頂の1号墳の内部主体は箱式石棺、2号墳は大日堂内で、主体部は竪穴式石室であったが全壊している。3号墳は將軍塚と呼ばれ、径40mの円墳である。また、山頂部の南西斜面に小古墳と推定されるマウンドが十数基ある（11）。

その丘陵の西斜面、東山区下河原町にある八坂方墳は別名バイタ古墳と呼ばれる。高台寺境内にある方墳で、一辺20m、高さ3mの2段築成で埴輪列をもつ5世紀のものである。將軍塚古墳の3号墳と八坂方墳はともに首長墓としてつながると推定される（12）。

斜面を下ったところでは、森浩一氏が六波羅密寺の石塔の台石に6世紀の石棺蓋が利用されていることを指摘する。そして、この寺の本堂を修理したときにも埴輪片が出土したらしい。さらに森氏は清水寺の本堂の下にも古墳があるとする。同じく清水寺の斜面にも古墳のマウ

ンドをみることができるとも述べる（13）。1981（昭和56）年度に調査された六波羅政庁跡では、平安時代後期の包含層からのものであるが円筒埴輪片が出土する（14）。六波羅密寺の石棺蓋とともに、その付近に古墳が存在したといえる要素の1つになる。

深草グループは、今熊野から深草にかけての丘陵西斜面にある鳥戸野、本多山、稻荷山といった古墳群を中心とする。北から、東山区今熊野泉山町の鳥戸野古墳群は標高70～90mにある。宮内庁によって一条天皇皇后定子が葬られたとされる鳥辺野陵内にある。おおむね円墳で構成され、径約20m前後の15基の古墳が確認される。2・5号墳は造出状のものがあり、横穴式石室と推定される（15）。陵内で採集される須恵器は6世紀のものである。しかし、11号墳は、墳頂部が平坦で、豊穴式石室であるとも考えられている。このことから、古墳群の築造年代幅は広がる可能性もある（16）。

隣接する本多山古墳群は泉涌寺の背後にあり、丘陵の単位の違いにより本多山古墳群と泉山支群に呼び分けられる。1号墳は土師質の亀甲形陶棺をもつ横穴式石室であったと伝えられる。1984（昭和59）年度の試掘調査によれば、丘陵の南斜面に円墳が3基以上点在し、1基は墳丘径9m、主体部は横穴式石室、奥壁、側壁の一部を残すことがわかっている。もう1基は、円墳の周溝の一部と推測される（17）。

伏見区稻荷山、深草にある稻荷山古墳群は、稻荷山山頂から西山麓に20基以上点在する群集墳である。山頂部にも3基以上点在し、うち、一ノ峰古墳は円墳、そして方墳もしくは前方後円墳の可能性もある二ノ峰、三ノ峰、荒神ヶ峰古墳がある。山麓に点在する古墳群は6世紀の築造で、墳丘径9～18m、高さ1～1.8mと小さい。どの古墳も横穴式石室をもつ可能性がある（18）。

稻荷山古墳群は丘陵突端部を中心にして立地するが、丘陵のふもとにある稻荷山命婦谷遺跡では円筒埴輪を2本合わせた棺が検出される。年代と立地から、稻荷山古墳群に統いて、仁明陵北古墳、しばらくの間をおいて番神山古墳が築造される。

鳥戸野古墳群の北に単独である総山古墳は、東山区今熊野、東山山地の西斜面山腹にある円墳である。横穴式石室の玄室のみが残る。また、泉山支群の西には塚本古墳が本町の丘陵端に所在する。径20mの円墳で、横穴式石室をもつ。やや北によるが、今熊野阿弥陀ヶ峯町の阿弥陀ヶ峰古墳は標高90mにある円墳である。

桃山グループは、東山丘陵の南端の西斜面に分布する

古墳群で形成される。この地区は伏見城築造時に大規模に削平され、例示できる古墳は少ないが、桃山永井久太郎町の丘陵斜面にあった永井久太郎古墳群がこのグループに含まれる（19）。

さらに南の桃山グループは、東山区と伏見区にわたり、古墳が存在することがわかった。永井久太郎古墳を含む桃山古墳群が丘陵上にあり、また、伏見城の本丸の存在した現在の明治天皇陵内にも古墳が存在する。その付近では円筒埴輪や朝顔形埴輪片がみつかる。5世紀後半と判断される埴輪は1988（昭和63）年度の調査の方形周溝墓の溝から出土する。それらは炭とともに廃棄されたと考えられている（20）。また、1986（昭和61）年度の調査では家形と思われる形象埴輪片も出土しており、大型墳の存在をうかがわせる（21）。一方、東山丘陵の南端に、地形から、黄金塚古墳という大型墳2基が100m、120mをこえることも推定される。

稻荷山古墳群と永井久太郎古墳群の間の斜面にも古墳はある。伏見区深草瓦町にある仁明陵北古墳は、副葬品に六虺文鏡や碧玉腕飾類、銅鏡がある。また、円筒埴輪も出土し、首長墓系譜と推定される（22）。伏見区深草東瓦町にあるけんか山古墳は名神高速道路建設にともなう発掘調査では古墳の痕跡が見い出だせなかつたが、車輪石が出土したと伝えられる（23）。その東の山伏塚古墳は深草鞍ヶ谷町、標高70mの丘陵部に立地する円墳で横穴式石室である。けんか山古墳の南には谷口古墳がある。伏見区深草鞍ヶ谷町の浄蓮華院境内にあり、直径24m、高さ3mの円墳である。仁明陵北古墳とけんか山古墳は4世紀、ほかは6世紀と考えられる。

深草には、大龜谷東久宝寺町のするが塚古墳や深草鐘ヶ谷町の鐘ヶ谷古墳などがある。前者は標高約70mの丘陵のゆるい斜面上に立地する直径11m、高さ2mの円墳であり、後者は標高130mの丘陵山頂に立地する円墳である。どちらも6世紀に属する。それよりやや北に位置する砥粉山古墳は、丘陵の尾根上に3基点在していた。

森浩一氏はこれらの古墳で深草地域の古墳群について、稻荷山全体を深草山と呼称していたと仮定した。そして、稻荷山古墳群の一ノ峰から三ノ峰古墳を中心にこれらを深草古墳群と呼ぶ。さらに記録や伝承から3基の古墳があったとみる。仮にa号墳、b号墳、c号墳と付けられ、埋葬品らしきものが出土したことが伝わる。a号墳、b号墳のどちらかが仁明陵北古墳であると思われ、けんか山古墳や谷口古墳、a・b・c号墳から前期から中期にかけて形成された古墳群の存在を復元した。さらに、山

伏塚古墳をこの古墳群の最後とし、これ以外に深草の西斜面に6世紀の古墳群を見い出しにくく、深草山埋葬地は横穴式石室のような石材を用いた墓を葬る土地ではなく、埋葬のみが慣習化した可能性が強いと述べた(24)。しかし、現在では、稻荷山古墳群として、山頂から西山麓に古墳が20基以上存在するとされ、横穴式石室であろうと推定されている。

(3) 山科グループ

山科盆地は、弥生時代中期から4世紀の方形周溝墓、天智陵古墳、西野山古墓など幅広い時代の墳墓が点在する。古墳は70基以上を数えるが、その大半を旭山・醍醐・中臣十三塚古墳群が占める。

山科盆地の西側には中臣十三塚古墳群、宮道・稻荷塚・花山神社古墳などが残る。これらはやや台地状になった場所にある。その東側には向山古墳や大宅古墳、醍醐古墳群がある。それらはちょうど山科盆地の南東側に一部張り出す丘陵の稜や腹に所在し、そこから山科盆地が一望できる。現状では向山古墳は丘陵端に位置する。以下、平地に存在するものから順に各古墳群を概観する。

中臣十三塚古墳群は、山科盆地の西側、中臣遺跡内にある。山科区の栗栖野丘陵一帯に所在した群集墳である。山科川と旧安祥寺川の合流点北側に広がる台地に位置し、主に旧安祥寺川に面する。現在その十三塚の姿がうかがえる古墳は、西野山中臣町の折上神社の境内に残る稻荷塚古墳と勧修寺西栗栖野町に所在する後醍醐天皇の生母である藤原胤子の母、宮道列子の墓とされる宮道古墳の2基のみある。ほかに半壊のものが3基、どれも円墳であることが調査からわかる。そして、横穴式石室と考えられる。規模には多少の差があり、宮道古墳の径が、南北32m、東西35mであるのに対して、稻荷塚古墳が18m、他の古墳で7~14mとなる。石室の開口方向が判明するものは南を向き、S-80°-WからS-50°-Wと西に振る傾向がある。稻荷塚古墳からは埴輪片も出土するらしい。出土須恵器などから、稻荷塚古墳が6世紀後半と古く、他の古墳が7世紀初頭と考えられている(25)。

中臣遺跡内では、西野山中臣町から勧修寺西栗栖野町で、弥生時代後期から4世紀にかけての方形周溝墓が、その後一旦間があき、6世紀に入ってから中臣十三塚古墳をはじめとした古墳群がつくられはじめたと思われていた。しかし、1998(平成10)年の中臣遺跡79次調査で古墳が9基と木棺墓3基が検出された。これらは低墳丘のもので周溝のみが残り、円墳の可能性のある古墳2以

外は、いずれも方墳となる。墳丘規模が一辺10m前後におよぶものと6m前後のもの、その中型のものとにわけられる。大型は周溝幅が2m以上あるのに対して中型は幅1m程である。2重周溝をもつ特殊なものもある。出土遺物から、古墳7が5世紀中頃、古墳1~6が5世紀後半から末とされる(26)。

調査歴をさかのぼると、1979(昭和54)年の23次調査では、5世紀のものと思われる土壙墓2基も検出される。1986(昭和61)年度には円筒埴輪片も出土する。これらのことから、中臣遺跡では6世紀に限らず、長期にわたり墳墓が継続して築造されていたことになる。

山科区川田山欠ノ上の平地の花山神社古墳は円墳であると考えられ、境内に稻荷塚として残る。西野山中鳥井町の平地にある中鳥井古墳は円墳である。

醍醐古墳群は、伏見区醍醐に所在する。山城盆地の東南端、行者ヶ森と高塚山の間の裾、舌状の台地上に営まれる。方墳19基、円墳1基で構成され、唯一の円墳である1号墳、通称耳塚は1980(昭和55)年と1986(昭和61)年に発掘調査が行われた。径25m、高さ3mの規模で、内部主体は両袖式と無袖式の横穴式石室の2つをもつことがわかる。ほかの方墳は1980(昭和55)年に2・3・9号墳が発掘され、2・9号墳で無袖式横穴式石室、3号墳で小豎穴式石室を検出する。1984(昭和59)年には、14号墳を発掘し、無袖式の横穴式石室を検出した。さらに、1985(昭和60)年には3・4・8~13・15~20号墳の計14基を発掘し、両袖式1基、片袖式1基、無袖式6基および小石室5基が検出された。それぞれ一辺5~12mの規模で、1号墳は6世紀後半、そのほかは7世紀初頭の築造とみられる(27)。

旭山古墳群は、上花山旭山町および東山区今熊野にわたる東山丘陵の中央部、六条山のゆるやかな南斜面に存在する。東西約150m、南北約290mの範囲の中に合計27基の古墳が密集する。1977・78(昭和52・53)年にかけてD・E支群の発掘調査が行われた。墳丘は一辺9m前後のものと6m前後のもので、前方を除く3方に溝を設けたコの字形の周溝で方形に区画される。内部主体は玄室に比べて狭く長い羨道をもつ両袖式とともに、無袖式横穴式石室、小石室に分かれる。9m級の方墳には両袖式の横穴式石室、6m級のものからは無袖式か小石室が検出される。開口方向はほぼ南向きで、追葬の痕跡はみあたらない。副葬品の大半は須恵器で、ほかに土師器、刀子、金環などが出土する。7世紀初めから中頃に築造され、年代差があまりなく短期間にみられる。B支群は

大型方墳1基を含む5基の方墳で、発掘された2基から鉄滓が出土し、鉄滓出土の大岩町遺跡、焼土・フイゴの羽口・鉄滓出土の大塚遺跡との関連も指摘される（28）。

また、丘陵部に残る単独墳として、向山古墳がある。醍醐の山を越えた北側、山科区大宅向山の丘陵頂に所在する。円墳で、径17m、高さ5m、横穴式石室とされるが、小石材が散乱する現状である。北を向いて山科盆地を一望できる立地であることから、古くさかのぼる可能性もある。京都橘大学が2009（平成21）年に墳丘測量を行った。墳丘上に残る礫敷きは2種類存在し、それぞれ違う時期に埋葬が行われた可能性もある。大宅古墳は、向山古墳から谷を隔ててすぐ北側にある、山科区大宅鳥居脇町、大宅廃寺境内にある径13mの円墳で、両袖式横穴式石室をもつ。内部から6世紀末の須恵器が出土し、他にも金環、人骨がみつかる。この古墳築造後、白鳳期には大宅廃寺の境内に含まれる。

大宅古墳は平地とあるが、もとは斜面であった場所を大宅廃寺創建時に平坦に削平されたものと思われる。発掘時は「創建時に破壊をまぬがれたことからこの古墳の被葬者と大宅廃寺の創建者とが密接な関係」にあり、寺院の敷地内に残した可能性を坪井清足氏は指摘する。しかし、窪地、谷鞍部の一番低い場所ゆえに大宅古墳が残ったとも考えられる（29）。

大岩古墳は、山科区御陵大谷町の丘陵稜に所在する。現在は、天智陵古墳の存在する丘陵の北部に単独で存在する。円墳で、露出する石材から横穴式石室をもつと思われる（注2）。

山科グループ内の単独で存在する古墳としては、大宅・向山・中鳥井・大岩古墳があるが、大宅古墳は群集墳であった可能性も高い。一方、山科盆地の北部、天智天皇陵の背後にある大岩古墳は1基のみ単体で存在している円墳といわれるが、凹状の落ち込みに岩が散在し、斜面に古墳が存在し、それらとともに古墳群を形成していたのではないか。天智陵古墳造営時に古墳を削平したとも考えられるが、両者の間には距離があり、その間に古墳が見うけられない。

山科グループ内における伝聞では、大型墳が山科盆地東部の山裾、山科区大塚西浦町にあったという。現在の大塚付近にあたる大塚村の中には古墳が数基存在し、そのうち、山科大塚古墳と称されるものは、径約20mの円墳とも前方後円墳であったとも伝えられ、内部には石棺のようなものがあったらしい（30）。

中臣遺跡から東にある醍醐廃寺境内で1990（平成2）

年度の調査で5世紀代の円筒埴輪片が出土する。何らかの過程で持ち込まれた可能性もあるが、古墳があったとするなら、丘陵部突端から奥へと谷が広がるところに立地したことになる（31）。

（4）嵯峨野グループ

嵯峨野は桂川の左岸、京都盆地の西北部にひらけた台地である。この地で開発が進みだすのは現在の広隆寺付近で前方後円墳の築造がはじまった5世紀後半からである。段ノ山古墳の築造を契機として、清水山・天塚・仲野親王墓・蛇塚古墳の順に築造されていったと考える。その周辺では6世紀後半に入つてからで、中位段丘上に大型円墳が築かれる。7世紀初めになると朝原山をはじめとし、山際や山腹に密集して群集墳がいっせいに築造され、総計20群を越える古墳群が存在する。

分布をみると、台地平坦部に存在する古墳群と北方の丘陵部に群在する古墳群がある。平坦部の古墳群は数基ずつまとまるものが多い。丸山古墳群をはじめ、嵯峨野の北部にある広沢池周辺などに存在する。丘陵部の古墳群は朝原山・長刀坂東・西支群・御堂ヶ池古墳群などの50基を超える古墳があり、平坦部の古墳群と違いかなりの密集具合である。

平坦部の段ノ山古墳は、右京区梅津段町に所在する墳丘長75m以上の前方後円墳である。後続する太秦の清水山古墳は墳丘長60mの前方後円墳である。太秦松本町の天塚古墳は墳丘長71mの周濠をもつ前方後円墳であり、2つの横穴式石室をもつ。垂箕山町の仲野親王墓古墳は上記の平地の古墳とは異なり、太秦段丘上の南西縁辺に築造される。垂箕山古墳とも呼ばれる墳丘長約75mの前方後円墳で、周堤と周濠をもつ。そして、太秦面影町にある蛇塚古墳は墳丘長75mの前方後円墳で、墳丘はすでに消失するが、玄室長6.8m、幅3.8m、羨道長11mの大きな横穴式石室をもつ（32）。それぞれ段ノ山古墳は5世紀後半～末頃、天塚古墳は埴輪や石室から6世紀前半、蛇塚古墳は6世紀後半の築造とみられ、それぞれの古墳が継続的に築造された。

北方部のものは2つにわかれる。西に独立した円墳群もしくは群集墳の中でも各支群を形成しはじめる契機となるやや大きい古墳が集まる。円山・入道塚・南天塚古墳は、嵯峨に所在する大覺寺古墳群のうちでも大型の円・方墳となる。現在、淳和天皇皇后正子内親王の陵墓参考地となる円山古墳と呼ばれる1号墳は、径50m、高さ9.1mの円墳である。入道塚古墳と呼ばれる2号墳は

南北25m、東西30mの方墳で、これも陵墓参考地である。南天塚古墳と呼ばれる3号墳は南北8m、東西13mで、墳丘の形は方墳と推定される。4号墳は径28m、高さ4.5mの円墳で、狐塚古墳と呼ばれる。いずれも両袖式横穴式石室である（33）。

また、嵯峨広沢池下町の広沢古墳群は広沢池南方の台地から平地にかけて円墳が3基点在する。その1号墳が古墳群の中心となる円墳になる。径30m、高さ4.5mの円墳で、無袖式横穴式石室であった（34）。

東側には古墳群の中心となる大型円墳があるものに、御堂ヶ池1号墳や双ヶ岡1号墳がある。御堂ヶ池古墳群は、梅ヶ畑向ノ地・鳴滝音戸山町にある標高100～140mの山中に立地する。径10～20m、高さは1.8～5.5mで、横穴式石室の円墳が23基あり、20号墳は八角墳とも推定される（35）。双ヶ岡1号墳は御室双岡町の平安京の西城にそって位置する丘陵上にある。1号墳である一ノ丘古墳は直径44m、高さ7.75mで横穴式石室である。

ほかに、嵯峨七ツ塚古墳群をはじめ、径20m以上の規模の大きな古墳を単数あるいは数基もつ古墳群があり、主体部に横穴式石室をもつ。

そして広沢池の北や朝原山を中心とした丘陵上に密集して築かれる群集墳がある。群集規模の大きいものでは北嵯峨にある長刀坂古墳群で、広沢池畔からその北方丘陵の斜面に径7～17m、高さ0.5～3mの円墳が31基点在する。また、北嵯峨朝原山町の朝原山古墳群は朝原山丘陵頂部から裾部にかけて、径7～10m、高さ1～3mの円墳が11基点在する。一部、宮内庁が管理する。音戸山古墳群では、標高60～148m、丘陵頂部から裾部にかけて、径約10m、高さ2～3mの円墳14基、一辺約9～13m、高さ約0.1mの方墳3基が点在する。常盤東ノ町古墳群にも、緩やかな丘陵上に点在する円墳が10基以上存在すると推定される。これらは6世紀後半に築造がはじまり追葬を含めて7世紀前半ではつづく。

嵯峨野グループでは埋没古墳がしばしば発掘される。京都大学考古学研究会が1971年に発行した『嵯峨野の古墳時代』で嵯峨野グループの古墳群をまとめたが、その後の調査で、70基以上の古墳が確認されるに至る。異1号墳の南では同じグループの古墳周溝がみつかる。御堂ヶ池古墳でも削平と思われた2号墳が発掘された。常盤東ノ町古墳群でも古墳の痕跡や石室の石材が出る。このような古墳の近辺だけでなく、寺院の下層からも古墳の痕跡がみつかる。1988（昭和63）年度の調査では仁和寺の下層から6世紀の円墳が検出された。径20mで大きい

片袖式横穴式石室をもつ（36）。同様に、遍照寺跡である児神社境内でも古墳のマウンドと思われるものがある。径30m、高さ5mの円墳である遍照寺古墳とともに古墳群を形成していたとも考えられる（37）。

嵯峨野グループの古墳は平安京域にも及んだ可能性がある。双ヶ岡古墳群の付近が嵯峨野の東端と考えられていたが、平安京域内に古墳ではないかというトウゴロ山古墳がある。

岩倉グループよりの北区に所在する丘陵上には、東から朱山・衣笠山・原谷古墳群が存在する。その山頂と麓の古墳との間は、岩盤が露出するため古墳が築かれなかったともいわれ、立地の地盤が岩倉グループの扇状地と異なる。朱山古墳群は竜安寺の北の斜面谷部にある円墳2基で、横穴式石室である。衣笠山古墳群は6基の古墳が点在する。丘陵頂に1基、ほかは麓に築造され、その間の西側斜面には古墳がない。衣笠赤坂町の原谷古墳群は原谷の丘陵頂に十数基が密集する。径20mの山頂の円墳とその周囲の径7m前後の円墳がある。衣笠山古墳群の東側のやや離れて衣笠天神森古墳が平地よりにあり、円墳で横穴式石室をもつ。

この地域の墓域の広さや建築数からみてかなり大規模なものとなる。そのため、嵯峨地域内の集落以外にも造営主体集団を想定に入れる必要がある。

双ヶ岡古墳群付近ではそれを取り巻くように、仁和寺などの寺社や屋敷などが断続的に建てられる。建造物群は擬似的な条坊をつくるが、それらはちょうど常盤馬塚古墳をはじめ五位山古墳などの古墳のある区域をさけているかにみえる。しかし、建物の中心的存在である仁和寺下層で古墳が検出されることから、むしろ古墳を削平して寺院を築造したためそこに古墳が見あたらないとも考えられる。

これらの古墳群は、北白川を経て山中越えに通じ、広沢池の南を通って嵯峨方面に通じる平安京北辺の古道の前身を媒介にして築造されたと考えられている。古道は南北に徐々にのびていき平安京の南端付近にまで至ったが、古墳の築造が終わると同時に、この古道も広隆寺などへの参詣道へと機能を変えたかもしれない（38）。

（5）松尾グループ

桂川の右岸に広がるグループである。この地域には、墳丘長100mの前方後円墳である一本松塚古墳からはじまる首長墓の系譜がある。丘陵の尾根や斜面からはじまり、径50mの百々池・径30mの円墳である塚ノ本・墳丘

長86mの前方後円墳である天皇の杜古墳が築造された。出土遺物などから4世紀後半から6世紀前半の築造となる(39)。

北部ではこれとは別に、穀塚・清水山・天鼓の森古墳と続く首長墓系譜が存在する。穀塚古墳は墳丘長40.5m、清水山・天鼓の森古墳は規模不明であるが前方後円墳である。平地に近い立地で6世紀代の築造である。

さて、前者の地域には、大枝山古墳群や福西古墳群が残る。西京区御陵大枝町の大枝山古墳群では川筋に沿った谷の丘陵腹に古墳が分布する。径10~25mの円墳25基で、両袖式か片袖式の横穴式石室をもつ(40)。その南の大枝、小畠川の左岸段丘上に広がる福西古墳群は30数基の円墳で、これも横穴式石室の主体部をもち、石棺も確認される。さらに南に円墳7基の東山古墳群がある。中に埴輪・葺石をともなうものもあり、5世紀から築造がはじまった可能性がある。

穀塚古墳などの築かれた地域の西側斜面には、西芳寺・松尾山・西芳寺川・松尾十三塚古墳群などが残る。松尾神ヶ谷町の西芳寺境内にある西芳寺古墳群は径約10mの円墳43基がある。盆地最大の密集度であり、一部には横穴式石室が開口する。また、西芳寺の庭園石組にも古墳の石材が利用される。松尾山古墳群は嵐山にあり、松尾山の尾根の山頂から谷筋にかけて広がる。径10~20mの40基以上の円墳で、両袖式、片袖式、無袖式の横穴式石室をもつ。中でも山頂に立地するF号墳は径23mと群中では大きい。そして、松尾にある西芳寺川の北岸に沿う西芳寺川古墳群は17基の円墳で構成される。径7~10mの墳丘で、無袖式、両袖式横穴式石室をもつ。西芳寺川古墳群の中でも一番川下に存在した神ヶ谷古墳は小石室をもっていた。松尾追上町にある松尾十三塚古墳は6基の円墳が残る。全体に西芳寺川流域の古墳は見通しのきかない場所に築造される(41)。

中でも西芳寺川古墳群は、西芳寺古墳群にかけての川筋に築造され、対岸にも古墳が存在するといわれていたが、北斜面に比べて、南斜面は傾斜が急であり、古墳を築造するにはあわない地形である。川の浸食により谷が深くなったとも考えられているが、斜面上から下まで古墳が築造されたとは考えにくい(42)。

松尾山古墳群は1つの古墳群として扱われるが、範囲が広く、立地から丘陵ごとにグループ分けできる(43)。

(6) 長岡グループ

向日丘陵に存在する古墳は、北の向日グループと南の

長岡グループに分かれる。盆地内でもいち早く古墳が築造されはじめた地域である。まず、前方後方墳である元稻荷古墳が築かれ、前方後円墳である五塚原古墳、寺戸大塚古墳、妙見山古墳と3・4世紀の大型墳が多くある。南には5世紀代に築造された恵解山古墳や鳥居前古墳なども存在する。

向日グループの山畠古墳群は長岡宮大極殿下層から古墳が検出されたものである。周溝のみが残る一辺8~20mの方墳群である。長岡グループは、平安京と同じく、長岡京が遷都造営された時に削平されたと思われていた。しかし、近年の発掘により、長岡京下層から多くの古墳がみつかった。5世紀の古墳数は少ないが、埴輪、葺石をもつものもある。山畠古墳群やほかの古墳も上部が削平されるが、当時の造墓活動をたどることができる重要な存在である。長岡京第46・62・63・73・109・7909次調査で古墳の一部が確認され、46次調査のものが5世紀中ごろの大極殿古墳、63次のものが山開古墳、7909次が中ノ段古墳と呼ばれる。ほか、一部、前方後円墳の可能性のある古墳1基を含めて、小規模な方墳7基が検出される(44)。早い時期の削平としては、山畠1~3号墳が長岡京造営時またはそれ以降ではなく、奈良時代に破壊される。丘陵上の古墳群の密集度と、嵯峨野グループのやや奥まった丘陵に立地が似ることから、同じように平地までその密度を保つつ、古墳が築造されたであろう(45)。平地中央まで築造された証拠となるのは開田古墳群といえよう。

長岡グループは、向日丘陵と西山丘陵の間に芝・井ノ内・大原古墳群といった多くが丘陵斜面に残る。

西京区大原野と長岡京市にまたがる芝古墳群は墳丘長32.6mの前方後円墳1基、一辺12mの方墳1基、径5~20mの円墳12基が点在する。井ノ内古墳群は長岡京域内にあり、前方後円墳1基と4基の方墳、さらに、土墳墓と木棺墓で、どちらも低丘陵上の立地である。長岡京河陽ヶ岡にある大原古墳群は20基以上の円墳群で、片袖式もしくは無袖式の横穴式石室をもつ。ほか、光明寺・走田古墳群など、多くの群集墳がこの地域には存在し、西に広がる丘陵斜面に広く点在する。

物集女車塚古墳の背後にも物集女車塚古墳群が存在し、100基近い古墳があったとも考えられている。

これら2つのグループのほぼ中央の低位段丘上に立地する開田古墳群は、前方後円墳の可能性のある10号墳を除き、一辺10m前後の方墳中心の古墳群である。5世紀後半から7世紀前半と長期間にわたって築造される(46)。

(7) 低地グループ（平安京を含む）

平安京内はほぼ中央部で表層地質は変わり、左京域は礫質砂層、右京域は粘土質の砂層となる。右京域の湿地の様子は、平安時代に慶滋保胤が記した『池亭記』に右京は左京に比べて、早くから荒廃がはじまつたとする。中世の『拾芥抄』左右京図では「右京には小泉多し」と書かれる。そのため、右京域はあまり邸宅や住居がつくられずにいた。そのため平安京内であるにも関わらず、一部に削平を逃れて古墳が残る可能性がある（47）。

しかしながら、古墳が現在検出されているのは下京区梅小路頭町の梅小路古墳のみである（48）。平安京の南側の地域で古墳時代の堅穴住居などの遺構が検出され、土師器や須恵器も出土する。

平安京の右京域で検出された梅小路古墳は、1992（平成4）年度に埴輪片が採集されたことがもとで調査された。形状は不明であるが、地表面下の浅い位置から幅3mの古墳の周濠の一部が検出され、円筒埴輪片も出土する（49）。

梅小路古墳同様、トウゴロ山古墳が右京区太秦野元町の平安京域内に存在したことが伝わる。円墳2基があったという。

1983（昭和58）年度に行われた平安京右京二条三坊の試掘調査で、古墳時代の溝が検出された。近辺住民によれば、その調査区には以前、土盛りがあったという。このことから、古墳の周溝であった可能性が高いとされるが、直線的な溝のため、実際に古墳にともなうもののかは疑われる（50）。

平安京内で行われる発掘調査では、京西側南北方向に認められる粘土質の湿地の堆積の中に、弥生時代の水田がともなっている場合が多い。古墳時代の遺構や古墳が残っている地域は、湿地周囲にあてはまる例が多い。

平安京の中心部辺りには鳥丸綾小路遺跡が広がる。弥生～古墳時代まで継続する堅穴住居などの集落跡が検出され、同区域からは弥生時代の方形周溝墓も検出される。

平安京の南方の鳥羽グループは、伏見区竹田の鳥羽離宮下層で古墳が7基検出される、鳥羽古墳群と一括して呼ばれる。鳥羽離宮の遺跡内で1984（昭和59）年度の第102次調査時に幅3m前後の溝をもつ一辺13m前後の方墳を1基がある。ほかに2基がある。周溝内より6世紀代の須恵器が出土する（51）。また、第106次調査では、径20mほどの円墳または前方後円墳の可能性のあるものが1基検出された。基底部とその周囲の周溝が幅4m残っていた。全体に、方墳を中心に構成する古墳群であり、

円筒・朝顔形円筒埴輪、家形、盾形、衣笠、動物などの形象埴輪、巫女の人物埴輪などが出土する。周囲では木棺墓群、土器棺墓群も検出される。この古墳群は5～6世紀初頭にかけて造営される。あわせて、併行時期の堅穴住居群も検出され（52）、古墳群は集落居住域に隣接した墓域として理解される。全体に地形は緩やかに東へ上がっていかがほぼ平坦で、また、その古墳群から150mほど東の白河天皇陵隣の調査でも埴輪がまとまって出土し、墓域がさらに広がる。

下鳥羽遺跡では6世紀の埴輪片も出土する。しかし、出土した遺構が流路ということから、その地点そのものに古墳があったとは判断しにくい。しかし、山科の平地に存在する中臣十三塚古墳群などと同様、その近辺に古墳が存在した可能性が高い。鳥羽離宮公園内に今でもある秋の山の隆起も古墳と考えられているが、詳細は不明である。公園は整備され、頂上に石碑がある。

4. おわりに

以上、京都盆地の古墳の造墓活動を中心に、そのあり方について述べてきた。その結果、盆地の古墳は、ほぼすべての丘陵上や川沿いに存在することがわかった。すなわち、かなり大きな規模の古墳群が各地域でまんべんなく築かれていたことになる。

山科の折上神社や花山神社、稻荷山古墳の一ノ峯などはまさに古墳の上にヤシロを建てている。醍醐古墳群の1号墳である耳塚は耳の病に靈験があるとされ、マウンドの上に祠が築かれる。嵯峨の稻荷古墳も径20mの円墳だが、墳頂部に稻荷の社がある。鳥羽離宮付近の天皇陵も古墳のマウンドを利用してその上に塔を建てた。

東山の將軍塚古墳3号墳には伝説的な話が残されている。桓武天皇が平安京に遷都したことを機に、王城鎮護のため、長さ8尺の土偶を作り、鉄の甲冑を着せ、弓矢を持たせて埋めた。天下に異変があれば、必ず鳴動して予兆を示すという。麓には、鶴塚古墳の説話もある。

また、広沢古墳の石室は、早くから開口していたと思われ、その石室内部で、中世以降に祭祀が行われていた。石室内部からはそれにともなう遺物も多くある。近くに存在する天塚古墳も石室内に祠がある。マウンドの上に石碑・五輪塔を建てる例も少なくない。宮道列子の墓とされる宮道古墳は6世紀後半に築造されたとみられるが、列子が没したのは907（延喜7）年であり、残ったマウンドを利用して墓地としたのだろう。六波羅密寺にかつて存在した古墳の石棺のふたを石塔の台石に再利用例や

石材を西芳寺の庭園石組の利用例もある。

平安京遷都前、792（延暦11）年には、山城国紀伊郡深草の西斜面は京城に近いという理由から、人間の「葬埋」をしてはならないという禁令が出された。また、797（延暦16）年には山城国愛宕・葛野両郡の農民に、自宅に死者を葬ることを禁止している。さらに時代が下りると、9世紀前半には一般人は死体を放棄するようになる。賀茂川の河川敷や、主に東山近辺、阿弥陀ヶ峰、船岡山、鳥辺野、西院、竹田などは葬送地になった。そうした中でも、京都盆地、中でも東山は特に古墳群が多く存在する地域であり、時代が下ってもその地域に古墳＝墓が存在していたと認識されていたに違いない（53）。

注

- (注1) 地形、古道、地質は京都市『京都の歴史』1 平安の新京を参考にした。
- (注2) 発掘されていない、また、現在では残っておらず詳細が不明な古墳の当時の様子は京都橘大学考古学同好会2008『山科分布調査概報 第1次～第5次 復刻版』を参考にした。

参考文献

- (1) 京都市1970『京都の歴史』1 平安の新京
- (2) 若林邦彦ほか2006『岩倉忠在遺跡－同志社小学校建設に伴う発掘調査報告書』同志社大学歴史資料館、第16回京都府埋蔵文化財研究集会2009『京都府の群集墳』
- (3) (1)と同じ。
- (4) 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所1993『京都市埋蔵文化財調査概報 昭和63年度』
- (5) 京都市文化観光局・財団法人 京都市埋蔵文化財研究所1987『一乗寺向畠遺跡発掘調査概報 昭和61年度』、財団法人 京都市埋蔵文化財研究所1989『京都市埋蔵文化財調査概要 昭和61年度』
- (6) 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所1995『京都市埋蔵文化財調査概報 平成3年度』
- (7) 財団法人 京都大学埋蔵文化財研究センター1984『京都大学構内遺跡発掘調査研究年報 昭和57年度』ほか
- (8) 京都大学埋蔵文化財研究センター1999『京都大学構内遺跡調査研究年報 1995年度』
- (9) 京都大学埋蔵文化財研究センター1997『京都大学構内遺跡調査研究年報 1993年度』
京都大学埋蔵文化財研究センター2003『京都大学構内遺跡調査研究年報 1999年度』
- (10) 京都大学埋蔵文化財研究センター2005『京都大学構内遺跡調査研究年報 2000年度』
- (11) 京都府1940「京都市将軍塚古墳附近発見古墳」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第20冊、京都府教育委員会1989『京都府遺跡地図』第4分冊ほか
- (12) 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所1993『京都市遺跡試掘調査概報 平成4年度』ほか
- (13) 森浩一1970「古墳時代後期以降の埋葬地と葬地—古墳終末への邇及的試論として—」『論集 終末期古墳』 墓書房
- (14) 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所1983『京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）昭和56年度』
- (15) 宮内庁書陵部2003「鳥戸野陵の墳丘外形調査」『書陵部紀要』第54号
- (16) (15)と同じ。
- (17) 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所1985『遺跡試掘立会調査概要 昭和59年度』
- (18) 京都府教育委員会1989『京都府遺跡地図』第4分冊ほか
- (19) 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所1993『京都市埋蔵文化財調査概要 昭和63年度』
- (20) (19)と同じ。
- (21) 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所1989『京都市埋蔵文化財調査概要 昭和61年度』
- (22) 京都府埋蔵文化財研究会2000『京都の首長墳』
- (23) (13)と同じ。
- (24) (13)と同じ。
- (25) 高橋美久二1981「東山区中臣十三塚群集墳採集の須恵器」『京都考古』第1～第25号合冊 京都考古刊行会、京都橘大学『京都橘大学 文化財調査報告2008』
- (26) 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所2002『京都市埋蔵文化財調査概要 平成11年度』
- (27) 京都市文化観光局・財団法人 京都市埋蔵文化財研究所1987『醍醐古墳群発掘調査概報 昭和60年度』、京都市文化観光局・財団法人 京都市埋蔵文化財研究所1987『醍醐1号墳発掘調査概報 昭和61年度』
- (28) 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所1981『旭山古墳群発掘調査報告』
- (29) 有光教一・坪井清足1959「大宅庵寺の発掘調査概報」『名神高速道路路線地域内埋蔵文化財調査報告』
- (30) (1)と同じ。
- (31) 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所1994『京都市埋蔵文化財調査概要 平成2年度』
- (32) 宇野隆志2009「北山城における後期古墳の分布と群構成」第16回京都府埋蔵文化財研究集会『京都府の群集墳』ほか、京都文化観光局1989『京都市内試掘立会調査概報 昭和63年度』
- (33) 京都府教育委員会1976「大覺寺古墳群発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』
- (34) 財団法人 京都府埋蔵文化財調査センター1999「広沢古墳」『京都府埋蔵文化財情報』74号
- (35) 京都文化観光局1983『御堂ヶ池1号墳発掘調査概報 昭和57年度』、小川裕見子 2009「終末期群集墳内における八角墳と大型八角墳の関係」『古代学研究』184号
- (36) (15)と同じ。
- (37) 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所1996『京都市埋蔵文化財調査概要 平成6年度』
- (38) 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所1997「京都嵯峨野の遺跡－広域立会調査による遺跡報告－」『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第14冊
- (39) 京都文化観光局1991『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成2年度』

- (40) 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所1989「大枝山古墳群」『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』 第8冊
- (41) 京都府教育委員会1989『京都府遺跡地図』第4分冊
- (42) 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所1999『京都市文化財だより』第31号
- (43) 丸川義弘1998「松尾山の群集墳－松尾十三塚古墳群の紹介も含めて－」『京都市埋蔵文化財研究所 研究紀要』第4号 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
- (44) 向日市教育委員会1983『向日市埋蔵文化財調査報告書』第8集
- (45) 奥村清一郎1984「長岡京の造営によって壊された古墳」『京都考古』第32号 京都考古刊行会
- (46) 財団法人 向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会1996「長岡宮跡第304次～大極殿院、山畠古墳群～発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書－第43集－（1996）』、（1）と同じ。
- (47) (1)と同じ。
- (48) 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所1993『京都市遺跡試掘調査概報 平成4年度』
- (49) (48)と同じ。
- (50) 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所1994『京都市埋蔵文化財調査概要 平成元年度』
- (51) 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所1987『京都市埋蔵文化財調査概要 昭和59年度』
- (52) (45)と同じ。
- (53) (1)と同じ。

表1 京都盆地古墳一覧表

	古墳名	現地名	立地・規模	墳形	石室構造	主体部	出土遺物	現状
1	本山1号墳	北区上賀茂本山	丘陵	円墳	T字形両袖式 横穴式石室			
	本山2~42号墳	北区上賀茂本山	丘陵	円墳				
2	八幡1号墳	左京区岩倉幡枝町	丘陵腹	円墳	横穴式石室			半壊
	八幡2号墳	左京区岩倉幡枝町	丘陵腹	円墳	横穴式石室		須恵器杯	半壊
	八幡3号墳	左京区岩倉幡枝町	丘陵腹	円墳	横穴式石室			半壊
3	ケン山1~5号墳	北区上賀茂ケシ山	丘陵頂	円墳				
4	幡枝1号墳	右京区岩倉幡枝町	丘陵帽	円墳	粘土櫛		仿製四獸鏡・劍・管玉	全壊
	幡枝2号墳	右京区岩倉幡枝町	丘陵端 径12m 高2.4m 莢石	円墳	箱式木棺2		劍・刀・鎌・挂甲・鎌・ 須恵器杯・高杯・壺・ 甕・甕	全壊 1988年発掘
	幡枝3~17号墳	右京区岩倉幡枝町	丘陵腹	円墳				完存
5	西山1号墳	左京区松ヶ崎西山	丘陵稜 径10m 高1m					完存
	西山2号墳	左京区松ヶ崎西山	丘陵稜 径12m 高1.5m					完存
	西山3号墳	左京区松ヶ崎西山	丘陵稜 径10m 高1m					完存
	西山4号墳	左京区松ヶ崎西山	丘陵稜 径13m 高1.5m					完存
	西山5号墳	左京区松ヶ崎西山	丘陵稜 径15m 高2m					完存
	西山6号墳	左京区松ヶ崎西山	丘陵稜					完存
	西山7号墳	左京区松ヶ崎西山	丘陵稜					完存
6	林山古墳群	左京区松ヶ崎	須恵器散布地 古墳が存在する可能性有					
7	半木町塚跡(王塚)	左京区下鴨	平地	円墳?				
8	向畠古墳	左京区一乗寺向畠町	平地 径20m	円墳	横穴式石室		金環・鉄器・土師器甕・ 須恵器杯・高杯・甕・短 頸壺・直口壺・長頸壺	全壊 1986年発掘
9	池田町1号墳	左京区北白川上池田町	平地	円墳	横穴式石室			全壊
10	池田町2号墳	左京区北白川上池田町	平地	円墳	横穴式石室			全壊
	追分町1号墳	左京区北白川追分町	平地	円墳	横穴式石室			全壊
	追分町2号墳	左京区北白川追分町	平地	円墳	横穴式石室		須恵器	全壊
11	京都大学教養学部構内 遺跡	左京区吉田二本松町	平地	方墳6基 円墳1基				
12	岡崎遺跡	左京区岡崎最勝寺町	平地	円墳2基				
13	将军塚1号墳	東山区栗田口	山頂	円墳		箱形石棺	人骨	半壊
	将军塚2号墳	東山区栗田口	山頂	円墳		竪穴式石室		全壊
	将军塚3号墳	東山区栗田口	山頂	円墳 径40m				完存
	将军塚古墳群	東山区栗田口	山頂	円墳 多数				
14	八坂方墳	東山区下河原町	丘陵端 高台寺境内 一辺20m 高3m 2段築成				円筒埴輪列	完存
16	鳥戸野1号墳	東山区今熊野泉山町	丘陵稜 径16m	円墳				完存 宮内庁管轄
	鳥戸野2号墳	東山区今熊野泉山町	丘陵稜 径12m	円墳				完存 宮内庁管轄
	鳥戸野3号墳	東山区今熊野泉山町	丘陵稜 径22m	円墳				完存 宮内庁管轄
	鳥戸野4号墳	東山区今熊野泉山町	丘陵稜 径15m	円墳				完存 宮内庁管轄
	鳥戸野5号墳	東山区今熊野泉山町	丘陵稜 径19m	円墳				完存 宮内庁管轄
	鳥戸野6号墳	東山区今熊野泉山町	丘陵稜 径20m	円墳				完存 宮内庁管轄
	鳥戸野7号墳	東山区今熊野泉山町	丘陵稜 径19m	円墳				完存 宮内庁管轄
	鳥戸野8号墳	東山区今熊野泉山町	丘陵稜 径14m	円墳				完存 宮内庁管轄
	鳥戸野9号墳	東山区今熊野泉山町	丘陵稜 径9m	円墳				完存 宮内庁管轄
	鳥戸野10号墳	東山区今熊野泉山町	丘陵稜 径8m	円墳				完存 宮内庁管轄
	鳥戸野11号墳	東山区今熊野泉山町	丘陵稜 径9m	円墳				完存 宮内庁管轄
	鳥戸野12号墳	東山区今熊野泉山町	丘陵稜 径22m	円墳				完存 宮内庁管轄
	鳥戸野13号墳	東山区今熊野泉山町	丘陵稜 径11m	円墳				完存 宮内庁管轄
	鳥戸野14号墳	東山区今熊野泉山町	丘陵稜 径12m	円墳				完存 宮内庁管轄
	鳥戸野15号墳	東山区今熊野泉山町	丘陵稜 径16m	円墳				完存 宮内庁管轄
	鳥戸野16号墳	東山区今熊野泉山町	丘陵稜 径11m	円墳				完存 宮内庁管轄
17	本多山1号墳	東山区今熊野泉山町	丘陵端	円墳	横穴式石室 亀甲形陶棺		須恵器杯・壺	全壊
	本多山2号墳	東山区今熊野泉山町	丘陵端	円墳				全壊
18	本多山泉山支群1号墳	東山区今熊野泉山町飛地	丘陵腹	円墳				全壊
	本多山泉山支群2号墳	東山区今熊野泉山町飛地	丘陵腹 径9m 高1.5m	円墳	横穴式石室	長1m×幅1.1m	金環・釘・須恵器杯・ 蓋・高杯・壺・甕	全壊
	本多山泉山支群3号墳	東山区今熊野泉山町飛地		円墳			須恵器壺	全壊 1983年発掘
19	塚本古墳	東山区本町	丘陵端 径20m 高3m	円墳	横穴式石室		直刀	半壊
20	願成古墳 (稻荷山古墳群)	伏見区深草願成町	丘陵腹	円墳	横穴式石室		須恵器壺	全壊
	稻荷山1号墳 (一ノ峰)	伏見区稻荷山	山頂 径50m	円墳				半壊
	稻荷山2号墳 (二ノ峰)	伏見区稻荷山	山頂 全長70m	前方後円墳			仿製方格規矩鏡2	半壊
	稻荷山3号墳 (三ノ峰)	伏見区稻荷山	山頂 径50m	円墳	堅穴式石室?		舶載二神二獸鏡、捩文鏡	半壊
	稻荷山4号墳	伏見区稻荷山	山頂	円墳				半壊

20	稻荷山5号墳 稻荷山1~17号墳 (西麓)	伏見区稻荷山	山頂	円墳				半壊
	伏見区稻荷山	丘陵稜	円墳	堅穴式石室?				半壊
21	番神山古墳	伏見区深草極楽寺山町	平地 周濠	前方後円墳				全壊
22	砥粉山1号墳 砥粉山2号墳 砥粉山3号墳	伏見区深草砥粉山町	丘陵稜					全壊
	伏見区深草砥粉山町	丘陵稜						全壊
	伏見区深草砥粉山町	丘陵稜						全壊
23	仁明陵北古墳	伏見区深草瓦町	丘陵端 墳丘形不明	古墳			六胞文鏡・碧玉腕飾類・銅鏡・円筒埴輪	全壊
24	けんか山古墳	伏見区深草東瓦町	丘陵頂 墳丘形不明	古墳			車輪石	全壊
25	谷口古墳	伏見区深草鞍ヶ谷町	丘陵端 径24m 高3m	円墳	横穴式石室?			完存
26	山伏塚古墳	伏見区深草鞍ヶ谷町	丘陵端	円墳	横穴式石室		須恵器杯・台付壺	半壊
27	永井久太郎古墳 (桃山古墳群)	伏見区桃山町永井久太郎他	丘陵腹 他数基?	円墳			須恵器・円筒埴輪	全壊
28	黄金塚1号墳	伏見区桃山町遠山	丘陵稜 全長100m	前方後円墳?				全壊
	黄金塚2号墳	伏見区桃山町遠山	丘陵稜 全長120m 後円部径70m 同高12m	前方後円墳?				半壊 1981年発掘 宮内庁管轄
30	大岩古墳	山科区御陵安祥寺町	丘陵稜	円墳?	横穴式石室?	石材露出 四凹状土坑 に岩が存在する		消滅
31	旭山C1号墳 旭山C2号墳 旭山C3号墳 旭山C4号墳 旭山C5号墳 旭山D1号墳 旭山D2号墳 旭山D3号墳 旭山D4号墳 旭山E1号墳 旭山E2号墳 旭山E3号墳 旭山E4号墳 旭山E5号墳 旭山E6号墳 旭山E7号墳 旭山E8号墳 旭山E9号墳 旭山E10号墳 梅谷古墳	山科区上花山旭山町	山腹 一辺9.5m 二字形周溝	方墳	両袖式横穴式石室			消滅
	山科区上花山旭山町	山腹 一辺6m	方墳					消滅
	山科区上花山旭山町	山腹 一辺6.2m 高1.2m フ字形周溝	方墳	無袖式横穴式石室	長3.4×幅0.8m	須恵器甌・平瓶	消滅 1977・78年発掘	
	山科区上花山旭山町	山腹 一辺6.2m 高0.9m フ字形周溝	方墳	横穴式石室		須恵器蓋・甌	消滅 1977・78年発掘	
	山科区上花山旭山町	山腹 一辺5.3m 高1.4m フ字形周溝	方墳	無袖式横穴式石室	長3.4×幅0.8m	須恵器杯・提瓶・甌・土師器	消滅 1977・78年発掘	
	山科区上花山旭山町	山腹 一辺4.8m 高1.3m フ字形周溝	方墳				消滅 1977・78年発掘 平安後期の土壙墓有	
	山科区上花山旭山町	山腹	方墳?	無袖式小石室	長1.6m×幅0.6m			消滅 1977・78年発掘
	山科区上花山旭山町	山腹 一辺5.8m 高1.3m フ字形周溝	方墳	無袖式横穴式石室	長2.4m×幅0.7m	長頸壺		
	山科区上花山旭山町	山腹 一辺7m 高1.3m フ字形周溝	方墳	無袖式横穴式石室	長3.5×幅0.9m	須恵器杯・高杯・台付長頸壺・土師器甌	消滅 1977・78年発掘	
	山科区上花山旭山町	山腹 一辺6.5m 高1.5m フ字形周溝	方墳	横穴式石室	幅0.9m	釘・須恵器杯・土師器甌	消滅 1977・78年発掘	
	山科区上花山旭山町	山腹 一辺9.8m 高1.7m フ字形周溝	方墳	両袖式横穴式石室	全長5.9m 玄室長2.4m×幅1.2m 美道幅0.9m	須恵器杯・高杯・壺・土師器甌	消滅 1977・78年発掘	
	山科区上花山旭山町	山腹 墳丘削平	方墳	無袖式小石室	長0.9m×幅0.4m	土師器甌	消滅 1977・78年発掘	
	山科区上花山旭山町	山腹 一辺6.3m 高0.7m フ字形周溝	方墳	無袖横穴式石室	幅0.7m	須恵器杯・高杯	消滅 1977・78年発掘	
	山科区上花山旭山町	山腹 一辺7.8m 高0.8m フ字形周溝	方墳	横穴式石室	幅0.8m	釘・須恵器杯・長頸壺	消滅 1977・78年発掘	
	山科区上花山旭山町	山腹 墳丘削平	方墳	小石室	長1.5m×幅0.6m			
	山科区上花山旭山町	山腹 一辺5.9m 高1.1m フ字形周溝	方墳	無袖式横穴式石室	長3m×幅0.9m	金環・刀子	消滅 1977・78年発掘	
	山科区上花山旭山町	山腹 墳丘削平	方墳	小石室	長1.7m×幅0.4m			消滅 1977・78年発掘
	山科区上花山旭山町	山腹 一辺6.4m 高1.6m フ字形周溝	方墳	無袖式横穴式石室	長3.9m×幅0.9m	釘・須恵器杯・高杯・台付長頸壺・土師器甌	消滅 1977・78年発掘	
	山科区上花山旭山町	山腹 一辺6.5m 高1.6m フ字形周溝	方墳	無袖式横穴式石室	長3.7m×幅0.8m	刀子・須恵器杯・長頸壺	消滅 1977・78年発掘	
	東山区梅谷山地町	山頂	円墳	横穴式石室		須恵器短頸壺・高杯	全壊 旭山A支群にあたる	
32	花山神社古墳	山科区川田山欠ノ上	平地	円墳				消滅
33	宮道古墳	山科区勤修寺西栗柄野町	台地 径26m 高3.5m	円墳		須恵器	完存	
34	稻荷塚古墳	山科区西野山中臣町折上 神社境内	台地 径18m 高3m	円墳		須恵器・埴輪	完存	
35	中臣十三塚1号墳 中臣十三塚2号墳 中臣十三塚3号墳 中臣十三塚4号墳 中臣十三塚5号墳	山科区西野山中臣町他	台地	円墳				全壊
	山科区西野山中臣町他	台地	円墳					全壊
	山科区西野山中臣町他	台地 径8m 高1.5m	円墳	木棺		須恵器蓋		半壊
	山科区西野山中臣町他	台地 径8m 周溝	円墳	横穴式石室	長2.5m	刀子・釘・須恵器杯・長頸壺		
	山科区西野山中臣町他	台地 径14m	円墳	両袖式横穴式石室	全長5.1m 玄室長2.7m×幅1.4m 美道幅0.9m	須恵器杯・高杯・短頸壺・台付長頸壺	全壊 1984年発掘	
36	大宅古墳	山科区大宅鳥居脇町	平地 径13m	円墳	両袖式横穴式石室	玄室長3.3m×幅1.4m 美道幅0.9m	金環・須恵器杯・平瓶・人骨	消滅 1958年発掘 大宅廐寺境内
37	向山古墳	山科区大宅向山	丘陵端 径10m 高2m	円墳	横穴式石室			半壊

38	醍醐1号墳(耳塚)	山科区醍醐内ヶ井戸	丘陵稜 径25m 高3m	円墳	両袖式横穴式石室・無袖式横穴式石室	玄室長3.7m×幅1.7m 長3.5m×1.1m	革金具・円筒大刀柄頭・鍔・須恵器杯・高杯・壺・壺・器台・装飾付壺・特殊扁壺	半壊 1980・86年発掘
	醍醐2号墳	山科区醍醐内ヶ井戸	丘陵稜	方墳?	無袖式横穴式石室			全壊 1980年発掘
	醍醐3号墳	山科区醍醐内ヶ井戸	丘陵腹 一辺8.7m	方墳	小豎穴式石室	長1.7m×幅0.4m		全壊 1980・85年発掘
	醍醐4号墳	山科区醍醐内ヶ井戸	丘陵腹 痕跡鑿	方墳?			金環・須恵器高杯	全壊 1985年発掘
	醍醐5号墳	山科区醍醐内ヶ井戸	丘陵腹	方墳?				全壊
	醍醐6号墳	山科区醍醐内ヶ井戸	丘陵腹	方墳?				全壊
	醍醐7号墳	山科区醍醐内ヶ井戸	丘陵腹	方墳?				全壊
	醍醐8号墳	山科区醍醐内ヶ井戸	丘陵腹 一辺6m	方墳	無袖式横穴式石室 床面石敷	残長3.5m×幅0.9m	鍔・須恵器杯・長頸壺・無頸壺	全壊 1985年発掘
	醍醐9号墳	山科区醍醐内ヶ井戸	丘陵腹 一辺7m	方墳	無袖式横穴式石室 棺台石	残長4.9m×幅0.9m	須恵器杯・短頸壺・平瓶	全壊 1980・85年発掘
	醍醐10号墳	山科区醍醐内ヶ井戸	丘陵腹 一辺10m	方墳	片袖式横穴式石室	玄室長2.5m×幅1.3m 羨道幅1.1m	金環・銀環・不明鉄器・釘・須恵器杯・高杯・提瓶・平瓶	全壊 1985年発掘
	醍醐11号墳	山科区醍醐内ヶ井戸	丘陵腹 一辺12.5m	方墳	両袖式横穴式石室	玄室長2.5m×幅1.5m 羨道幅1.3m	銀環・鍔先・釘・須恵器杯・高杯・長頸壺・器台	全壊 1985年発掘
	醍醐12号墳	山科区醍醐内ヶ井戸	丘陵腹 一辺10m	方墳	無袖式横穴式石室 棺台石	残長2.7m×幅1.3m	銀環・須恵器杯・高杯・長頸壺・提瓶	全壊 1985年発掘
	醍醐13号墳	山科区醍醐内ヶ井戸	丘陵腹 一辺4.6m	方墳	無袖式横穴式石室	長3.8m×幅1m	須恵器杯・長頸壺	全壊 1985年発掘
	醍醐14号墳	山科区醍醐内ヶ井戸	丘陵腹 一辺11m 高1.5m	方墳	無袖式横穴式石室	残長3.9m×幅1.2m	刀・鍔・刀子・須恵器高杯・長頸壺・提瓶	全壊 1984年発掘
	醍醐15号墳	山科区醍醐内ヶ井戸	丘陵腹	方墳?	無袖式横穴式石室 床面炭層	長1.1m×幅0.5m		全壊 1984・85年発掘
	醍醐16号墳	山科区醍醐内ヶ井戸	丘陵腹	方墳?	小豎穴式石室	残長2.1m×幅0.7m		全壊 1984・85年発掘
	醍醐17号墳	山科区醍醐内ヶ井戸	丘陵腹 一辺10m	方墳	無袖式横穴式石室	残長3.5m×幅1.4m	金環・銀環・鍔・刀子・鎌・鉢・須恵器杯	全壊 1984・85年発掘
	醍醐18号墳	山科区醍醐内ヶ井戸	丘陵腹	方墳?	小豎穴式石室 敷石	長0.9m×幅0.5m		全壊 1984・85年発掘
	醍醐19号墳	山科区醍醐内ヶ井戸	丘陵腹	方墳?	小石室	長0.6m×幅0.5m	銀環	全壊 1984・85年発掘
	醍醐20号墳	山科区醍醐内ヶ井戸	丘陵腹 一辺3.5m	方墳	無袖式横穴式石室	長2.4m×幅0.7m	須恵器杯蓋	全壊 1984・85年発掘
40	原谷古墳群	北区衣笠赤坂	丘陵頂 9基 径約7m 1基は径20m	円墳				
41	宇多野谷古墳							
42	衣笠山古墳群	北区衣笠衣笠山	丘陵稜 古墳6基	円墳				
43	朱山1号墳	右京区竜安寺朱山	丘陵腹	円墳	横穴式石室			完存
	朱山2号墳	右京区竜安寺朱山	丘陵腹	円墳	横穴式石室			完存
44	住吉山1号墳	右京区御室住吉山町	丘陵稜 径17m 高1.8m	円墳	横穴式石室	石材露出		完存
	住吉山2号墳	右京区御室住吉山町	丘陵稜	円墳				完存
	住吉山3号墳	右京区御室住吉山町	丘陵稜	円墳				完存
	住吉山4号墳	右京区御室住吉山町	丘陵稜	円墳				完存
45	衣笠天神森町古墳	北区衣笠天神森町	平地	円墳	横穴式石室		須恵器	
46	朝原山1号墳	右京区北嵯峨朝原山町	丘陵腹 径12m 高3m	円墳				完存
	朝原山2号墳	右京区北嵯峨朝原山町	丘陵腹 径15m 高1m	円墳				完存
	朝原山3号墳	右京区北嵯峨朝原山町	丘陵腹 径11m 高1.5m	円墳				完存
	朝原山4号墳	右京区北嵯峨朝原山町	丘陵腹 径12m 高3m	円墳				半壊
	朝原山5号墳	右京区北嵯峨朝原山町	丘陵稜 径20m 高3m	円墳	横穴式石室			完存
	朝原山6号墳	右京区北嵯峨朝原山町	丘陵稜 径13m 高3m	円墳	横穴式石室			完存
	朝原山7号墳	右京区北嵯峨朝原山町	丘陵腹 径11m 高3m	円墳				半壊 宮内庁管轄
	朝原山8号墳	右京区北嵯峨朝原山町	丘陵腹 径9m 高2m	円墳				半壊 宮内庁管轄
	朝原山9号墳	右京区北嵯峨朝原山町	丘陵腹 径11m 高2.3m	円墳				半壊 宮内庁管轄
	朝原山10号墳	右京区北嵯峨朝原山町	丘陵腹 径16m 高2m	円墳				半壊 宮内庁管轄
	朝原山11号墳	右京区北嵯峨朝原山町	丘陵腹 径16m 高2m	円墳				完存 宮内庁管轄
47	長刀坂1号墳	右京区北嵯峨長刀坂町	丘陵腹 径13m 高3.5m	円墳	横穴式石室			完存 宮内庁管轄
	長刀坂2号墳	右京区北嵯峨長刀坂町	丘陵腹 径15m	円墳	横穴式石室			完存 宮内庁管轄
	長刀坂3号墳	右京区北嵯峨長刀坂町	丘陵腹 径12m 高2m	円墳	横穴式石室			完存 宮内庁管轄
	長刀坂4号墳	右京区北嵯峨長刀坂町	丘陵腹	円墳	横穴式石室			完存 宮内庁管轄 1977年発掘
	長刀坂5号墳	右京区北嵯峨長刀坂町	丘陵腹 径9m 高1.5m	円墳	横穴式石室	幅0.8m		完存 宮内庁管轄 1977年発掘
	長刀坂6号墳	右京区北嵯峨長刀坂町	丘陵稜 径14m 高3m	円墳	横穴式石室			完存 宮内庁管轄
	長刀坂7号墳	右京区北嵯峨長刀坂町	丘陵稜 径12m 高1m	円墳	横穴式石室			完存
	長刀坂8号墳	右京区北嵯峨長刀坂町	丘陵稜 径15.4m 高1.5m	円墳	横穴式石室			完存
	長刀坂9号墳	右京区北嵯峨長刀坂町	丘陵腹 径10m 高2m	円墳	横穴式石室			完存
	長刀坂10号墳	右京区北嵯峨長刀坂町	丘陵腹 径11m 高2.5m	円墳	横穴式石室			完存
	長刀坂11号墳	右京区北嵯峨長刀坂町	丘陵腹 径16m 高3m	円墳	横穴式石室			完存
	長刀坂12号墳	右京区北嵯峨長刀坂町	丘陵腹 径10m 高2m	円墳	横穴式石室			完存
	長刀坂13号墳	右京区北嵯峨長刀坂町	丘陵腹 径17m 高2.5m	円墳	横穴式石室			完存

47	長刀坂14号墳	右京区北嵯峨長刀坂町	丘陵腹 径11m 高2m	円墳	横穴式石室			完存
	長刀坂15号墳	右京区北嵯峨長刀坂町	丘陵腹 径18m 高2m	円墳	横穴式石室			完存
	長刀坂16号墳	右京区北嵯峨長刀坂町	丘陵腹 径9m 高1.5m	円墳	横穴式石室			完存
	長刀坂17号墳	右京区北嵯峨長刀坂町	丘陵腹 径14m 高3m	円墳	横穴式石室			完存
	長刀坂18号墳	右京区北嵯峨長刀坂町	丘陵腹 径12m 高2m	円墳	横穴式石室			完存
	長刀坂19号墳	右京区北嵯峨長刀坂町	丘陵腹 径11m 高1.5m	円墳	横穴式石室			完存
	長刀坂20号墳	右京区北嵯峨長刀坂町	丘陵腹	円墳	横穴式石室			完存
	長刀坂21号墳	右京区北嵯峨長刀坂町	丘陵腹 径18m 高3m	円墳	横穴式石室			完存 宮内庁管轄
	長刀坂22号墳	右京区北嵯峨長刀坂町	丘陵腹 径19m 高2.5m	円墳	横穴式石室			完存
	長刀坂23号墳	右京区北嵯峨長刀坂町	丘陵腹 径9.5m 高1.5m	円墳	横穴式石室			完存
	長刀坂24号墳	右京区北嵯峨長刀坂町	丘陵腹 径8m 高1.5m	円墳	横穴式石室			完存
	長刀坂25号墳	右京区北嵯峨長刀坂町	丘陵腹 径7.5m 高1m	円墳	横穴式石室			完存
	長刀坂26号墳	右京区北嵯峨長刀坂町	丘陵腹 径8m 高1.5m	円墳	横穴式石室			完存
	長刀坂27号墳	右京区北嵯峨長刀坂町	丘陵腹 径7m 高0.5m	円墳	横穴式石室			完存
	長刀坂28号墳	右京区北嵯峨長刀坂町	丘陵腹 径8m 高1.5m	円墳	横穴式石室			完存
	長刀坂29号墳	右京区北嵯峨長刀坂町	丘陵稜 径12m 高1.5m	円墳	横穴式石室			完存
	長刀坂30号墳	右京区北嵯峨長刀坂町	丘陵稜 径11m 高2m	円墳	横穴式石室			完存
	長刀坂31号墳	右京区北嵯峨長刀坂町	丘陵腹 径16m 高1.8m	円墳	横穴式石室			完存
48	遍照寺山1号墳	右京区北嵯峨長刀坂町	丘陵稜 径18.5m 高2m	円墳				半壊
	遍照寺山2号墳	右京区北嵯峨長刀坂町	丘陵稜 径27m 高2.5m	円墳				完存
49	御堂ヶ池1号墳	右京区梅ヶ畑	丘陵腹 径30m 高5m	円墳	両袖式横穴式石室	玄室長4m×幅2.8m ×高3.7m 美道幅 1.6m 組合式家形石棺	鐵・刀子・釘・馬具・土 師器・須恵器杯・高杯・ 短頸壺・台付壺	消滅
	御堂ヶ池2~5号墳	右京区梅ヶ畑	丘陵腹	円墳				消滅
	御堂ヶ池7~10号墳	右京区梅ヶ畑	丘陵腹	円墳				消滅
	御堂ヶ池11号墳	右京区梅ヶ畑	丘陵腹 径15m	円墳	両袖式横穴式石室		鐵器・釘・須恵器杯・ 盤・甕・土師器杯・人骨	消滅
	御堂ヶ池12号墳	右京区梅ヶ畑	丘陵腹 径10m 高1.8m	円墳	無袖式横穴式石室	長4.7m×幅1.1m	刀子・須恵器杯・台付長 頸壺	消滅
	御堂ヶ池13号墳	右京区梅ヶ畑	丘陵腹 径14m 高3.5m	円墳	両袖式横穴式石室	全長6.7m 玄室長 3.2m×幅1.6m 美 道幅1m	刀子・釘・須恵器瓶	消滅
	御堂ヶ池14号墳	右京区梅ヶ畑	丘陵腹 径10m 高5.5m	円墳	両袖式横穴式石室	全長6m 玄室長 2.8m×幅1.4m 美 道幅1.1m	鐵器・須恵器杯	消滅
	御堂ヶ池15号墳	右京区梅ヶ畑	丘陵腹 径10m	円墳	無袖式横穴式石室	長4m×幅1m	釘・須恵器平瓶	消滅
	御堂ヶ池16号墳	右京区梅ヶ畑	丘陵稜 径23m 高3m	円墳				完存
	御堂ヶ池17号墳	右京区梅ヶ畑	丘陵稜 径9m	円墳	片袖式横穴式石室	全長6.8m 玄室長 3.4m×幅1.4m 美 道幅1m 敷石	金環・鐵器・釘・須恵器 杯・高杯・短頸壺・土師 器	半壊
	御堂ヶ池18号墳	右京区梅ヶ畑	丘陵腹	円墳				消滅
	御堂ヶ池19号墳	右京区梅ヶ畑	丘陵腹	円墳				消滅
	御堂ヶ池20号墳	右京区梅ヶ畑	丘陵腹 径9.5m 高2m	円墳				完存
	御堂ヶ池21号墳	右京区梅ヶ畑	丘陵腹 径16m 高3m	円墳	両袖式横穴式石室	全長8.3m 玄室長 3.5m×幅2.1m 美 道幅1.3m 石敷 外護列石	耳環・鐵・須恵器杯	消滅
	御堂ヶ池22号墳	右京区梅ヶ畑	丘陵腹 径15m 高2m	円墳				完存
	御堂ヶ池23号墳	右京区梅ヶ畑	丘陵腹 径14m 高2.5m	円墳				完存
	御堂ヶ池24号墳	右京区梅ヶ畑	丘陵稜 径10m	円墳				半壊
	御堂ヶ池25号墳	右京区梅ヶ畑	丘陵稜	円墳				半壊
	御堂ヶ池26号墳	右京区梅ヶ畑	丘陵稜 径11m 高1.6m	円墳	無袖式横穴式石室	長3.5m×幅1.1m 石敷	須恵器壺	消滅
50	山越1号墳	右京区音戸山町	丘陵腹 径12m 高2m	円墳				完存
	山越2号墳	右京区音戸山町	丘陵腹 径16m 高3m	円墳				完存
	山越3号墳	右京区音戸山町	丘陵腹 径13m 高2.5m	円墳				完存
	山越4号墳	右京区音戸山町	丘陵腹 径12m 高3m	円墳				完存
	山越5号墳	右京区音戸山町	丘陵腹 径13m 高3m	円墳				完存
	山越6号墳	右京区音戸山町	丘陵腹 径10m 高3m	円墳				完存
	山越7号墳	右京区音戸山町	丘陵腹 径9m 高2m	円墳				半壊
	山越8号墳	右京区音戸山町	丘陵腹 径15m	円墳				半壊
	山越9号墳	右京区音戸山町	丘陵腹 径15m	円墳				半壊
	山越10号墳	右京区音戸山町	丘陵腹 径10m 高2m	円墳				半壊
	山越11号墳	右京区音戸山町	丘陵腹 径11m 高2m	円墳				半壊
	山越12号墳	右京区音戸山町	丘陵腹 径10m 高2m	円墳				完存
	山越13号墳	右京区音戸山町	丘陵腹 径13m 高2m	円墳				完存
	山越14号墳	右京区音戸山町	丘陵腹 径21m 高3m	円墳				完存
	山越15号墳	右京区音戸山町	丘陵腹 径15m 高2m	円墳				完存
51	山越16号墳	右京区音戸山町	丘陵頂	円墳				完存
	山越17号墳	右京区音戸山町	台地 径25m 高4m	円墳				完存
	音戸山1号墳	右京区太秦三尾町	丘陵裾 径14m 高3m	円墳	両袖式横穴式石室	全長7m 玄室長 3.1m×幅2m 美道 幅1.4m	銀環・鐵・釘・須恵器 杯・高杯・長頸壺	全壊 1983年発掘

51	音戸山2号墳	右京区太秦三尾町	丘陵裾 径13.5m 高2.5m	円墳			半壊
	音戸山3号墳	右京区鳴滝音戸山町	丘陵裾 一辺13m 高1m	方墳	無袖式横穴式石室	長6.1m×幅1.3m 敷石	金環・刀子・須恵器杯・ 高杯・短頸壺・横瓶
	音戸山4号墳	右京区鳴滝音戸山町	丘陵裾 径18m 高2m	円墳	片袖式横穴式石室	全長6.8m 玄室長 3.4m×幅1.6m 羨 道幅1.2m 敷石	金環・須恵器杯・高杯・ 長頸壺・甕
	音戸山5号墳	右京区鳴滝音戸山町	丘陵裾 径16m 高2m	円墳	無袖式横穴式石室	長5.6m×幅1.4m 敷石 組合式家形石 棺	鐵・刀子・釘・須恵器・ 土師器長頸壺
	音戸山6号墳	右京区鳴滝音戸山町	丘陵裾 径12m 高2m	円墳			完存
	音戸山7号墳	右京区鳴滝音戸山町	丘陵裾 一辺12m 高1.5m	方墳	横穴式石室	痕跡鑿	須恵器杯・高杯・壺
	音戸山8号墳	右京区鳴滝音戸山町	丘陵裾 一辺8m 高2m	方墳	無袖式横穴式石室	長4.8m×幅1.2m 列石	須恵器高杯・台付長頸 壺・土師器甕
	音戸山9号墳	右京区鳴滝音戸山町	丘陵頂	円墳			完存
	音戸山西支群1号墳	右京区鳴滝音戸山町	丘陵腹 径7m 高2.5m	円墳	無袖式横穴式石室	残長1m×幅0.8m 敷石	紡錘車・須恵器杯・壺
	音戸山西支群2号墳	右京区鳴滝音戸山町	丘陵腹 径8.5m 高3m	円墳	無袖式横穴式石室	長5.5m×幅1.3m	須恵器杯
	音戸山西支群3号墳	右京区鳴滝音戸山町	丘陵腹 径8m 高3m	円墳			完存
	音戸山西支群4号墳	右京区鳴滝音戸山町	丘陵腹 径7.4m 高2.5m	円墳			完存
	音戸山西支群5号墳	右京区鳴滝音戸山町	丘陵腹 径10m 高3m	円墳			完存
	音戸山西支群6号墳	右京区鳴滝音戸山町	丘陵腹 径10m	円墳			完存
	音戸山西支群7号墳	右京区鳴滝音戸山町	丘陵腹 径10m	円墳			完存
	音戸山西支群8号墳	右京区鳴滝音戸山町	丘陵腹 径10m	円墳			完存
52	宇多野病院古墳	右京区鳴滝音戸山町	丘陵端	円墳	横穴式石室	崖面に露出	半壊
53	三瓦山1号墳	右京区鳴滝音戸山町	丘陵稜	円墳	横穴式石室		全壊
	三瓦山2号墳	右京区鳴滝音戸山町	丘陵稜	円墳	横穴式石室		全壊
	三瓦山3号墳	右京区鳴滝音戸山町	丘陵稜	円墳	横穴式石室		全壊
	三瓦山4号墳	右京区鳴滝音戸山町	丘陵稜	円墳	横穴式石室		全壊
54	双ヶ岡1号墳	右京区御室双岡町	墳丘頂 径44m 高7.8m	円墳	両袖式横穴式石室	全長14.6m 玄室長 6.1m×幅3.6m×高 5m 羨道幅2.4m 石 棺	金環・鉄器・土師器壺・ 須恵器高杯・長頸壺
	双ヶ岡2号墳	右京区御室双岡町	墳丘腹 径19m 高2m	円墳			完存 1980年発掘
	双ヶ岡3号墳	右京区御室双岡町	丘陵腹 径17m 高2.5m	円墳			完存
	双ヶ岡4号墳	右京区御室双岡町	丘陵腹 径10.5m 高2m	円墳			完存
	双ヶ岡5号墳	右京区御室双岡町	丘陵腹 径10m 高1.5m	円墳			完存
	双ヶ岡6号墳	右京区御室双岡町	丘陵腹 径12m 高2m	円墳			完存
	双ヶ岡7号墳	右京区御室双岡町	丘陵腹 径9m 高1m	円墳			完存
	双ヶ岡8号墳	右京区御室双岡町	丘陵腹 径17m 高2.5m	円墳			完存
	双ヶ岡9号墳	右京区御室双岡町	丘陵腹 径11m 高1.5m	円墳			完存
	双ヶ岡10号墳	右京区御室双岡町	丘陵腹 径14m 高1m	円墳			完存
	双ヶ岡11号墳	右京区御室双岡町	丘陵腹 径15m 高1.5m	円墳			完存
	双ヶ岡12号墳	右京区御室双岡町	丘陵腹 径11.5m 高1m	円墳			完存
	双ヶ岡13号墳	右京区御室双岡町	丘陵腹 径13m 高2m	円墳			完存
	双ヶ岡14号墳	右京区御室双岡町	丘陵腹 径17m 高2.5m	円墳			完存
	双ヶ岡15号墳	右京区御室双岡町	丘陵腹 径23m 高2m	円墳			完存
	双ヶ岡16号墳	右京区御室双岡町	丘陵腹 径13m 高2m	円墳			完存
	双ヶ岡17号墳	右京区御室双岡町	丘陵腹 径11.5m 高2m	円墳			完存
	双ヶ岡18号墳	右京区御室双岡町	丘陵腹 径21m 高2.5m	円墳			完存
	双ヶ岡19号墳	右京区御室双岡町	丘陵腹 径11m 高2m	円墳			完存
	双ヶ岡20~31号墳	右京区御室双岡町	丘陵腹	円墳			完存
55	五位山古墳	右京区花園宮ノ上町	丘陵腹	円墳	横穴式石室		全壊
56	観空寺谷1号墳	右京区北嵯峨峰朝原山町	丘陵腹 径7m 高3m	円墳			完存
	観空寺谷2号墳	右京区北嵯峨峰朝原山町	丘陵腹 径16m 高2m	円墳			完存
57	鳥居本1号墳	右京区嵯峨鳥居本一華表町他	丘陵腹	円墳	横穴式石室		完存
	鳥居本2号墳	右京区嵯峨鳥居本一華表町他	丘陵腹	円墳	横穴式石室		完存
58	嵯峨七ツ塚1号墳	右京区北嵯峨赤坂町	台地	円墳			半壊
	嵯峨七ツ塚2号墳	右京区北嵯峨洞ノ内町	台地 径15m 高2.5m	円墳			半壊
	嵯峨七ツ塚3号墳	右京区北嵯峨洞ノ内町	台地 径13m 高0.8m	円墳	横穴式石室	石材露出	半壊
	嵯峨七ツ塚4号墳 (狐塚)	右京区北嵯峨洞ノ内町	台地 径25m 高4m	円墳	両袖式横穴式石室	天井石露出	半壊
	嵯峨七ツ塚5号墳	右京区北嵯峨洞ノ内町	台地 径17m 高2.5m	円墳			半壊
	嵯峨七ツ塚6号墳	右京区北嵯峨洞ノ内町	台地 径25m 高5m	円墳	両袖式横穴式石室		完存
	嵯峨七ツ塚7号墳 (八条塚)	右京区北嵯峨洞ノ内町	台地 径11m 高1.5m	円墳			半壊
59	大覚寺1号墳	右京区嵯峨野大覚寺	台地 径56m 高11m 2段築成 周濠 陸橋	円墳	両袖式横穴式石室	全長14.7m 玄室長 5.4m×幅3.2m 羨 道幅1.9m	金環・環頭大刀・鐵・金 銅辻金具・刀子・須恵 器・土師器
	大覚寺2号墳	右京区嵯峨野大覚寺	台地 一辺28m 周濠	方墳	両袖式横穴式石室	全長12m 玄室長 4.6m×幅2.5m 羨 道幅1.6m 組合式家 形石棺	竿状銅製品・釘・須恵 器・高杯・長頸壺・裝飾 付壺・土師器

59	大覚寺 3号墳	右京区嵯峨野大覚寺	台地	方墳?	両袖式横穴式石室	全長8.2m 玄室長3.6m×幅2.4m 羨道幅1.5m 磁敷床組合式家形石棺	金環・須恵器杯・高杯・装飾付壺・新羅土師瓶	全壊
	大覚寺 4号墳	右京区嵯峨野大覚寺	台地 径28m 高4.5m	円墳	両袖式横穴式石室	玄室幅2.2m		半壊
60	一本木古墳	右京区櫻原百々ヶ池	丘陵頂 全長100m	前方後円墳	堅穴式石室		竜虎獸帶鏡・鼈竜鏡・不明鏡・劍・斧	半壊 1901年発掘
61	稻荷古墳	右京区嵯峨広沢西裏町	台地 径20m 高5m	円墳	横穴式石室	石材露出	須恵器直口壺	半壊
62	広沢 1号墳	右京区嵯峨広沢池下町	台地 径30m 高4.5m	円墳	無袖式横穴式石室	長12m×幅2.4m×高2.3m 組合式家形石棺	鉄斧・釘・須恵器杯・高杯・壺・土師器	全壊 1956年発掘
	広沢 2~4号墳	右京区嵯峨広沢池下町	台地	円墳	横穴式石室			全壊
63	南野 1号墳	右京区嵯峨広沢南野町	平地 高3m	円墳	横穴式石室	玄室一部残存		半壊
	南野 2号墳	右京区嵯峨広沢南野町	平地	円墳	横穴式石室			半壊
	南野 3号墳	右京区太秦堀池町	平地	円墳	両袖式横穴式石室	全長8m 玄室長4m×幅2m 羨道幅1.2m		半壊
	南野 4号墳	右京区太秦堀池町	平地 径40m 高6m	円墳	横穴式石室			半壊
64	遍照寺古墳	右京区嵯峨広沢北馬野町	台地 径30m 高5m	円墳	横穴式石室	石材露出		半壊
	甲塚古墳	右京区嵯峨甲塚町	平地 径38m 高3.5m	円墳	両袖式横穴式石室	全長14.4m 玄室長4m×幅2.6m 羨道幅1.2m		半壊
	巽 1号墳	右京区山越巽町	平地	円墳?	両袖式横穴式石室	全長10.1m 玄室長4.6m×幅2.5m 羨道幅1.7m	馬具・鎌・刀子・須恵器杯・高杯・装飾付器台	全壊 1986年発掘
	巽 2号墳	右京区太秦三尾町	丘陵端	円墳				全壊
	常盤馬塚古墳	右京区常盤馬塚町	平地	円墳	横穴式石室	長7m 玄室幅2m	須恵器高杯・平瓶・土師器皿	全壊
	常盤柏ノ木 1号墳	右京区常盤下田町	平地	前方後円墳				全壊
	常盤柏ノ木 2号墳	右京区常盤柏ノ木町	平地	前方後円墳				全壊
65	太秦馬塚古墳	右京区太秦馬塚町	平地	前方後円墳				全壊
66	仲野親王墓古墳 (垂蓑山古墳)	右京区太秦垂蓑山町	台地 全長64m 後円部径40m 前方部幅56m 段築周濠	前方後円墳				完存 宮内庁管轄
67	千代ノ道古墳	右京区嵯峨野千代ノ道町	平地 径16m 高2.5m	円墳	横穴式石室			半壊
68	蛇塚古墳	右京区太秦面影町	平地 全長75m 後円部径43m 前方部幅40m 周濠・外堤	前方後円墳	両袖式横穴式石室	全長17.8m 玄室長6.7m×幅3.8m×高5.3m 羨道幅2.6m 家形石棺?		半壊 石室国指定
69	清水山古墳	右京区太秦松本町	平地 全長60m 後円部径31m 同高4m 前方部幅28m 同高3m 周濠	前方 後 円 墳?	横穴式石室		玉類・刀剣	全壊
70	天塚古墳	右京区太秦松本町	平地 全長71m 後円部径46m 同高8m 前方部幅58m 同高8.4m 2段築成周濠	前方後円墳	無袖式横穴式石室・片袖式横穴式石室	長10.5m×幅2.1m 全長8.6m 玄室長4.7m×幅1.8m 羨道幅1.1m	獸形鏡・不明鏡・金銅製品・玉類・劍・鎌・馬具・須恵器広口壺・器台	完存
71	段ノ山古墳	右京区梅津段町	平地 全長75m	前方後円墳				全壊
72	常盤東ノ町 1号墳	右京区常盤東ノ町	平地 径15m 周濠	円墳	横穴式石室	長8.4m 磁敷床	鎌・須恵器杯・高杯・直口壺・台付長頸壺	半壊 1975年発掘
	常盤東ノ町 2号墳	右京区常盤東ノ町	平地 径15m 周濠	円墳	無袖式横穴式石室	長8.4m×幅1.7m	金環・銀環・鎌・刀子・釘・須恵器杯・高杯・壺・土師器碗・甕・人骨	消滅 1975年発掘
	常盤東ノ町 3号墳	右京区常盤東ノ町	平地 径20m 周濠	円墳	横穴式石室	石棺?	金具・須恵器壺	全壊 1975年発掘
74	松尾山B-1号墳	西京区松尾谷松尾山	丘陵頂 径10m 高1m	円墳	横穴式石室?			半壊
	松尾山B-2号墳	西京区松尾谷松尾山	丘陵頂 径10m 高1m	円墳	横穴式石室	残長4.7m×幅1.0m×高0.5m 天井石露出		半壊
	松尾山B-3号墳	西京区松尾谷松尾山	丘陵頂 径10m 高1m	円墳	横穴式石室	残長2m×幅1.3m 石材露出		半壊
	松尾山B-4号墳	西京区松尾谷松尾山	丘陵頂 径10m 高1m	円墳	横穴式石室	天井石露出		半壊
	松尾山B-5号墳	西京区松尾谷松尾山	丘陵頂 径10m 高1m	円墳	横穴式石室	残長4m×幅1.2m×高0.8m		半壊
	松尾山B-6号墳	西京区松尾谷松尾山	丘陵頂 径13m 高1.5m	円墳	横穴式石室			半壊
	松尾山B-7号墳	西京区松尾谷松尾山	丘陵頂 径10m 高1m	円墳	無袖式横穴式石室?	残長3m×幅0.8m×高1m		半壊
	松尾山B-8号墳	西京区松尾谷松尾山	丘陵頂 径10m 高1m	円墳	横穴式石室			半壊
	松尾山C-1号墳	西京区松尾谷松尾山	丘陵腹 径15m 高3m	円墳	横穴式石室?			半壊
	松尾山C-2号墳	西京区松尾谷松尾山	丘陵腹 径13m 高1.5m	円墳	横穴式石室			半壊
	松尾山D-1号墳	西京区松尾谷松尾山	丘陵腹 径13m 高2m	円墳	横穴式石室	石材露出		半壊
	松尾山D-2号墳	西京区松尾谷松尾山	丘陵腹 径10m 高1.5m	円墳	無袖式横穴式石室?	残長2.5m×幅1m×高1.1m 天井石露出		半壊
	松尾山D-3号墳	西京区松尾谷松尾山	丘陵腹 径10m 高1.5m	円墳	横穴式石室	天井石露出		半壊
	松尾山D-4号墳	西京区松尾谷松尾山	丘陵腹 径10m 高1.5m	円墳	横穴式石室	天井石露出		半壊
	松尾山D-5号墳	西京区松尾谷松尾山	丘陵腹 径10m 高1m	円墳	横穴式石室?			半壊
	松尾山D-6号墳	西京区松尾谷松尾山	丘陵腹 径10m 高1m	円墳	横穴式石室?	石材散乱		半壊
	松尾山D-7号墳	西京区松尾谷松尾山	丘陵腹 径10m 高1m	円墳	横穴式石室?			半壊
	松尾山E-1号墳	西京区松尾谷松尾山	丘陵腹	円墳?				半壊
	松尾山E-2号墳	西京区松尾谷松尾山	丘陵腹	円墳?				

74	松尾山F号墳	西京区嵐山宮町	丘陵稜 径23m 高3.5m	円墳	両袖式横穴式石室	全長13m 玄室幅1.3m 羨道幅0.6m		完存
	松尾山G号墳	西京区嵐山宮町	丘陵稜 径10m 高1m	円墳	横穴式石室	天井石露出		半壊
	松尾山H号墳	西京区松尾谷松尾山町	丘陵頂	円墳	両袖式横穴式石室	玄室長3m×幅2m 羨道幅0.7m		半壊
	松尾山I号墳	西京区松尾谷松尾山町	丘陵腹 径13m 高2.5m	円墳	横穴式石室			半壊
	松尾山J-1号墳	西京区松尾谷松尾山町	丘陵稜 径10m 高1m	円墳				半壊
	松尾山J-2号墳	西京区松尾谷松尾山町	丘陵腹 径10m 高1m	円墳				半壊
	松尾山K号墳	西京区松尾谷松尾山町	丘陵裾 径7m 高1m	円墳	横穴式石室			半壊
	松尾山L-1号墳	西京区松尾谷松尾山町	丘陵稜 径11.5m 高1m	円墳	片袖式横穴式石室	幅0.8m		半壊
	松尾山L-2号墳	西京区松尾谷松尾山町	丘陵稜 径12m 高1m	円墳				半壊
	松尾山L-3号墳	西京区松尾谷松尾山町	丘陵稜 径15m 高1m	円墳	横穴式石室	石材露出		半壊
	松尾山M-1号墳	西京区松尾谷松尾山町	丘陵腹 径10m 高1m	円墳	横穴式石室	石材露出		半壊
	松尾山M-2号墳	西京区松尾谷松尾山町	丘陵腹 径10m 高1m	円墳	横穴式石室	石材露出		半壊
	松尾山M-3号墳	西京区松尾谷松尾山町	丘陵腹 径13m 高1m	円墳	横穴式石室?			半壊
	松尾山M-4号墳	西京区松尾谷松尾山町	丘陵腹 径15m 高2m	円墳	横穴式石室			半壊
	松尾山M-5号墳	西京区松尾谷松尾山町	丘陵腹 径13m 高1m	円墳	横穴式石室	石材露出		半壊
	松尾山M-6号墳	西京区松尾谷松尾山町	丘陵腹 径15m 高2m	円墳	横穴式石室	石材露出		半壊
	松尾山N-1号墳	西京区松尾谷松尾山町	丘陵稜 径10×15m 高1.5m	円墳				半壊
	松尾山N-2号墳	西京区松尾谷松尾山町	丘陵稜 径10m 高1.5m	円墳	横穴式石室	石材露出		半壊
	松尾山O号墳	西京区松尾谷松尾山町	丘陵稜	不明				半壊
	松尾山P-1号墳	西京区松尾谷松尾山町	丘陵腹 径10m 高1m	円墳	横穴式石室	石材露出		半壊
	松尾山P-2号墳	西京区松尾谷松尾山町	丘陵腹 径10m 高1m	円墳	横穴式石室	石材露出		半壊
	松尾山P-3号墳	西京区松尾谷松尾山町	丘陵腹 径10m 高1m	円墳	横穴式石室	幅1.2m		半壊
	松尾山Q号墳	西京区松尾谷松尾山町	丘陵腹 径10m 高1m	円墳	横穴式石室	石材露出		半壊
	松尾山R-1号墳	西京区松尾谷松尾山町	丘陵稜 径12m 高1.5m	円墳	横穴式石室	石材露出		半壊
	松尾山R-2号墳	西京区松尾谷松尾山町	丘陵稜 径10m 高1m	円墳	横穴式石室	側壁石材露出		半壊
75	西芳寺川A-1号墳	西京区松室北尾松尾山	丘陵腹 径10m 高2.5m	円墳	無袖式横穴式石室	長3.7m×幅1.4m×高2m		完存
	西芳寺川A-2号墳	西京区松室北尾松尾山	丘陵腹 径10m 高2m	円墳	無袖式横穴式石室	長2.3m×幅1.3m×高1.5m		完存
	西芳寺川A-3号墳	西京区松室北尾松尾山	丘陵腹 径10m 高3.2m	円墳	無袖式横穴式石室	長4.3m×幅1.1m×高1.6m		完存
	西芳寺川A-4号墳	西京区松室北尾松尾山	丘陵腹 径10m 高3.2m	円墳	無袖式横穴式石室	長4.6m×幅1.4m×高1.6m		完存
	西芳寺川B-1号墳	西京区松室北尾松尾山	丘陵腹 径17m 高3.8m	円墳	両袖式横穴式石室	全長10.8m 玄室長3.6m×幅2.3m×高3.7m 羨道幅2.3m		完存
	西芳寺川B-2号墳	西京区松室北尾松尾山	丘陵腹 径14m 高2.1m	円墳	両袖式横穴式石室	全長5.7m 玄室長2.6m×幅1.5m×高2.2m 羨道幅0.9m		完存
	西芳寺川B-3号墳	西京区松室北尾松尾山	丘陵腹 径15m 高4m	円墳	両袖式横穴式石室	全長6.3m 玄室長3.2m×幅1.9m×高2.6m 羨道幅1.1m		完存
	西芳寺川B-4号墳	西京区松室北尾松尾山	丘陵腹 径15m 高3.5m	円墳	横穴式石室			完存
	西芳寺川B-5号墳	西京区松室北尾松尾山	丘陵腹 径7m 高0.5m	円墳	横穴式石室			完存
	西芳寺川C号墳	西京区松室北尾松尾山	丘陵腹 径10m 高1m	円墳	横穴式石室			完存
	西芳寺川D号墳	西京区松室北尾松尾山	丘陵腹 径10m 高1m	円墳	横穴式石室	全長2m×幅1.5m×高1.6m		完存
	西芳寺川E-1号墳	西京区松室北尾松尾山	丘陵腹 径13m 高2m	円墳	横穴式石室	全長2m×幅1.5m×高1.6m		完存
	西芳寺川E-2号墳	西京区松室北尾松尾山	丘陵腹 径13m 高2m	円墳	横穴式石室			完存
	西芳寺川E-3号墳	西京区松室北尾松尾山	丘陵腹 径15m 高2.5m	円墳	横穴式石室			完存
	西芳寺川E-4号墳	西京区松室北尾松尾山	丘陵腹 径10m 高1m	円墳	横穴式石室			完存
	西芳寺川F-1号墳	西京区松室北尾松尾山	丘陵腹 径10m 高1m	円墳	不明			完存
	西芳寺川F-2号墳	西京区松室北尾松尾山	丘陵腹 径10m 高1m	円墳	横穴式石室			完存
76	西芳寺1号墳	西京区神ヶ谷町	丘陵腹 径12.5m 高3m	円墳	横穴式石室			完存
	西芳寺2号墳	西京区神ヶ谷町	丘陵腹 径12.5m 高4m	円墳	横穴式石室			完存
	西芳寺3号墳	西京区神ヶ谷町	丘陵腹 径9m 高4m	円墳	横穴式石室			完存
	西芳寺4号墳	西京区神ヶ谷町	丘陵腹 径12.5m 高4m	円墳	横穴式石室			完存
	西芳寺5号墳	西京区神ヶ谷町	丘陵腹	円墳	横穴式石室	石材露出		完存
	西芳寺6号墳	西京区神ヶ谷町	丘陵腹	円墳	横穴式石室	石材露出		完存
	西芳寺7号墳	西京区神ヶ谷町	丘陵腹	円墳	横穴式石室			完存
	西芳寺8号墳	西京区神ヶ谷町	丘陵腹 径12m 高3.5m	円墳	横穴式石室	石材露出		完存
	西芳寺9号墳	西京区神ヶ谷町	丘陵腹 径6m 高0.8m	円墳	横穴式石室			完存
	西芳寺10号墳	西京区神ヶ谷町	丘陵腹 径6m 高0.5m	円墳	横穴式石室			完存
	西芳寺11号墳	西京区神ヶ谷町	丘陵腹 径10.5m 高2m	円墳	横穴式石室	天井石露出		完存
	西芳寺12号墳	西京区神ヶ谷町	丘陵腹 径12.5m 高3m	円墳	横穴式石室			完存
	西芳寺13号墳	西京区神ヶ谷町	丘陵腹 径16m 高6m	円墳	横穴式石室	石材露出		完存
	西芳寺14号墳	西京区神ヶ谷町	丘陵腹	円墳	横穴式石室			完存
	西芳寺15号墳	西京区神ヶ谷町	丘陵腹 径11.5m 高2m	円墳	横穴式石室	石材露出		完存
	西芳寺16号墳	西京区神ヶ谷町	丘陵腹 径11.5m 高6m	円墳	横穴式石室			完存

76	西芳寺17号墳	西京区神ヶ谷町	丘陵腹	円墳	横穴式石室			完存
	西芳寺18号墳	西京区神ヶ谷町	丘陵腹	円墳	横穴式石室			半壊
	西芳寺19号墳	西京区神ヶ谷町	丘陵腹	円墳	横穴式石室			完存
	西芳寺20号墳	西京区神ヶ谷町	丘陵腹	円墳	横穴式石室			完存
	西芳寺21号墳	西京区神ヶ谷町	丘陵腹	円墳	横穴式石室			半壊
	西芳寺22号墳	西京区神ヶ谷町	丘陵腹	円墳	横穴式石室			完存
	西芳寺23号墳	西京区神ヶ谷町	丘陵腹	円墳	横穴式石室			完存
	西芳寺24号墳	西京区神ヶ谷町	丘陵腹	円墳	横穴式石室			完存
	西芳寺25号墳	西京区神ヶ谷町	丘陵腹	円墳	横穴式石室			半壊
	西芳寺26号墳	西京区神ヶ谷町	丘陵腹 径10m 高3m	円墳	横穴式石室			完存
	西芳寺27号墳	西京区神ヶ谷町	丘陵腹 径9m 高2m	円墳	横穴式石室	北半分割平 石材露出		半壊
	西芳寺28号墳	西京区神ヶ谷町	丘陵腹 径9m 高2m	円墳	横穴式石室			半壊
	西芳寺29号墳	西京区神ヶ谷町	丘陵腹 径17m 高5m	円墳	横穴式石室			完存
	西芳寺30号墳	西京区神ヶ谷町	丘陵腹 径10m 高3m	円墳	横穴式石室	石材露出		完存
	西芳寺31号墳	西京区神ヶ谷町	丘陵腹	円墳	横穴式石室			完存
	西芳寺32号墳	西京区神ヶ谷町	丘陵腹 西芳寺庭園内 径11m 高1.5m	円墳	横穴式石室	天井石露出		完存
	西芳寺33号墳	西京区神ヶ谷町	丘陵腹 西芳寺庭園内 径10m 高2.5m	円墳	両袖式横穴式石室	玄室長4m×幅1.6m		半壊
	西芳寺34号墳	西京区神ヶ谷町	丘陵腹 西芳寺庭園内	円墳	横穴式石室			半壊
	西芳寺35号墳	西京区神ヶ谷町	丘陵腹 西芳寺庭園内	円墳	横穴式石室			半壊
	西芳寺36~40号墳	西京区神ヶ谷町	丘陵腹	円墳	横穴式石室			完存
	西芳寺41号墳	西京区神ヶ谷町	丘陵腹	円墳	横穴式石室	石材露出		完存
	西芳寺42号墳	西京区神ヶ谷町	丘陵腹	円墳	横穴式石室	石材露出		完存
	西芳寺43号墳	西京区神ヶ谷町	丘陵腹	円墳	横穴式石室			完存
77	衣笠山1号墳	西京区山田桜谷町	丘陵稜 径20m 高3m	円墳	両袖式横穴式石室	玄室長6m×幅2.9m 美道幅1.2m	土師器長頸壺・須恵器杯・高杯・広口壺・短頸壺	完存
	衣笠山2号墳	西京区山田桜谷町	丘陵稜 径12m 高3m	円墳	横穴式石室	石材露出		完存
78	上ノ山古墳	西京区上ノ山町	丘陵端 径10m 高0.5m	円墳	横穴式石室	石材露出		完存
79	穀塚古墳	西京区山田葉室町	台地 全長40.5m 後円部 径6m 前方部幅18m 同高3.6m 董石 周濠	前方後円墳	堅穴式石室	長5.4m×幅2.7m×高0.9m	画文帶神獸鏡・直刀・槍・刀子・斧・帶金具・馬具・須恵器杯・高杯・円筒埴輪	全壊 1914年発掘
80	清水山古墳	西京区山田畠田町	平地	前方後円墳				全壊
81	天鼓の森古墳	西京区松尾木ノ曾町	平地	前方後円墳				全壊
82	天皇の杜古墳	西京区御陵塚ノ越町	台地 全長86m 後円部 径53m 同高8.5m 前方部幅35m 同高5.5m 3段築成董石				埴輪	完存 1988年発掘
83	一本木古墳	西京区櫻原百々ヶ池	丘陵頂 全長100m	前方後円墳	堅穴式石室		竜虎獸帶鏡・鼈竜鏡・不明鏡・劍・斧	半壊 1901年発掘
	鳴谷古墳	西京区御陵鳴谷町	丘陵稜	円墳	横穴式石室			全壊
	塚ノ本古墳	西京区櫻原塚ノ本町	台地 高円寺境内 径30m	円墳				全壊
	百々池古墳	西京区櫻原百々ヶ池	丘陵稜 径50m 董石	円墳	堅穴式石室		埴輪・三角緣神獸鏡・画文帶神獸鏡・方格規矩鏡・獸帶鏡・車輪石・石釧路・紡錘車	全壊 1900年発掘
	権現原古墳	西京区櫻原権現原	丘陵腹	円墳	土壙墓?		須恵器壺	全壊
	南鉢伏1~4号墳	西京区大原野小塙町	丘陵稜 径14m	円墳				完存
	山田車塚古墳	西京区山田	平地					消滅?
	丸尾古墳	西京区大原野石見町	丘陵稜	円墳		石室		半壊
	山田桜谷1号墳	西京区山田桜谷町	丘陵稜 全長50m	前方後円墳			須恵器・埴輪	完存
	山田桜谷2号墳	西京区山田桜谷町	丘陵頂 全長50m	前方後円墳			埴輪(円筒・形象)	完存
84	大枝山1号墳	西京区御陵大枝山	丘陵腹 径16m 高3.3m	円墳	両袖式横穴式石室	全長4.7m 玄室長2.3m×幅2.2m 美道幅1.7m		半壊
	大枝山2号墳	西京区御陵大枝山	丘陵腹	円墳	横穴式石室			半壊
	大枝山4号墳	西京区御陵大枝山	丘陵腹 径20m 高4.1m	円墳	両袖式横穴式石室	全長11.3m 玄室長3.7m×幅2.1m×高3.2m 美道幅1.5m	金環・土師器長頸壺・高杯・長頸壺・提瓶	消滅 1980・83年発掘
	大枝山5号墳	西京区御陵大枝山	丘陵腹 径12.5m 高2m	円墳	片袖式横穴式石室		鐵・土師器・須恵器	消滅 1980年発掘
	大枝山6号墳	西京区御陵大枝山	丘陵腹 径20m 高3.4m	円墳				完存
	大枝山7号墳	西京区御陵大枝山	丘陵腹 径20.5m 高5.6m	円墳				完存
	大枝山8号墳	西京区御陵大枝山	丘陵腹 径17m 高2.4m	円墳	横穴式石室			完存
	大枝山9号墳	西京区御陵大枝山	丘陵腹 径18m 高2m	円墳	横穴式石室			完存
	大枝山10号墳	西京区御陵大枝山	丘陵腹 径15m 高1.5m	円墳	横穴式石室			完存
	大枝山11号墳	西京区御陵大枝山	丘陵腹 径21.5m 高3m	円墳	両袖式横穴式石室	全長6.9m		完存
	大枝山12号墳	西京区御陵大枝山	丘陵腹 径18m 高3.1m	円墳	横穴式石室			完存
	大枝山14号墳	西京区御陵大枝山	丘陵腹 径13m 高2.5m	円墳	片袖式横穴式石室	全長8.7m 玄室長3.1m×幅1.6m×高2.3m 美道幅1.1m 董石床	金環・刀子・須恵器杯・高杯・長頸壺	消滅
	大枝山15号墳	西京区御陵大枝山	丘陵腹 径17m 高5.6m	円墳	両袖式横穴式石室	全長8.3m 玄室長4.5m×幅1.9m×高3m 美道幅1.2m		完存

84	大枝山16号墳	西京区御陵大枝山	丘陵腹 径22m 高4.5m	円墳	横穴式石室			完存
	大枝山17号墳	西京区御陵大枝山	丘陵腹 径13m	円墳				完存
	大枝山18号墳	西京区御陵大枝山	丘陵腹 径16m 高2.6m	円墳	両袖式横穴式石室	全長5.7m 玄室長3.2m×幅1.6m×高2.6m 羨道幅1.1m		完存
	大枝山19号墳	西京区御陵大枝山	丘陵腹 径13m	円墳	横穴式石室			完存
	大枝山20号墳	西京区御陵大枝山	丘陵腹 径16m 高4.1m	円墳				完存
	大枝山21号墳	西京区御陵大枝山	丘陵腹 径16m 高4.3m	円墳	両袖式横穴式石室	全長8.7m 玄室長5.2m×幅1.6m×高2.7m 羨道幅1 m		消滅
	大枝山22号墳	西京区御陵大枝山	丘陵腹 径23m 高3.2m 葦石	円墳	両袖式横穴式石室	全長11m 玄室長3.5m×幅2.3m×高2.3m 羨道幅1.4m 葦石床	金環・土師器壺・須恵器杯・高杯・短頸壺・直口壺・装飾付壺	消滅 1983年発掘
	大枝山23号墳	西京区御陵大枝山	丘陵腹 径16m 高2.7m	円墳	両袖式横穴式石室		土師器・須恵器	消滅 1980年発掘
	大枝山24号墳	西京区御陵大枝山	丘陵腹 径15m 高1 m	円墳	横穴式石室?		須恵器	消滅 1980年発掘
	大枝山25号墳	西京区御陵大枝山	丘陵 径19.5m 高2.8m	円墳	両袖式横穴式石室		耳環・銀象嵌刀・鍔・土師器・須恵器	消滅 1980年発掘
	塚原1号墳	西京区大枝塚原	丘陵棱	円墳				完存 宮内庁管轄
	塚原2号墳	西京区大枝塚原	丘陵棱	円墳				半壊
	杏掛1~4号墳	西京区大枝杏掛町	丘陵頂	円墳				完存
85	福西1号墳	西京区大枝東長町	台地	円墳	横穴式石室?	組合式家形石棺		全壊
	福西2号墳	西京区大枝東長町	台地	円墳		組合式家形石棺	須恵器碗・皿・瓶・土師器・人骨	全壊 1952年発掘
	福西3号墳	西京区大枝東長町	台地	円墳				半壊
	福西4号墳	西京区大枝東長町	台地	円墳	横穴式石室			半壊
	福西5号墳	西京区大枝東長町	台地	円墳		家形石棺		半壊
	福西6号墳	西京区大枝東長町	台地	円墳	横穴式石室?			半壊
	福西7号墳	西京区大枝東長町	台地	円墳	横穴式石室?	組合式家形石棺		半壊
	福西8号墳	西京区大枝東長町	台地 径6m 高0.5m	円墳				半壊
	福西9号墳	西京区大枝東長町	台地	円墳	横穴式石室			半壊
	福西10号墳	西京区大枝東長町	台地	円墳	両袖式横穴式石室	組合式家形石棺		消滅 1970年発掘
	福西11号墳	西京区大枝東長町	台地	円墳	両袖式横穴式石室			消滅 1970年発掘
	福西12号墳	西京区大枝東長町	台地	円墳	横穴式石室			消滅 1970年発掘
	福西13号墳	西京区大枝東長町	台地 径13m 高1.2m	円墳			鉢・須恵器	消滅 1973年発掘
	福西14号墳	西京区大枝東長町	台地 径15m 高2 m	円墳		碟床	須恵器	消滅 1971年発掘
	福西15号墳	西京区大枝東長町	台地	円墳	横穴式石室?		須恵器	消滅 1971年発掘
	福西16号墳	西京区大枝東長町	台地	円墳		石棺片	鉄器・土師器・須恵器	消滅 1971年発掘
	福西17号墳	西京区大枝東長町	台地	円墳	小石室	幅0.8m		消滅 1973年発掘
	福西18号墳	西京区大枝東長町	台地 径23m 高4.5m	円墳	両袖式横穴式石室	全長10.2m 玄室長4.5m×幅2.1m 羨道幅1.2m 碓敷床	直刀・鍔・馬具・刀子・釘・須恵器杯・高杯・匙・短頸壺・長頸壺・土師器高杯・台付壺・和同開珎	消滅 1971年発掘
	福西19号墳	西京区大枝東長町	台地	円墳	小石室	長2.3m×幅0.8m	須恵器	消滅 1970年発掘
	福西21号墳	西京区大枝東長町	台地 径12m 高2 m	円墳	横穴式石室?			完存
	福西22号墳	西京区大枝東長町	台地 径12m	円墳	無袖式横穴式石室	長7m×幅1.5m	須恵器杯・土師器	完存 1971年発掘
	福西23号墳	西京区大枝東長町	台地 帆立貝形 全長38m 後円部 径26m 前方部 幅15m	前 方 後 円 墳?		碟敷床 石棺片?		消滅 1971・72年発掘
	鏡山古墳	西京区大原野上里北ノ町	丘陵端 径30m 高8 m 3段築成 葦石	円墳	粘土椁		四獸形鏡・銅鏡・石製模造品(鏡・勾玉・刀子・斧頭・杵・履)	半壊
	石見上里古墳	西京区大原野上里北ノ町	丘陵端 径7.2m 高1.8m	円墳	横穴式石室	寄棟家形陶棺	須恵器	全壊
	大道古墳	西京区大野原西竹の里	台地	円墳		箱形石棺	須恵器高杯・壺	全壊
	勝持寺1号墳	西京区大原野南春日町	丘陵腹 径13m 高2.3m	円墳	無袖式横穴式石室	残長5.2m×幅1.4m		完存
	勝持寺2号墳	西京区大原野南春日町	丘陵腹 勝持寺境内	円墳				全壊
	勝持寺3号墳	西京区大原野南春日町	丘陵腹 勝持寺境内	円墳				全壊
	勝持寺4号墳	西京区大原野南春日町	丘陵腹	円墳			須恵器壺	完存
	勝持寺5号墳	西京区大原野南春日町	丘陵腹	円墳				完存
	勝持寺6号墳	西京区大原野南春日町	丘陵腹	円墳				完存
	八幡宮1号墳	西京区大原野石作町	丘陵腹 長峰八幡宮本殿下	円墳	片袖式横穴式石室	玄室長3m×幅1.5m 羨道幅1 m		半壊
	八幡宮2号墳	西京区大原野石作町	丘陵腹	円墳		陶棺		全壊
	八幡宮3号墳	西京区大原野石作町	丘陵腹	円墳				半壊
	円山1号墳	西京区大原野石作町	丘陵腹	円墳	横穴式石室		須恵器	全壊
	円山2号墳	西京区大原野石作町	丘陵腹	円墳	横穴式石室			全壊
	上羽古墳	西京区上羽町	台地	円墳			勾玉・須恵器	半壊
86	物集女車塚古墳	向日市物集女南条	丘陵端 全長48m 後円部 径31m 同高8.9m 前方部 幅38m 同高8 m 2段築成 葦石	前方後円墳	片袖式横穴式石室	全長10.9m 玄室長5.1m×幅2.8m×高3 m 羨道幅1.5m 組合式家形石棺	冠・耳環・空玉・小玉・管玉・トンボ玉・棗玉・白玉・大刀・小刀・三輪玉・刀子・矛・石突・鍔・馬具・土師器・須恵器・埴輪(円筒・形象)	完存

86	寺戸大塚古墳	西京区大枝南福西町	丘陵稜 全長98m 後円部 径54m 同高9.8m 前方部 幅45m 同高 4 m 3段築成 葺石	前方後円墳	竪穴式石室 2		舶載三角縁神獸鏡・獸帶 鏡・仿製三角縁神獸鏡・ 仿製方格渦文鏡・石訓・ 紡錘車形石製品・琴柱形 石製品・勾玉・管玉・刀 劍・鎌・銅鐵・鎌・斧・ 鉈・刀子・埴輪子・埴 輪(円筒・形象)	半壊
	牛廻し古墳	西京区大原野上里北ノ町	丘陵端 径40m 高4.5m 2段築成 葩石	円墳			埴輪・捩文鏡・円筒埴輪	全壊 1930年発掘
	大枝神社古墳	西京区大枝脊掛町	丘陵腹 径11m 高 2 m	円墳	横穴式石室	天井石露出		完存
	南荒木古墳	西京区御陵南荒木町	平地	円墳				全壊
	三重古墳	西京区川島三重町	平地	円墳				全壊
	大磐山古墳	西京区大原野北春日町	山腹	円墳				完存
	大原野神社東古墳	西京区大原野北春日町	丘陵端	円墳	横穴式石室			半壊
	妙見山古墳	向日市寺戸芝山	丘陵稜 全長115m 後円部 径69m 同高 8 m 前方部幅 58m 同高 5 m 3段築成 葺石	前方後円墳	竪穴式石室・ 削竹形木棺粘土棺	組合式家形石棺	仿製三角縁神獸鏡・管 玉・紡錘車形石製品・筒 形銅器・銅鐵・鎌・劍・ 刀・矛・小札冑・斧・鑿	全壊 1920・49年発掘
	西垣内古墳	向日市寺戸西垣内	丘陵稜 径 8 m 高1.5m	円墳		刳抜式家形石棺	須恵器	全壊
	芝山古墳	向日市寺戸芝山ノ内	丘陵稜 径20m	円墳		粘土棺	画文帶神獸鏡	全壊
	大牧1号墳	向日市寺戸大牧	丘陵腹	円墳?		土師質亀甲形陶棺		全壊
	大牧2号墳	向日市寺戸大牧	丘陵稜	円墳?				全壊
	五塚原古墳	向日市寺戸大牧	丘陵頂 全長94m 後円部 径54m 同高8.5m 前方部 幅36m 同高 4 m 葩石	前方後円墳			埴輪	完存
	北山古墳	向日市向日北山	丘陵稜	前 方 後 円 墳?	竪穴式石室		舶載三角縁神獸鏡・刀劍	消滅
87	灰方1号墳	西京区大原野灰方町	丘陵端 径12m 高2.5m	円墳	横穴式石室		須恵器	半壊
	灰方2号墳	西京区大原野灰方町	丘陵端	円墳	横穴式石室			全壊
	灰方3号墳	西京区大原野灰方町	丘陵端 径 9 m 高2.2m	円墳	横穴式石室			半壊
	灰方4号墳	西京区大原野灰方町	丘陵端	円墳	横穴式石室			全壊
	灰方5号墳	西京区大原野灰方町	丘陵端	円墳				全壊
	灰方6号墳	西京区大原野灰方町	丘陵端	円墳				全壊
	灰方7号墳	西京区大原野灰方町	丘陵端	円墳	横穴式石室		鉄斧・鉄鏟・須恵器杯・ 長頭壺・甕	全壊
	灰方8号墳	西京区大原野灰方町	丘陵端	円墳				全壊
	灰方9号墳	西京区大原野灰方町	丘陵端	円墳				全壊
	長野古墳	向日市物集女長野乙一	丘陵頂	円墳				全壊
	東山1~6号墳	向日市物集女長野乙二	丘陵稜	円墳				全壊
	長野丙1号墳	向日市物集女長野丙	丘陵稜	円墳	横穴式石室		伝須恵器	全壊
	長野丙2号墳	向日市物集女長野丙	丘陵稜	円墳	横穴式石室		伝須恵器	全壊
	長野丙3号墳	向日市物集女長野丙	丘陵稜	円墳	横穴式石室		伝須恵器	全壊
	恵美須山古墳	向日市物集女南条	丘陵稜 径15m 高 3 m	円墳	粘土棺		仿製方格規矩鏡・四獸形 鏡	全壊
	芝山1号墳	向日市寺戸芝山	丘陵稜	円墳				全壊
	芝山2号墳	向日市寺戸芝山	丘陵稜	前 方 後 円 墳?				全壊
	芝山3号墳	向日市寺戸芝山	丘陵稜	円墳		組合式家形石棺		全壊
	芝山4号墳	向日市寺戸芝山	丘陵稜	円墳			繩文土器・弥生土器	全壊
88	芝1号墳	西京区大原野石見町	台地 全長32.6m 後円部 径20m 同高 5 m 前方部幅 15.6m 同高2.5m 葩石	前方後円墳				半壊
	芝2号墳	西京区大原野石見町	台地 径 8 m 高0.8m	円墳				半壊
	芝3号墳	西京区大原野石見町	台地 径 5 m 高1.1m	円墳				完存
	芝4号墳	西京区大原野石見町	台地 径16m 高1.6m	円墳				半壊
	芝5号墳	西京区大原野石見町	台地 径13m 高1.6m	円墳				完存
	芝6号墳	西京区大原野石見町	台地 径11.5m 高 1 m	円墳	横穴式石室			半壊
	芝7号墳	西京区大原野石見町	台地 径10m 高2.5m	円墳				半壊
	芝8号墳	西京区大原野石見町	台地 径12m 高 1 m	円墳				完存
	芝9号墳	西京区大原野石見町	台地 径20m 高2.5m 葩 石?	円墳				完存
	芝10号墳	西京区大原野石見町	台地 径20m 径3.5m 段築	円墳			須恵器	完存
	芝11号墳	西京区大原野石見町	台地 一辺12m 高 2 m 葩 石	方墳				完存
	芝12号墳	西京区大原野石見町	台地 径 5 m 高 1 m	円墳		須恵質四注式家形陶 棺		半壊
	芝13号墳	西京区大原野石見町	台地	円墳				全壊
	芝14号墳	西京区大原野石見町	台地	円墳	横穴式石室		単龍環大刀・鉗具・轡・ 須恵器	全壊
88	向鉢伏古墳	西京区大原野石作町	丘陵頂 径10m 高2.5m	円墳	横穴式石室		埴輪	半壊
	向山1号墳	西京区大原野石作町	丘陵稜	円墳	横穴式石室		刀・須恵器	半壊
	向山2号墳	西京区大原野石作町	丘陵稜	円墳	横穴式石室		刀・須恵器	半壊
	狐棚1号墳	西京区大原野小塩町	丘陵頂	円墳				完存
	狐棚2号墳	西京区大原野小塩町	丘陵頂	円墳				完存
89	南条1号墳	向日市物集女南条	丘陵端	円墳				全壊

89	南条2号墳	向日市物集女南条	丘陵端	円墳			全壊
	南条3号墳	向日市物集女南条	丘陵 径23.5m 高3.5m 莢石	円墳		須恵器・円筒埴輪	半壊
	南条4~7号墳	向日市物集女南条	丘陵端	円墳			全壊
90	大原1号墳	長岡京市河陽ヶ丘2町目	丘陵腹	円墳	片袖式横穴式石室	玄室長1.8m×幅1.5m 羨道幅1.4m 磁敷床	金環・鎌・砥石・土師器・須恵器杯・平瓶・長頸壺 消滅 1973年発掘
	大原2号墳	長岡京市河陽ヶ丘2町目	丘陵腹	円墳	無袖式横穴式石室	長4.2m×幅1.1m	銀環・装金具・土師器壺・須恵器 消滅 1973年発掘
	大原3号墳	長岡京市河陽ヶ丘2町目	丘陵腹	円墳	片袖式横穴式石室		消滅
	大原4~25号墳	長岡京市河陽ヶ丘2町目	丘陵腹	円墳			消滅
91	カラガネ岳1号墳	長岡京市粟生カラガネ岳	丘陵腹 径14m 高4m	円墳	両袖式横穴式石室	全長8.7m 玄室長3.3m×幅1.2m 羨道幅1m	鉄器・土師器・須恵器 半壊 1976・77年発掘
	カラガネ岳2号墳	長岡京市粟生カラガネ岳	丘陵頂 径34.5m 高4m 造出	円墳		粘土櫛	土師器高杯・小型丸底壺・埴輪(円筒・形象・朝顔) 半壊 1976・79年発掘
	カラガネ岳3号墳	長岡京市粟生カラガネ岳	丘陵稜	円墳	横穴式石室		金環・須恵器 半壊
	カラガネ岳4号墳	長岡京市粟生カラガネ岳	丘陵稜	円墳	横穴式石室		須恵器 半壊
	山之下古墳	長岡京市長法寺山之下	丘陵端	古墳		組合式家形石棺	全壊
	堂ノ上古墳	長岡京市長法寺南原	丘陵腹	古墳	横穴式石室	石材露出	全壊
	長法寺南原古墳	長岡京市長法寺南原	丘陵頂 全長60m 後方部幅一辺40m 同高5m 前方部幅28m 同高3m 3段築成 周溝	前方後方墳	堅穴式石室		舶載三角縁神獣鏡・盤龍鏡・内行花文鏡・勾玉・管玉・石臼・石杵・直刀・劍・銅鏡・鐵鏡・斧・鑿・棒状鉄器・土師器・埴輪(円筒・朝顔) 半壊
	力池古墳	長岡京市長法寺力池	丘陵端	古墳	横穴式石室		刀・須恵器 消滅
92	稻荷山1号墳	長岡京市長法寺濁り池谷	丘陵頂 径25m 高1.6m	円墳			須恵器 半壊
	稻荷山2号墳	長岡京市長法寺濁り池谷	丘陵稜	円墳			伝須恵器 全壊
	稻荷山3号墳	長岡京市長法寺濁り池谷	丘陵稜	円墳			伝須恵器 全壊
	走田1号墳	長岡京市奥海印寺走田	丘陵端 径7m 高1.7m	円墳	横穴式石室		半壊
	走田2号墳	長岡京市奥海印寺走田	丘陵端 径6m 高1.6m	円墳			半壊
	走田3号墳	長岡京市奥海印寺走田	丘陵端 径14m 高1.8m	円墳	横穴式石室?		半壊
	走田4号墳	長岡京市奥海印寺奥ノ院	丘陵端	円墳			全壊
	走田5号墳	長岡京市奥海印寺奥ノ院	丘陵腹	円墳		須恵器四注式家形陶棺	全壊
	走田6号墳	長岡京市奥海印寺奥ノ院	丘陵端	円墳			全壊
	走田7号墳	長岡京市奥海印寺明神前	丘陵腹 寂照院門前	円墳		組合式家形石棺	全壊
93	七ツ塚1号墳	長岡京市長法寺北畠	台地 径10m 高2.5m	円墳			半壊
	七ツ塚2号墳	長岡京市長法寺北畠	台地 径5m 高1m	円墳		須恵器甕	半壊
	七ツ塚3号墳	長岡京市長法寺北畠	台地 一辺15m 高2.5m	方墳		箱形木棺4	耳環・ガラス玉・土玉・管玉・切子玉・棗玉・刀・鎌・鹿角装刀子・紡錘車・鏡・須恵器杯・短頸壺・広口壺 全壊 1983・87年発掘
	七ツ塚4号墳	長岡京市長法寺北畠	台地 全長20m以上 後円部径16m 高3m 帆立貝式	前方後円墳		箱形木棺3	銀環・ガラス玉・丸玉・土玉・切子玉・鞍金具・刀・鎌・鹿角装刀子・鏡・鑿・鏡・須恵器杯・甕・提瓶・短頸壺・広口壺・甕・紡錘車 全壊 1983年発掘
	七ツ塚5号墳	長岡京市長法寺北畠	台地 一辺20m 高4m 周溝 陸橋	方墳			須恵器杯・高杯・器台・甕・壺・平瓶・甕・土師器 半壊 1983年発掘
	七ツ塚6号墳	長岡京市長法寺北畠	台地 径9m 高2m	円墳			半壊
	七ツ塚7号墳	長岡京市長法寺北畠	台地	円墳			須恵器杯・高杯・短頸壺・広口壺・装飾付壺 半壊
	光明寺1号墳	長岡京市粟生西条	丘陵腹 光明寺境内	古墳		須恵器四注式家形陶棺	半壊
	光明寺2号墳	長岡京市粟生西条	丘陵腹 光明寺境内	古墳		刳抜式家形石棺	半壊
	光明寺3号墳	長岡京市粟生西条	丘陵腹 光明寺境内	古墳		組合式家形石棺	半壊
94	北平尾1号墳	長岡京今里北平尾	丘陵腹 径4m 高1m	円墳		四注式小型陶棺	金環・須恵器杯・高杯・長頸壺 半壊 1978年発掘
	北平尾2号墳	長岡京今里北平尾	丘陵腹	円墳	横穴式石室	龟甲形陶棺	須恵器高杯・壺 全壊
95	今里大塚古墳	長岡京市天神5丁目	台地 径45m 高5.5m 周濠 前方後円墳?	円墳	両袖式横穴式石室	玄室長6m×幅2.5m	完存 1984・88年発掘
	細塚古墳	長岡京市今里細塚	平地	前方後円墳			全壊
	今里床ノ測古墳	長岡京市今里床ノ測	平地 全長40m 後円部径15m 周濠 帆立貝式	前方後円墳			埴輪(円筒・形象・朝顔) 半壊 1980・81年発掘
96	今里車塚古墳	長岡京市今里床ノ測	平地 全長74.4m 後円部径46.5m 同高5m以上 3段築成 莢石 周濠 帆立貝式			仿製方格規矩獸文鏡・埴輪(円筒・形象・朝顔)・笠形木製品	半壊 1980・81・84・86年発掘
	開田1号墳	長岡京市開田1丁目	平地	古墳			轡・刀・須恵器杯・短頸壺・広口壺・横瓶・提瓶 全壊 1948年発掘
	原田古墳	長岡京市金ヶ原原田	丘陵腹	円墳	横穴式石室		全壊
97	西明寺古墳	長岡京市下海印寺西明寺	丘陵稜 径6m 高1.5m	円墳	横穴式石室		須恵器平瓶 全壊

96	元稻荷古墳	向日市向日北山	丘陵頂 全長94m 後方部一辺52m 同高7m 前方部幅46m 同高3m 3段築成葺石	前方後方墳	堅穴式石室		刀・劍・槍・矛・鎌・斧・鉋・錐・土師器・埴輪(壺・器台)	半壞
	稻荷社古墳	向日市向日北山	丘陵稜 径23m 高2m	円墳				半壞
	狐山古墳	向日市鶴冠井十相	平地 径8.5m 高1.6m	円墳				半壞
	山開古墳	向日市森本山開	平地 径22.5m 墳丘削平周濠	円墳			須恵器杯・甕・子持勾玉	全壞 1975年発掘
	中ノ段古墳	向日市寺戸中ノ段	平地 墳丘削平 周溝	円墳			土師器・須恵器・埴輪(円筒・朝顔・家)	全壞 1978年発掘
97	山畠1号墳	向日市鶴冠井大極殿	台地 径3m以上 周溝	方墳			須恵器・紡錘車・円筒埴輪	全壞 1977年発掘
	山畠2号墳	向日市鶴冠井山畠	台地 周溝	方墳			須恵器	全壞 1981年発掘
	山畠3号墳	向日市鶴冠井山畠	台地 一辺約10m	方墳			須恵器	全壞 1981年発掘
	山畠4号墳	向日市鶴冠井山畠	台地 周溝	方墳			須恵器	全壞 1981年発掘
	山畠5号墳	向日市鶴冠井山畠	台地 周溝	方墳			須恵器	全壞
	山畠6号墳	向日市鶴冠井山畠	台地 周溝	方墳			須恵器	全壞
	山畠7号墳	向日市鶴冠井山畠	台地 周溝	方墳			須恵器	全壞
	南開1号墳	向日市上植野南開	台地 一辺14.5m 周溝	方墳	土壙墓2		土師器	全壞 1976年発掘
	南開2号墳	向日市上植野南開	台地 一辺13.7m 周溝	方墳	土壙墓・土器棺		土師器	全壞 1976年発掘
	北ノ口遺跡	向日市物集女北ノ口	丘陵端	古墳?			土師器・須恵器装飾付器台・円筒埴輪	全壞
	芝山古墳	向日市物集女長野	丘陵腹	古墳?			須恵器	全壞
	大極殿古墳	向日市鶴冠井大極殿	台地 周溝	前方後円墳?			埴輪(円筒・盾)	全壞
	舞塚1号墳	長岡京市今里舞塚	平地 全長39m 後円部径30m 前方部幅15m 周濠	前方後円墳			土師器・須恵器・埴輪(円筒・形象・朝顔)	全壞 1982・83年発掘
	舞塚2号墳	長岡京市今里舞塚	平地 径15m 周濠	円墳				全壞 1982年発掘
	野山1号墳	長岡京市奥海印寺野山	山稜	古墳	横穴式石室			半壞
	野山2号墳	長岡京市奥海印寺野山	山稜	古墳	横穴式石室			半壞
	野山3号墳	長岡京市奥海印寺野山	山稜	古墳	横穴式石室			半壞
	天神山古墳	長岡京市天神1丁目	台地			石材残存		全壞
	塚本古墳	長岡京市開田3丁目	平地 全長30m 後円部径20m 前方部幅20m 周濠	前方後円墳			土師器・須恵器装飾付器台・埴輪(円筒・朝顔・形象)	全壞 1982・84・86年発掘
	神足古墳	長岡京市東神足2丁目	平地 一辺10m 勝龍寺土塁下層	方墳	箱形木棺		直刀・土師器高杯・須恵器杯・高杯・甕・直口壺	全壞 1984年発掘
	塚穴ノ前古墳	長岡京市高台2丁目	丘陵腹	古墳				全壞
	南栗ヶ塚古墳	長岡京市久貝2丁目	平地 一辺16m 周濠	方墳			埴輪(円筒・朝顔・形象)	全壞 1980年発掘
	西ノ口古墳	長岡京市久貝1丁目	平地	円墳				半壞
	伝高畠陵古墳	向日市寺戸大牧	丘陵稜 径65m 高7m 2段築成葺石	円墳				完存 宮内庁管轄
	井ノ内車塚古墳	長岡京市井ノ内頭本	台地 全長37m 後円部径18.5m 同高4m 前方部幅12.6m 同高3m	前方後円墳			埴輪	半壞
	稻荷塚古墳	長岡京市井ノ内小西	台地 全長45m 後円部径28m 同高4.2m 前方部幅20m 同高2.6m	前方後円墳				完存
	小西古墳	長岡京市井ノ内小西	平地 一辺12m	方墳		箱形木棺	須恵器杯・短頸壺・壺	全壞
	南内烟古墳	長岡京市井ノ内南内烟	平地	円墳				全壞
	下東ノ口古墳	長岡京市井ノ内下東ノ口	平地	前方後円墳				全壞
	親王御塚古墳	長岡京市井ノ内下東ノ口	平地	前方後円墳				全壞
	中山1号墳	長岡京市井ノ内中山	丘陵稜 径15m 高2.5m	円墳	横穴式石室	石材露出		半壞
	中山2号墳	長岡京市井ノ内中山	丘陵稜 径15m	円墳	横穴式石室	石材露出		半壞
98	鳥居前古墳	大山崎市明灯寺鳥居前	丘陵稜 全長60m 後円部径40m 同高6.5m 前方部幅32m 同高3m 3段築成葺石	前方後円墳	堅穴式石室		環状乳神獸鏡・巴科形銅器・勾玉・管玉・劍・刀・鎌・短甲・斧・鉋・刀子・埴輪(円筒・朝顔・形象)	半壞 1969・86・88年発掘
99	恵解山古墳	長岡京市勝竜寺久貝	平地 全長120m 後円部径60m 同高8m 前方部幅55m 同高6.5m 段築 葩石周濠	前方後円墳	堅穴式石室		管玉・刀147・劍63・鎌472・ヤス5・蕨手刀子10・埴輪(円筒・形象・朝顔)	完存
	里後古墳	大山崎市明灯寺里後	平地	円墳				全壞
100	境野1号墳	大山崎市下植野境野	台地 径20m 高4m 段築 葩石	円墳			土師器・須恵器・円筒埴輪	半壞
	境野2号墳	大山崎市下植野境野	台地 径20m 高4m 段築	円墳				半壞
	境野3号墳	大山崎市下植野境野	台地 径20m 高4m	円墳				半壞
	境野4号墳	大山崎市下植野境野	台地 径20m 高4m	円墳			須恵器	半壞
101	茅原の塚古墳	伏見区羽束師古川町	平地 径6m 高1m	円墳				半壞
102	梅小路古墳	下京区梅小路	平地	円墳?				全壞

報告書抄録

ふりがな	きょうとたちばなだいがく ぶんかざいちょうさほうこく						
書名	京都橋大学 文化財調査報告2010						
副書名	田口山弥生時代遺跡・山科本願寺跡土壙・山越古墳群・鹿谷古墳群大市支群						
卷次							
シリーズ名	京都橋大学 文化財調査報告						
シリーズ番号	4						
編著者名	一瀬和夫 堂ノ本智子 田口五基 山崎美輪 荒木瀬奈						
編集機関	京都橋大学 文学部文化財学科						
所在地	〒607-8175 京都市山科区大宅山田町34 TEL. 075-571-1111						
発行年月日	2011年3月31日						
所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
田口山弥生時代 遺跡	大阪府枚方市田口山 2丁目	27210	144°38'	34°49'36" 135°41'39"	2010年8月2日～ 2010年8月6日 2010年8月9日～ 2010年8月12日	1050m ²	学術調査
山科本願寺跡土壙	京都府京都市山科区 西野阿芸沢町・西野 様子見町・西野大手 先町	26100	626	34°59'05" 135°48'45"	2010年5月1日～ 2010年5月5日 2010年12月23日～ 2010年12月28日	2875m ²	学術調査
山越古墳群	京都府京都市右京区 鳴滝音戸山町山越	26100	845	35°01'44" 135°41'37"	2010年8月21日～ 2010年8月29日	2760m ²	学術調査
鹿谷古墳群 大市支群	京都府亀岡市市種田野 町鹿谷大市	26206	32	35°01'59" 135°31'35"	2010年8月1日 2010年8月8日 2010年8月13日～ 2010年8月15日 2010年12月5日	2438m ²	学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
田口山弥生時代遺跡	集落跡	弥生時代	小溝、柱穴、 炉跡? 竪穴住居?	弥生土器 石器片 土師器	(発掘調査・測量調査)
山科本願寺跡 土壘	寺院跡	室町時代	土壘 堀	—	(測量調査)
山越古墳群	古墳群	古墳時代	円墳	—	(測量調査)
鹿谷古墳群大市支群	古墳群	古墳時代	円墳 方墳(?) 石室石材	—	(測量調査)

京都橘大学 文化財調査報告 2010

田口山弥生時代遺跡・山科本願寺跡土壘・山越古墳群・鹿谷古墳群大市支群

発行 京都橘大学 文学部

〒607-8175 京都市山科区大宅山田町34 TEL 075-571-1111

発行日 2011年3月31日

印 刷 (有)真陽社

〒600-8475 京都市下京区油小路仏光寺上ル TEL 075-351-6034



京都橘大学

KYOTO TACHIBANA UNIVERSITY